

F83-G57bウ



1200500765345

T.03
76
(3)

死せる魂

下

ゴーゴリ作
平井肇譯

岩波書店



始



F83
G57
a(3)
F83
G57
13



岩波文庫

1725 - 1726

死せる魂

下

ゴゴリ作
平井肇譯



岩波書店

目次

第二部

第一章	テンチエートニコフ	五
第二章	ペトリツシチエフ將軍	六〇
第三章	ペトウーフ、プラトノフ、コスタンジョーグロ、コシカレヨフ	七八
第四章	フロブイエフ、レニーツイン	一四六
第五章	ムラーゾフ	一八四

譯註 二四五





どうして、かり我が國の山間僻地から、いろんな有象無象をほじくり出して来て、我々の生活の身窄らしさや缺點ばかり書きたてるのだらう？ だが、これが抑々作者の持前で、自分自身の缺點に毒されて、我が國の山間僻地から有象無象をほじくり出して、我々の生活の身窄らしさや缺點ばかり書きたてるより他に能がないとしたら、どうも仕様がなではないか？ そこでまたしても我々は、この山間僻地へつれて來られてしまったのである。が、その代り、何といふ山間何といふ僻地だらう！

まるで角櫓や銃眼をもつた際限もない要塞の大壘壁でも見るやうに、丘陵が蜿蜒として千露里以上もつづいてゐる。これらの丘陵は、或は雨水に溝や穴を穿たれて縞の出來てゐる、絶壁のやうな擬石灰粘土質の斷崖となつたり、或は、木の切株から芽をふいた若い藪に蔽はれて、まるで小羊皮をかぶつたやうな、うつくしい圓味をおびた緑の隆起となつたり、さては、どうかした奇

蹟で斧の刃をまぬがれた、鬱蒼たる森の茂みをなして、涯しなき平原の上に雄大な姿を浮かべてゐる。河は、時には兩岸の地形のまにまに、曲つたりくねつたりしてゐるが、時には氣儘に遠く牧場の中へと外れて、そこでうねうねと幾つも曲つて、太陽の反射でバツと火のやうに輝くかと思ふと、白樺や白楊や赤楊の茂みの中へ隠れたり、そこからまた、曲り目ごとに待伏せてゐる橋や水車や堰などと共に意氣揚々として姿を現はしたりする。

或る一箇所で、丘陵の峻しい側面が一際こんもりと樹々の緑の捲毛に蔽はれてゐた。山肌の起伏の不同に従つて人工的にそれぞれ植樹されてゐるお蔭で、南北兩方面の植物が期せずして一堂に會した觀があつた。櫻、樺、山梨、楓、犬櫻、茨、さては蛇麻草の蔓にからまれた針槐だのななかまど等が、互ひに成育を助けあつたり阻みあつたりしながら、丘陵の麓から頂きまで一面に匍ひのぼつてゐた。その上方の、黒々とした茂みの天邊あたりで、地主館の赤い屋根や、その後ろに隠れてゐる百姓小家の棟や鬼板や、地主館の上に設けられた、透し彫の露臺と大きな半圓形の窓のついた高樓などが、樹々の緑の梢といりまじつてゐた。かうして樹々や屋根の集まつてゐる上へひとときは高く、村の古風な教會がキラキラと光る金鍍金の五つの圓頂閣を持ちあげてゐた。各々その圓頂閣の頂きには透し彫を施した金色の十字架が、やはり透し彫を施した金色の鎖に支へられて立つてゐたが、遠目には、まるで紫磨黄金の光りを放つ金塊が、何の支へもなしに空中に浮かんでゐるやうに見えた。さうしたすべてのものが皆さかさまに、梢や屋根や十字架を

下にして、いみじくも河の中へ映つてをり、そこではまた、不恰好な空ろの柳が、或るものは岸邊に、或るものは水中に立つて、だらりと水につけた枝や葉に、黄いろい睡蓮と共に、水面を浮遊する、ぬらぬらした藻をからませながら、宛かもこの素晴らしい影像に見入つてゐるやうであつた。

その眺めも非常によかつたが、上から下へ、邸の高樓から遠くを見晴らした眺めは更によかつた。どんな客にしる訪問者にしる、平氣でその露臺に立ちつくすことは出来なかつた。驚嘆のあまり息までつめて、『おや、これはまあ、何といふ見晴らしだらう！』と、ひたすら感嘆の聲を漏らしたものである。廣袤は涯しなくひろがつてゐた。林や水車場の散在する牧場の向ふには、幾筋かの緑の縞をなして森林が青ずんでをり、森林の向ふには、もう霧のかかり初めた空間をとほして砂地が黄ばんで見え、その先きにまた森林が連なつてゐるが、それはもう、まるで海か、ずつと遠くたちこめた霞のやうに青ずんでゐる。それからまた砂地がつづいて、一段とぼやけてはゐるが、それでもまだ黄いろく見えてゐる。はるか地平線の上には白堊のやうな山々が波状をなして連なり、曇り日ですら、さながら久遠の陽光に照り映えてゐるやうに、白々と輝いてゐた。その目映いばかりに白々とした山の、ところどころ石膏質を帯びた麓には、烟つたやうな暗藍色の斑點が明滅してゐる。それは遠方の村落であるが、もはや肉眼ではそれと見わけられることも出来ない。ただ寺の金色の擬寶珠屋根が太陽の光りにキラキラと閃めくのを見て、それが住民の多い

大きな村だといふことが分つた。すべてが森閑たる静寂につつまれて、微かに聞こえたかと思ふとすぐに空中へ吸ひこまれてしまふあの雲雀の啼鳴すら、この静寂を掻き亂すことはない。要するに、露臺に立つた客は、ものの二時間もその眺めに見惚れた後で、『ああ、これは何といふ素敵なき見晴らしだらう！』といふより他には、言葉も出ないのである。

さて、この村に住んでゐる領主といふのは誰だらう？ 第一この村へ乗りこむのに、こちらからでは、まるで難攻不落の要塞へでも突貫するやうで、とても出来ない相談だから、反対側から乗りこんで行かねばならないが、そちら側から行けば、まばらにある榎の木が、距てなく抱擁でもするやうに、繁つた枝をひろげて懇ろに客を迎へながら邸の正面へと導いて行く。これが先刻後ろから頂きを見せた、くだんの地主館で、今やそれが、一方には屋の棟や、透し彫をした破風をあらはに見せた一連の百姓家を控へ、他方には金色の十字架と、空中にかかつた鎖の、金色の透し彫の飾りを輝かしてゐる寺院を控へて、すつかりまる見えになるのである。さて、この桃源境の持主とは、そも如何なる果報者であらうか？

トゥレマラハンスキイ郡の地主で、名前はアンドレイ・イワーノギッチ・テンチェートニコフといひ、三十三歳の、しかもまだ獨身の幸福な若者である。

そもそも彼は何者で、どんな性質の、どんな持前の人間であるか？ 婦人の讀者方は、須らく隣人に訊き糺されるがよろしい。近頃ではもう、すつかり跡を絶つてしまつた、あの素敏つこく

て喧嘩つばやい、退役の佐官あたりである隣人の一人は、彼のことを、『あいつは正真正銘の畜生さ！』と言つてのけた。十露里ほど離れたところに住んでゐる將軍は、『あれはなかなか賢い若者だが、どうも頭へ知識をつめこみすぎとる。わしが一肌ぬいでやつてもいいのぢやが、なにしろ彼得堡にはいろんな手蔓があるし、その上……』といつて、あとは言葉を濁してしまつた。郡の警察署長は返答を外らして、『あ、さうだ、明日あの男のところへ滞納金を取り立てに行かなくつちやあ！』と言つた。彼の持村の一人の百姓は、旦那はどんな人だと訊かれても、何の答へもしなかつた。して見ると、どうやら彼の評判は、あまり香ばしくないらしい。

公平にいつて、彼は決して悪い人間ではなく、ただのらくらしてゐるだけであつた。世間にはかういふのらくらしてゐる人間がざらにあるのだから、テンチェートニコフがのらくらしてゐるからとて、別に不都合はないではないか？ それは兎も角、ここへ彼の、他の連中の日常と一向かはらない日常生活の一頁を、行きあたりばつたりに掲げておくから、それからして彼の性格がどんなもので、また彼の生活が、彼を圍繞する美にどんなに一致してゐるかを、一つ讀者自身で判断して頂きたいものである。

彼は毎朝、大變おそく眼を覺ますと、半身を起こしたまま、長いこと眼をこすりながら寢臺の上に乗つてゐた。不幸にして彼の眼は小さかつたので、こするのにも並々ならぬ長時間を要した譯である、その間ちゆう下男のミハイロは、洗面器とタオルを捧げて、扉口に待つてゐた。この

可哀さうな下男のミハイロが一時間も二時間も待ちくたびれた擧句、ちよつと臺所へ行つて、また引つ返して來ても、且那は矢張りまだ眼をこすりながら寢臺の上に坐つてゐるのだ。やつこのことで寢床から起きあがると、彼は顔を洗つて、部屋着をひつかけ、お茶と、珈琲と、ココアと、まだおまけに搾りたての牛乳を飲むために客間へ出て行く。それを彼は、どれもこれも少しづつ敷りながら、矢鱈に麵麴屑をこぼしたり、ところ嫌はず無闇に煙管の灰を撒きちらす。かうして彼はお茶を飲むだけに二時間も坐つてゐた。しかもそれだけでは足りないで、冷めた茶碗を手に取りると、それを持つて内庭に面した窓際へにじり寄る。と、その窓の下では、來る日も來る日も次ぎのやうな一幕が演じられてゐるのだ。

まづのつけに酒倉番のグリゴリーが、家政婦のベルフィーリエヴナに向つて、『ちえつ、この煩せえ、碌でなしの女つちよ野郎め！ちつとそのへらず口でも慎んだらどうだい、いやな婆あめ！』といふやうな毒舌を浴びせかける。

「ふん、お前なんか、これでも喰らへだ！」と、その碌でなしのベルフィーリエヴナは、馬鹿握りを相手の鼻の先きへ突きつけながら喚き立てた——この女は、錠までおろして自分の手許にしまつてゐる乾葡萄だの求肥餡だのといつた、いろんな甘い物には目がなかつたけれど、するとなすことが頗るがさつたつた。

「お前はあの執事にだつて絡まりやあがるでねえか、ちえつ、納屋の牝鼠めが！」

「さうさ、執事の野郎もお前とおんなじやうな泥坊野郎だからさ。お前たちのことを且那様が御存じないと思つてるのかい！且那様はそこにござらつしやつて、ちやあんと何もかも聞いてござらつしやるんだよ。」

「どこに且那がござらつしやるんだい？」

「そうら、窓のところ坐つて、何もかも見てござらつしやるでねえか。」

實際、主人は窓際に坐つて始終の様子を見てゐたのである。

この騒ぎに輪をかけて、母親に頭をひつ殿かれた下男の子供が火のついたやうにぎやあぎやあ泣きたてる、さうかと思ふとボルゾイの牡犬が、臺所からチラと顔を覗けた料理人に煮湯をぶつかけられて、尻を地面にこすりつけながら、きやんきやんと悲鳴をあげる始末で。一口にいへば何もかもが我慢のならないほどぎやあぎやあわんと喚きたててゐるのである。主人はそれを見ながら平氣で聞き流してゐた。が、いよいよそれが堪らなくなつて、何事にも手がつかなくなると、初めて人をやつて、騒ぐにしてももう少し靜かにしろと言はせた。

晝飯までの二時間は、大眞面目で著述に没頭するため、自分の書齋へ閉ぢこもつた。その著述といふのは、社會的、政治的、宗教的、哲學的等、あらゆる見地から全露西亞を抱擁し、現代が我が國に課した困難な懸案と問題を解決して、我が國の偉大なる將來を明瞭に規定せんとするものであつた。一言にしていへば、萬事、現代人が自から好んで己れに課す、あの方法と形式に

従つてゐたのである。ところがこの歴大な計畫も、どちらかといへばただ腹案だけにとどまつてゐた。ペンばかり矢鱈に噛みくだかれて、紙の上にはいろんな樂書の繪が現はれるだけだ。やがてそれも傍らへ押しやつて、その代りに書物を取りあげると、もうそれを晝飯の時まで決して手放さない。スープやソースを燻つたり、焼肉や、時には饅頭さへばくつきながら本を眼からはなさないものだから、或る料理は冷めてしまひ、或る料理は手もつけずに下げられてしまふ。それについて、煙管を片手に珈琲を飲んだり、一人で將棋をさしたりする。それから夕飯までいつた何をするのか——どうも、そいつは何とも申しあげかねる。が、どうやら、全然なにもしないやうである。

で、こんな具合に、廣い世間にただ獨りの三十三歳の若者は、部屋着にくるまつただけでネクタイ一つつけず、じつと坐つたまま、飽きもせず時を送つてゐた。彼は散歩もしなければ、出歩きもせず、二階へあがらうとも思はなければ、窓をあけて室内へ新鮮な空氣を入れようともしなかつた。だから、この土地を訪ねた者が感嘆措く能はざる村の美しい景色も、肝腎の主人にとつては、まるで存在しないのも同然であつた。かういへば、てつきり讀者は、アンドレイ・イワーノギッチ・テンチュートニコフが、この露西亞には決して跡を絶たない、昔は怠け者とか、のらくら者とか、無精者とかいふ名前を頂戴してゐたが、今は何といふのか、實際わたしも知らない、あの一種の人間の部類に屬してゐることを悟られるだらう。かういふ性格は抑、生まれつきの



《かえねでるやしつらざごて見もかも何てつ坐にろことの慰らうモ》

ものであるのか、それとも假借することなく人間を縛りつける痛ましい境遇の所産として、後天的に形づくられるものであらうか？ それに對する答へとしては、彼の少年時代の生立と學歴を物語るに若くはなからう。

すべての點から見て、彼は熟れ有爲な人材になることを約束されてゐたやうであつた。利發で半ば瞑想的な性質の、どこか病弱らしい十二歳の少年として、彼はそのころ非常に秀れた人物を校長にいただく學校へ入學した。青年の偶像であり、教師仲間の驚異的であつた、比類稀なるアレクサンドル・ベトロギッチは、人の本性を見抜く鋭い感覺を惠まれてゐた。どんなに彼が露西亞人の特質を知つてゐたことだらう！ どんなに彼が子供に理解を持つてゐたことだらう！ 又どんなによく子供を感奮させたことだらう！ 何か悪いことをしても、後で自から進んで彼の許へ白狀しに來ない惡戯つ兒は一人もなかつた。そればかりではない、嚴しい叱責を受けながらも、さうした惡戯つ兒は決してしよげもせず、昂然として校長室を退出するのである。その叱責の中には何かしら人を鼓舞するやうな、何かかう『前へ、前へ！ 躓いたことなど氣にしないで早く立ちあがれ！』とでも言つてゐるやうな聲が聞こえたものである。彼は生徒に向つて行儀をよくせよなどは決して言はなかつた。彼はいつも、『私の要求するのは智能で、それ以外には何も要求しない。賢い人間になりたいと思ふ者には、惡戯などしてゐる暇がない。だから惡戯は自然に消滅せざるを得ない』と言つてゐた。果せるかな、惡戯は自然に跡を絶つたのである。賢く

ならうと努力しない生徒は、仲間から輕蔑された。年ばかり行きながら愚鈍で馬鹿な連中は、ずつと年下の者から無禮極まる綽名で呼ばれても、相手に指一本觸れることが出来なかつた。『それはあんまりですよ！』と多くの人が言つた。『それでは利口な子供が圖に乗つて、いよいよ横柄になりやしませんかね。』すると校長は、『いや、大丈夫です』と言つて、『私は出來の悪い生徒は長く引きとめて置きません。さういふ子供には普通科だけで澤山ですが、出來のよい生徒には高等科をやらせることにしてゐますからね。』成程さういへば、出來のよい生徒はみな高等科へ進んだものである。たいていの惡戯には精神的特質の開發の根源があると見て、彼は別にそれを阻止しなかつたばかりか、人の體内に隠れてゐる病源を確實に知るために發疹が醫者に大切であるやうに、自分には子供の惡戯が必要だとさへいつてゐた。

生徒といふ生徒がどんなに彼を慕つたことだらう？ 子供が自分の兩親に對する愛着も決してこれほどではあるまい。いや、前後の辨まへもなく夢中になりがちな、狂氣^{まが}じみた青春の情火もまさかこれほど強くはあり得まい。死ぬが死ぬまで、ずつと晩年に至るまで恩義を忘れぬ教へ子たちは、もう遠の昔に故人となつたこの類ひ稀な教師の誕生日には、杯を舉げ、眼をつむつて恩師をしのんで涙にかきくれたものである。ほんの少しでも彼に激勵されると、もう凜々として勇氣が沸き、喜びに胸が震へて、誰にだつて負けるものかといふ功名心が、鬱勃として沸いてくるのであつた。彼は出來のよくない生徒は長く引きとめておかなかつた。さういふ子供のためには

短期の學級が設けられてゐた。それに反して、よく出来る生徒は二倍の課程を踏まなければならなかつた。さういふ選りぬきの生徒を收容する最終のクラスは、他の學校のそれとは全然趣きを異にしてゐた。このクラスに於いて彼は、他所では輕々に見過ごされてゐるところのものを専ら生徒に要求したのである。即ち、決して他人を嘲らず、どんな揶揄嘲弄にも耐へ、馬鹿は大目に見て、腹を立てたり、いきり立つたりせず、どんな場合にも仕返しをしようなどは考へないで、冷靜水の如き心を毅然として常に保つことの出来る、最も高尚な智性の涵養を主眼としたのである。それで、一個の人間をよく強固な人物たらしめ得るやうな手段は、直ちにとつて實地に應用し、絶えず自からそれを生徒に試してみるものであつた。ああ、なんと彼は人生學に通じてゐたことだらう！

彼は教師をあまり多く使はないで、科目の大部分を自分自身で受持つてゐた。彼は氣取つた術語をつかつたり、大袈裟な學說や意見をひけらかすことなく、學問の精髓を授ける術を心得てゐたので、年端もゆかぬ子供にも、なるほど學問といふものは大事なものだといふことがよく腹へ入つた。彼の選擇した學問は、専ら人間を一人前の國民として仕上げるに必要なものばかりであつた。大部分の講義は、少年の前途には何が待つてゐるかといふやうな説話から成り立つてをり、彼が廣く青年の活舞臺を巧みに描き出して見せたため、子供たちはまだ學校の机にもたれてゐながら、氣持や考へでは、もういつぱし勤務生活を送つてゐたのである。彼は何一つ包み隠さな

つた。人生の行路に横たはる苦惱や障礙を、また人間の前途に立ちふさがる試煉や誘惑を、少しも隠さず赤裸々に子供たちに話して聽かせた。恰かも彼は身を以つて貴賤貧富のあらゆる職業を經てきた人のやうに、よろづの物事に通じてゐた。はやくから著しく功名心が發達してゐたためか、それともこの非凡な教師の眼の中に、露西亞人にはお馴染で、その敏感な天性に不思議な奇蹟を齎らすところの、あの『前へ、前へ！』といふ言葉を少年に向つて叫びつづける或るものが宿つてゐたためか、何れにしても少年たちは、はやくから艱難のみ探し求めて、少しでも難儀な、障害の多い、より多く精神力の發揮を必要とするところで活動することをひたすら渴望してやまなかつた。首尾よくこの學級を卒業するのはごく少數であつたが、その代り志操堅固な百戰錬磨の強者のみであつた。勤務生活に入つてからも、彼等はどのやうな不安定な地位にもよく踏みとどまつた。これがもし他の者なら大多數が、それも彼等より遙かに利口な連中までが、その任に耐へ得ないで、つまらない蹉跌からすべてを棒に振つてしまふか、さもなければ、うつかりしてゐる中に收賄漢や詐欺師の手に乗せられてしまふのである。しかし、彼等はぐらつかかなかつた。人生を知り、人間を知り、あくまで叡智に恵まれた彼等は、不良な連中の上にもまで力強い影響を及ぼした。

功名心に燃える少年の胸は、只管この高等科へ入るといふ考へだけで久しく鼓動したものである。我等のテンチエートニコフにとつて果してこの教師にまさるものがあり得たらうか！とこ

ろが折りも折り、ちやうど彼がその待望の選科へ編入されたばかりの時に、この非凡な教師はぼつくり死んでしまったのである！ ああ、それがテソチエートニコフにとつてどんなに大きな打撃であつたらう！ どんなに怖るべき最初の喪失であつたらう！ どうやら彼にはそれが……。學校の様子はすつかり一變してしまつた。アレクサンドル・ペトロギッチに代つて、フォードル・イワーノギッチ某といふ人物が校長の椅子についた。直ちに彼は、變に外形的な秩序にばかり重きを置いて、大人にしか要求できないやうなことを子供に向つて要求し始めた。兒童の不羈奔放な態度が、彼には何か我儘のやうに思はれたのである。それで恰かも前校長の意志に逆らふやうに、自分は智能や學習には何の意味も認めない、ただ品行の良いことだけを眼目にする、そもそも最初の公言したものである。ところが不思議なことに、フォードル・イワーノギッチが眼目にした生徒の操行は却つて良くならなかつた。こそこそした悪戯が始まつた。晝間はおとなしく秩序整然としてゐるが、夜になるとどんちやん騒ぎが持ちあがるのである。

授業の方も何だか變なものになつてしまつた。新らしい見解を持ち、新らしい視角と觀點をそなへた新顔の教員が招聘された。彼等は無闇矢鱈にいろんな新らしい術語や新語を生徒たちに浴びせかけ、講義の中で論理的な理窟だの、新らしい發見への追隨だの、各自の熱烈な傾注の情だのを示したが、しかし悲しい哉！ 授業そのものに生命が宿つてゐなかつた。彼等の口から出る生命のない講義は、屍臭芬々たるものであつた。一口にいへば、何もかもがあべこべになつて

しまつたのである。學校當局者や上長に對する尊敬の念は地を拂ひ、生徒は教師や講師を嘲弄し、校長をフェーディカだの白麵鮑だの、その他いろんな綽名で呼んだり始めた。全く子供らしくない悪戯が行はれるやうになり、果ては多くの生徒を除名にしたり放校處分に附さなければならぬやうな事件まで持ちあがるに至つた。ものの二年と経たないうちに、以前の學校の面影などはまるでなくなつてしまつた。

アンドレイ・イワーノギッチはおとなしい性質であつた。校長の家の眞向ひに如何はしい婦人を一人圍つてゐる仲間たちの夜中の亂痴氣騒ぎにも加はらねば、坊さんがお人好しなのにつけてお寺で亂暴をはたらく徒黨にも與しなかつた。否々、彼はおぼろげながら靈魂は天に根ざしてゐることを感得してゐたのである。で、誘惑には負けなかつた。けれど快々として彼は樂しまなかつた。功名心には既に目覺めてゐながら、彼には活動の分野がなかつた。なまじ功名心など目覺めなかつた方がよい位だ。教壇で眞赤になつて熱をあげてゐる教授連の講義に耳を傾けながら彼は、無闇に昂奮などしないで、平易な言葉で諄々として説き聽かせてくれた亡き先生のことを想ひ出してゐた。彼はどんな課目でも、どんな講座でも片つばしから聽講した！ 醫學でござれ、哲學でござれ、法律でござれ、また、教授が三年がかりでその序説と、獨逸の某々都市の自治體の發達とを、やつとのことで講義することが出来たといふ、おそろしく大掛りな文化史でござれ——何ひとつ聴きもらさなかつた！ しかしさうしたものは皆、或る不態な形をなして彼の

頭の中に片影を留めたに過ぎなかつた。生まれつき聰明な彼は、どうもこんな教授法は間違つてゐるとは感じてゐたが、ではどうすればよいかといふ段になると、やはり何も分らなかつた。で、ともすればアレクサンドル・ペトローギッチのこの夢想ひ出されて、身も世もあらぬ悲しさに茫然とかきくれたものである。

しかし、青春には未來があるだけでも幸福である。卒業が近づくにつれて彼の胸は躍つた。「これはまだ人生ではない、ただ人生に對する準備にすぎないのだ。本當の人生は官廳勤務にあつてそこにこそ功業が待つてゐるのだ」と、彼は獨言ちた。で、あらゆる訪客の驚嘆してやまないあの美しい村にも一顧だにくれず、兩親の墓に暇乞ひもせず、彼はすべての野心家の例にならつて一散に彼得堡へ飛び出したものである。彼得堡といへば、周知の如く、我が國の血氣に逸る若者たちが、官途に就き、立身出世して、あつばれ高位高官の地位を贏ち得るために、ただ何の色香もない氷のやうに冷酷な虚偽虚飾の社會的教養の殻を身につけるために、露西亞のあらゆる隅々から、わんさと集まつて來るところである。ところが、このアンドレイ・イワーノギッチの覇氣も、高等官四等の伯父オヌーフレイ・イワーノギッチに出鼻を挫かれてしまつた。伯父は、何は扱置き手蹟のすぐれてゐることが一番大切で、それなくしては大臣にも大官にもなれるものではないと斷言した。非常な骨折りと伯父の助力のお蔭で、それでもやつと彼は或る省の或る局に奉職することになつた。一國の運命を双肩に擔ふ帝國最高の大官連がここで會議をするのではない

かと思はれるやうな、寄木張りの床にワニス塗りの卓子のずらりと並んだ、壯麗な明るい大廣間へ案内された時、騒々しくベン音を立てながら一方へ首を傾げて頻りに書き物をしてゐる立派な紳士の群れを目撃した時、また彼自身が卓子の前に坐らされて、取敢ず、どうやら故意と選ばれたらしい、つまらない内容の書類（何でも半年から訴訟のつづいてゐる三留の金子に關する文書であつた）を寫すやうにと宛がはれた時、経験のないこの青年は實に變挺な氣持に襲はれた——彼には自分のまはりに坐つてゐる紳士連がまるで小學生のやうに思はれたのである！ 搦て加へて、中にはさも事務を執つてゐるやうな振りをして、審査中の夥しい書類の中へこつそり隠して愚劣な翻譯小説を讀んでゐたが、局長の姿が現はれるたびに、ぎよつとして震へあがるのだからいよいよ以つて學校生徒そつくりである。どうも彼には何もかもが變で、學校の課業の方が現在の執務より遙かに眞面目なやうに思はれ、勤務に對する準備の方が勤務そのものより餘程すぐれてゐるやうな氣がした！ 彼は學校時代のことを思ひ出して悲しくなつた。すると、不意にアレクサンドル・ペトローギッチの面影がまざまざと眼の前に浮かんで來て、彼は今にも泣き出しさうになつた。部屋がぐるぐると廻りだして、役人連や卓子のごつちやになつてしまつた。が、やうやく彼はその一時的な昏迷に打ち克つことが出來た。「いや、と我れに返つて彼は心中で言つた。『最初はどんなにくだらなく思はれても、兎に角やつて見よう！』そこで彼は心神を引緊めて、他人に倣つて勤めて行かうと決心した。

人生いづこに悦樂のないところがあらう？ まして彼等は、外見こそ粗剛陰鬱ながら花の彼得堡に住んでゐるのである。街頭には零下三十度といふ厳しい極寒がピシピシと凍みわたり、朔風の子、白魔の吹雪は歩道を吹き消し、人に眼つぶしを喰はせ、毛皮の襟や、人の口髭や、毛むくぢやらの牛馬の鼻面に容赦なく白いものを振りかけながら吼えたけつてゐるが、卍巴の如く飛び交ふ雪をすかして、上の方のどこか四階あたりの小窓にさへ愛想よげに灯影が映してゐる。居心地のよい小部屋では、つつましやかなステアリン蠟燭の光りを受けて、サモワールの静かにたぎる音を聞きながら、身も魂もほのぼのとするやうな四方山の話に花が咲き、神がこの露西亞に恵み給うた我等の天才詩人の明朗な詩集が繙かれて、青年の若き胸は南國の空の下でも望まれないほど高潮した情熱に打ち顛へるのである。

テンチェートニコフもやがて勤務に慣れてきたが、しかしそれは初め彼が想像してゐたやうな生活の最大目的にはならないで、何やら第二義なものになつてしまつた。結局、時間の區切りぐらゐにしか役立たず、却つて勤務外の寸時が大切に思はれたのである。そろそろ四等官の伯父が甥の奴もどうやら見込みがあるなと思ひかけたところで、その甥が不意に期待を裏切つてしまつた。アンドレイ・イワーノギッチにはずるぶる友達もあつたが、その中に謂ゆるねぢけ者と呼ばれる種類の人間が二人あつた。それは眞に不公平なことばかりか、彼等の眼に不公平と見える事柄は、何によらず無關心に看過することが出来ないといつた、妙にいらいらとして落着きのない

連中であつた。根は善良な人間のだが、することなすことが無茶で、自分に相當横着なことをしてゐながら、そのくせ他人に對しては一步も假借することの出来ない手合ひで、この二人が火のやうな辯舌と、社會に對する高尚ぶつた憤慨ふりとでアンドレイ・イワーノギッチに強い感化を與へた。彼等はアンドレイ・イワーノギッチの胸に尖つた神経といらいらした氣持とを喚びさまして、前には彼が心にとめようともしなかつたやうな、いろんな些細なことにまで一々關心を持たせるやうにしたのである。彼には、その壯麗な大廣間を占めてゐるいろんな課の中の或る課の課長たるフォードル・フォードロギッチ・レニーツィンといふ人物が急に面白くなつた。そこで矢鱈に相手の缺點ばかり穿鑿しはじめた。彼にはこのレニーツィンが、目上の人と話をする時にはまるで砂糖のやうな甘つたるい顔をするくせに、目下の者に向ふと忽ち苦蟲を噛みつぶしたやうな澁い顔をするし、又あらゆる小人の例に洩れず、祝日に挨拶を述べに來ない連中を一一おぼえておき、玄關番の訪客名簿に名前の載つてゐない連中には必らず復讐しかへしをするやうに思はれた。それがためにアンドレイ・イワーノギッチはその課長に對して蟲唾の走るやうな嫌惡の情を感じた。彼は惡魔にでも唆かされたやうに、フォードル・フォードロギッチに對して何かちよつかいを入れてやらうと思つた。で、一種獨得な喜びをもつて機會をねらつてゐたが、つひにその望みを達したのである。なんでも或るとき、彼は遮二無二その課長に喰つてかかつたため、その筋から謝罪をするか、さもなければ辭職せよといふ内命を受けた。彼はすぐさま辭表を呈出し

た。四等官の伯父が吃驚仰天して駈けつけるなり、「いやはや！飛んでもない、アンドレイ・イワノギッチ！これはまた何としたことだ！いい鹽梅に折角ありついた出世口を、ただ課長が氣に喰はないからといつて、むざむざ棄ててしまふなんて！以つての外だよ！一體お前はどいふ料簡なんだ！そんなことを一々氣に懸けてゐたら、役所勤めなんて誰にだつて出来るもんぢやない。さあ心を入れかへて、驕慢な自尊心は振りすてて課長と仲直りをして来てくれ！」と哀願するやうに言つた。

「問題はそこぢやありませんよ、伯父さん。」と甥が言つた。「僕は課長に謝罪するのは何でもあります。もともと僕が悪いんです。假にもあの人は課長でせう、それをあんな風に喰つてかかるといふ法はありませんからねえ。退職の理由はかうなんです。僕には別に勤めがありません。三百人の農奴と、不檢束に放任された領地と、それを管理してをる執事の馬鹿とです。僕の代りに別の男が役所で書類を寫すことになつても大して國家の損失にはなりません。三百人の農奴が租税を拂はなかつたら、それこそ國家の大損害ですからねえ。僕は、伯父さんはどうお考へになるか知りませんが——一個の地主で、その……勤めたるや……。もしも僕が、自分に委ねられた三百人の人間の運命をよく守り、改善することに力を盡して、几帳面この上もない、眞面目でよく働く三百人の臣民を國家に供給することが出来たなら、どうして僕の御奉公が一課長たるレニーツイン輩のそれに劣るといへませう？」

四等官は吃驚して開いた口が塞がらなかつた。このやうな滔々たる辯舌は豫期しなかつたからである。少し考へてから、彼はこんな風に口を切つた。「ぢやが、それにしても……どうしてそんな……田舎になど埋もれてをられるものか？一體、どんな社交界があるといふんだね、あんな……？兎に角、こちらでは、往來を歩いてゐても將軍や公爵に出つくはすことが出来るんだ。また何處を歩いても……ちやんと……それ、瓦斯の明りが皎々とついで、文明開化の歐羅巴が眼の前にあるといふものぢや。それが田舎では、眼につくものといへば、どいつもこいつもどん百姓か土臭い女ばかりぢやないか。酔狂にもほどがある、何を好んであたら一生を、そんな無智昧な生活に埋めてしまふ氣になつたんだね？」

しかし躍起になつた伯父の説法も甥にはなんの効果もなかつた。そろそろ田舎が、何かかう暢氣な避難所のやうにも、また思索と冥想をふんだんに味はせてくれるところのやうにも、また有益な活動の出来る唯一無二の領域であるやうにも思はれはじめたのである。彼はすでに農業に関する最新刊の書籍まで集めてゐた。結局こんな話があつてから二週間ばかりの後には、はやくも彼は幼年時代を送つた土地の近在へとさしかかり、來客や訪問者が褒賞おく能はざるあの風光明媚な村から程遠からぬところまでやつて來てゐた。新しい感覚が彼の身内で羽搏きをした。これまで永いあひだ表へ顔を現はさなかつた往昔の印象が彼の心に甦つてきたのである。既にその邊のことは大方忘れ果ててゐたので、彼はまるで初めて來た旅人のやうな好奇の眼を睜つて美し

い景色に見とれた。と、その時、何故とは知れず彼の胸は俄かに波だちはじめた。道が狭い峡谷を通つて森々と生ひ繁つた大きな森の茂みへ入り、上にも下にも、足下にも頭上にも、三百年からの樹齡で、幹の太さが三抱へもある榎の巨木が、白楊の背よりも高く伸びた樅や檜や黒楊と入り混つてゐるのを目撃した時——『これは誰の森だ?』といふ彼の問ひに對して、『テンチェートニコフ様のもので』と答へられた時、また道が森を通り抜けて、やまならしの林だの、川柳や猫柳の老木だの若木だのを傍へに、遙か向ふに蜿蜒たる高地を見はらす牧場の中を走り、同じ河に別々の場所に架つた二つの橋を渡つて、その河を或は右に、或は左に見送る時、また『この牧場や川沿の土地は誰のものだ?』といふ問ひに對して、『テンチェートニコフ様のもので』と答へられた時、やがて道が坂を登つて坦らかな高地にさしかかり、一方には燕麥や大麥小麥などのまだ刈り取つてない五穀畠が、また一方には、さつき通つたところがすつかり、小さく遠景に融けこんで見渡された時、さては行手がだんだん小暗くなつて、緑の絨毯でも敷きつめたやうにすつと村までつづく野良の上にまばらに生えてゐる大きく枝をひろげた木々の蔭へ次第に道がかくれ、透し影のある百姓小屋や石造の地主館の赤屋根が見え隠れして、お寺の金色の屋根がキラリと閃めいた時、激しく波だち初めた胸が、誰に訊くまでもなく何處へ着いたかを知つた時——積りに積つた感慨がつひに次ぎのやうな言葉となつて迸り出た。『ええ、おれはこれまで何といふ馬鹿だつたらう? 運命がこのやうな地上の樂園の主に指定してくれたのに、あたらおれは死んだ畜類の

なすり役に身を落してゐたのぢやないか? 教育も受け、頭腦もみがいて、百姓どもの福祉を増進したり、所領全體を改善したり、支配者であると同時に裁判官であり治安の擁護者であるところの多種多様な地主の義務を果すために必要な知識をたくはへながら、その地位を無智な執事に委せておいて、一面識もなければ氣風も人柄も分らないやうな人間どものいざこざを缺席裁判でやみくもに片づける仕事を選んだり、自分の所領の實際の管理を他所に、これまで一度も足を踏み入れたことのない、従つてどうせ不合理な馬鹿げた間違ひばかりしか仕出かせないやうな、千里も先の地方の、紙上の架空的な管理を選ぶなんて!』

ところが、もう一つの光景が彼を待ち伏せてゐた。領主のお歸りだと聞いて、百姓たちが支關先へ集まつて來たのだ。目もあやなる村人たちの、シュミーズや、キチカだのポライカだのといふ頭飾りや、百姓外套や、繪に描いたやうな髯もぢやの顔が彼を取り巻いた。『ああ、わしらの恩人様が! わしらのこと思ひだして下されただ……』さういふ聲が起こつて、彼の祖父や曾祖父のことを憶えてゐる老人や老婆が、手ばなしで泣きだした時には、彼も堰きあへず涙ぐんできました。そして心の中で、『こんなにもおれが愛してもらへるとは! どうしたことだらう? これれが一度だつて顔も見せず、彼等のために何一つしてやらなかつた報いだらうか?』と思つた。で彼はこれからは彼等と仕事や苦勞を共にしようと思つた。そこで彼は家政を引受けて自から采配を振ふことにした。百姓が地主のために働く日數をへら

し、百姓に自由な暇をふやして、賦役を減少してやつた。馬鹿な執事は解雇した。何かから何まで自分で事にあたり、野良にも出れば、穀打場にも麥乾小屋にも姿を見せ、水車場にも顔を出せば船着場にも出張つて、傳馬船や平底船の荷積から出帆にまで立會ふ始末なので、つい誘はれて怠け者もこそそと働きたすといふ有様であつた。けれど、それも長くはつづかなかつた。百姓といふやつはなかなか悪賢いもので、なるほど旦那は小まめに立ちまはつて、いろんなことを一手に引受けようとはしてゐるけれど、それでは一體どういふ風にするかといふ段になると、まだそれはつきり會得がゆかず、學者ぶつたことは言つても、いつかう板についてゐないことを、すぐに見抜いてしまつた。結局、旦那と百姓とはお互ひに全く理解を缺いて、有體にいへば調子が合はず、足竝をそろへることが出来なかつたのである。

そのうちにテンチュートニコフは、どうも自分の島では百姓たちの島のやうに物がよく出来なことに気がついた。早目に種子を播かせても發芽がずつとおくれる。しかも百姓たちはどうやら耕作にも念を入れてゐるやうだ。その場についてゐた彼は、皆がよく働くからといつてウオツカを一杯づつ振舞つたほどだ。百姓たちのところではもう疾うにライ麥が穂を出し、燕麥の實がはじけて、稷の株がぐんぐん大きくなつてゐるのに、自分のところでは、やつと莖がふくらみかけたばかりで、花穂もまだ出来てゐない始末だ。つまるところ、いろんな特典を與へてもらひながら百姓どもが主人を誤魔化してゐたことに気がついた。それで相手を詰つてみたけれど、こん

な返答を受けるが落ちであつた。「どうして、はあ、旦那様、わしらがお邸の利益を思はねえことがありますだ！ 旦那様もわしらが耕したり種子を播いたりしてゐた時、よく働くと仰つしやつて、ウオツカを一杯づつ頂かせて下さつたでせう。」さう言はれては返す言葉もなかつた。

「では、それが今、どうしてかう出来が悪くなつたのだね？」と旦那は糺明した。「さあ、どうでがすかねえ？ きつと、それあ下に根つきり蟲がついたのでがすよ。それにひどい夏でがしたからね、てんで雨ちふものが降らなかつたもの。」

それにしても、百姓たちの作物には根切蟲もつかず、雨も變な具合に、百姓たちにだけ都合よく、繭にでもなつて降つたと見えて、邸の島へは一雫も落ちなかつたとは訝しな話だと彼は思つた。

それにも増して、村の女房連の捌きがまた厄介であつた。彼女らは絶えず賦役の過重を訴へて、少しでも強制労働を逃れよう逃れようとした。まったく奇怪な話である！ 彼は麻布だの漿果だの菌だの胡桃だのといった貢物を全く免除し、かうでもしてやつたらその暇を家事に向けて、繭物をしたり、亭主に小まな服装をさせたり、野菜島の一枚もよけいに作るだらうと思つて、他の仕事も半減してやつたものだ。ところが、案外な結果になつてしまつた！ ぐうたらな安逸と掴みあひと、無駄話と、すつたもんだの唾みあひとが矢鱈に女房連のあひだに起こつたため、宿六どもは悲鳴をあげて、「旦那様、どうかうちのじやじや馬を取りしづめて下せえ！ まるで羅利

のやうに暴れくさつて、生きた空もありましねえだよ！」と、絶えず彼のところへ尻を持ちこむ始末である。

彼は心を鬼にして一つ手厳しくしてくれようかとも思ふのだが、何がさて手厳しくなど出来る筈はない。女房の方は女房の方で、いかにも穢ならしい、一體どこで拾ひ集めて来たかと思はれるやうな、ひどい襤褸つきれを軀に引つけてやつて来ては、さも病氣で弱つてゐるやうに、せいぜい言つて見せたものである。「歸つてくれ！　せめてわしの眼につかないところへ行つてくれ！　まあ何とかなるよ！」さう言つて氣の毒なテンチェートニコフが見てゐると、門を出て行つた病人は、すぐその後で蕪のことが何かで隣りの女と掴みあひを始め、丈夫な男にも出来さうもない勢ひで相手の脇腹をどやしつけたものだ。

彼はまた百姓たちのあひだに一つ學校を設けて見ようと思ひたつたが、その結果がお話にならないナンセンスに終つたため、すつかり面目を失つて、馬鹿なことを考へたものだと後悔した。人を裁いたり紛擾を調停するに當つても、例の教授連から教はつたやうな難かしい法律の知識では何の役にも立たなかつた。一方が嘘をつけば一方が出鱈目をいつてゐる始末で、何のことやらさつぱり分つたものではない！　結局、法律の知識や哲學の書物よりは、單に人間を知るといふことが遙かに必要だと悟つた。そして自分には何かしら缺けてゐるとは氣がついたけれども、さてそれが何であるかは見當もつかなかつた。とどのつまりは、よく有勝ちな結果になつて、百姓

には旦那が理解されず、旦那は百姓に認識を缺くといふ譯で、百姓は主人に楯をつき、主人は百姓を曲解するといふ有様になつた。結局、それやこれやで主人の熱意も著しく冷却してしまつた。作業に立會つても、いつかう身が入らなかつた。草刈りの鎌がサクサクと靜かに音をたててゐるやうが、禾堆が積みあげられてゐるやうが、荷積がされてゐるやうが、間近で百姓仕事か圓滑に進んでゐるやうが、彼の眼はぼんやり遠くを眺めてゐた。遠方で作業が行はれてゐる時には彼の眼は手近に對象物を見つめるか、何處か脇の方の川の曲り角に向けられる、その岸を嘴と足の赤い鷺——勿論、人ではなく鳥である——が歩いてゐる。彼の眼は物珍らしさうに、その鷺が川岸で魚を一びき捉まへて、さてそれを呑みこんだものか呑みこむまいものかと思案でもするやうに十文字にそれを嘴にくはへたまま、それと同時に、まだ魚にありつけないもう一羽の鷺が、既に魚を捕へた方の鷺をまじまじと見つめながら遠くに仄白く浮かんでゐるのを川沿にじつと眺めてゐる様子に見入つてゐた。でなければ、まつたく眼をとちて廣大無邊な大空へ頭をもたげながら、野の香氣を胸いつばい吸ひこんで、空からも地上からも、到るところから沸きおこる鳥の聲が、互ひに調子をととのへた一つの混聲合唱となつて響きわたるのを恍惚として聴き入つたものである。ライ麦の中では鶉が囀り、草の中では水鶏がたたき、頭の上を紅鷺が飛びまはりながら頻りに囀り、ぱつと立ちあがつた沼鳴が頓狂な聲で鳴き、雲雀は陽光に姿を没しながら頓音をこぼし、鶉は蒼空たかく三角形の隊列で飛びながら、チューバのやうな鳴聲を立てる。あたり全體が音になつ

て響きわたる……。造物主よ！御身の世界は、俗塵によごれた街道筋や都會から程遠い僻地や片田舎では、まだなんと素晴らしいことだらう！だが、それも彼には退屈になつて来た。間もなく野良へ出ることもふつつりやめ、部屋に閉ぢこもつて、執事の報告を聞くことさへ拒んだ。初めの間は隣人の中でも、軀からだぢゆうに煙草のやにの浸みとほつた退職の驃騎兵中尉だの、せいぜい際物のパンフレットや新聞から掻き集めた一知半解の知識で臆面もなく獨斷を下す中途退學の大學生だのがやつて来た。が、それも彼にはうるさくなつた。彼等の話が何となく淺薄なやうに思はれだして、馴々しく相手の膝を叩いたりする歐羅巴風のあけすけな態度や、いやにべこべこしたり、出しやばつたりするのが、何れもあまりに露骨で見えすいてゐるやうに思はれ出した。彼はさういふ連中とは絶交しようと思ひ、それをかなり辛辣にやつてのけたのである。丁度どんなことでも淺薄な話さへさせておけばとても愉快な、もうそろそろ今では影をひそめつつあるが、大佐の標本で、同時にはしりの新思想かぶれの先驅者たる、ワルワール・ニコラーエギッチ・ウイシユネポクロモフといふ男が、政治や、哲學や、文學や、道徳や、刺つさへ英吉利の財政状態についてまで、存分にまくしたてようとしてやつて来た時、テンチュートニコフは居留守をつかつて不在だと言はせておきながら、不謹慎にも小窓から姿を見せたのである。客と主人とはばつたり顔を見合はせてしまつた。いふまでもなく一方は齒をくひしりながら、「畜生つ！」と唸つた。こちらも口惜しまぎれに、「豚め」といふやうな言葉で應酬した。これで二人

の交際はお終ひになつてしまつた。それ以來、彼のところへは誰ひとり來なくなつた。

結局、それを喜んで、彼は専ら露西亞に關する大著述の腹案に没頭した。彼がどんな風にしてその著述の腹案をねつてゐたかは、既に讀者の御覽になつたとほりである。條理を無視した奇妙な手順が定められてゐた。とはいへその夢を破られて、彼がはつと眼を覺ますやうな瞬間もない譯ではなかつた。郵便で新聞や雑誌が届けられて、既に官界に於いて華々しい成功を贏ち得たり、または學問その他百般の問題に對して目覺しい貢獻をなした舊友の名前が、活字になつて戰つてゐるのがふと眼につくやうな時、人知れぬ淋しい悲哀が心をついて、自分の無活動に對するほろ苦い、物悲しく侘しい無言の悔恨に、そぞろ胸を噛まれるのであつた。さういふ時、彼には自分の生活が厭はしく穢らはしいものに思はれた。まざまざと彼の眼の前へ過ぎ去つた學生時代が甦つて、アレクサンドル・ベトロヴィチの面影が忽然として生けるが如く現はれた……。彼の兩眼からはハラハラと涙の玉がこぼれた……。

抑、この慟哭は何を語るものだらう？彼の惱める魂がそれによつて、秘められた傷ましい悩み——つひに一身を確立することも出來ず、自身のうちに早くから芽ばえてゐた内面的な高尚な人格を完成し得なかつたこと、少年時代から不遇と闘ふ試煉を缺いてゐたため、萬難に逢つていよいよ心身を鍛へ、ますます品性を陶冶するといふ卓越した境地に到達し得なかつたこと、豊富に持つてゐた偉大な感受性も、焼きすぎた金屬のやうに融解してしまつて、最後の仕上げを完つ

し得なかつたこと、また、あの非凡な教師が、彼にとつてはあまりに早く世を去つて、絶え間なき狐疑逡巡のために動揺する力や、反撥力のない優柔な意志を鞭撻したり、あらゆる階級の露西亞人がその身分と職業を問はず、到るところで渴望してゐる、あの『前へ、前へ！』といふ激勵の言葉を、目覚しい叫びを以つて魂に呼びかけてくれる人が、今や廣い世界に一人もゐないこと——さういつた嘆きを表白したのであらうか？

我々の露西亞魂から生まれた祖國の言葉で、あの『前へ、前へ！』といふ全能の掛け聲を我々にかけることの出来る人はそも何處にゐるだらう？ 我々の天性のあらゆる力と素質と、あらゆる深さとを知つて、魔法のやうな合圖ひとつで我々を高い生活へ向はせることの出来るのは何人だらう？ 恩義を知る露西亞人が、どんな涙と、どんな愛を以つて、その人に酬いたことだらう！ しかし、星うつり時かはれども、舊態依然として露西亞は、未熟な青年者流の恥づべき懶惰と不條理な行動にとりまかれてゐるばかりで、その全能の言葉を發し得る人物を神は與へ給はぬのである！

或る事情が將にテンチュートニコフの心を覺醒させ、今少しでその性格に變革を齎らさうとした。ちよつと戀愛事件に似たことが起こつたのである。が、結局それも空しき結果に終つた。彼の所領から十露里ばかり離れた隣村に一人の將軍が住んでゐたが、この人は、前にも述べたやうに、テンチュートニコフのことを餘りよく言つてゐなかつた。その將軍はいかにも將軍らしい生

活を送り、客好きで、隣人が敬意を表するために自分を訪問してくれることは喜んだが、自から答禮に出かけるやうなことはせず、囁れ聲で話し、書物を読み、ちよつと類のない變つた娘を一人持つてゐた。彼女は何かかう生活そのもののやうに生々としてゐた。

娘の名はウーリニカといつた。彼女はちよつと風變りな育て方をされた。露西亞語を一言も知らない英吉利人の保母が彼女を教育した。彼女は、稚くして母を喪つた。父には娘の面倒をみる暇がなかつた。そのくせ無闇に可愛がつて、甘やかし放題に育てた。我儘一杯に成長した子供の常として、彼女は至つて我意が強かつた。不意に赫つとなつて彼女が美しい額に險惡な皺皺をよせたり、急きこんで父と諍ひをしたりするのを見ると、誰でも彼女を大變なやんちゃ娘と思ふだらう。が、彼女がいきりたつのは、何か不公平な話を耳にするか、誰かが過酷な取扱ひを受けたことを聞いた時に限られてゐた。彼女は自分自身のために諍ひをしたり辯解したりすることは決してなかつた。その怒りも當の相手があるのを見ると、忽ち解けてしまふのである。一言無心を乞はれでもすると、相手の誰彼を問はず、後先きの考へもなく、持合せの金を財布ぐるみポンと投げ出してしまふのだ。彼女には何處かひたむきなところがあつた。彼女が物を言ふ時には、顔の表情から、聲の調子、手の動かし方まで、何もかもが彼女の氣持に追隨して變化するやうであつた。着物の襲までが宛かも同じ方向へ靡くやうに思はれて、彼女自身も、今にも自分の言葉を追つて飛んで行きさうな氣配を見せたものである。彼女には何ら腹藏するところがなかつ

た。自分の思ふことは人前を憚らず平気でぶちまけたから、彼女が一旦いはうとした限りそれを阻止することは断じて出来なかつた。また彼女獨得の、人を魅するやうな一種特別な歩き方にはどこまでも大膽な、豁達自在の趣きがあつたので、誰でも思はず道を譲らずにはゐられなかつた。彼女の前では、どんな腹黒い人間でも妙にどきまぎして、物も碌々いへなかつた。最も口巧者な臆面のない男でも、彼女に對しては自由に口がきけず、すつかりまごついてしまふ。そのくせ内氣なほにかみやが、一生のうち誰ともかうまで打解けて話したことはないと思はれるくらゐ寛ろいで彼女と話しこんでしまふ。そして會話の初つ鼻から、彼にはどうも彼女が以前にどこかで知合ひであつたやうに思はれ、その顔貌も確かにどこかで見たやうな氣がするのだ。それは遠い遠い少年の日に、どこか親戚の家で愉しい夜會が催されて、子供の群れが噱々として遊戯に耽つてゐた折りのことのやうに思はれた。そしてその後ながい間、人間の分別くさい年齢が物憂いものに思はれるのだつた。

彼女とテンチェートニコフの場合にも丁度それと同じことが起こつた。名狀し難い新らしい情緒が彼の魂を充たした。退屈な彼の生活が一瞬間パツと光り輝いたのである。

將軍は初めテンチェートニコフを大變歓迎して懇ろにもてなしたが、どうも二人の間はしつくり折合はなかつた。二人の會話はいつも議論に終つて、どちらにも一種不快な感じを残した。それといふのも、將軍は抗辯や反駁をうけるのが大嫌ひだつたのに、一方テンチェートニコフがま

たひどく神經質な男だつたからである。無論、彼が娘のためにかなり父親に讓歩してゐたことはいふまでもない。で、將軍の親戚にあたる二人の婦人が將軍の邸へお客にやつて来るまでは、彼等のあひだの平和も保たれてゐた。お客といふのは、ポルドゥイレフ伯爵夫人と、ユジャキン公爵の娘にあたる老嬢とで、どちらも先帝の御代には宮中で女官を勤めてゐた人たちで、今でも宮廷と多少の繋がりを持つてゐるため、従つて將軍もこの二人には少しばかりべこべこしてゐたのである。この婦人客が到着したその日から、テンチェートニコフには、將軍が自分に對してめつきり冷淡になり、自分を無視するか、さもなければ口のきけない動物でも扱ふやうな態度をとりだしたやうに思はれた。將軍は彼に向つて、『おい君』とか、『いいかい』とか、『ねえ、おい』とか、時には『お前』といふやうな、かなりぞんざいな言葉を使った。たうとうそれでテンチェートニコフもむつとした。彼は齒を食ひしぱり、沸きたつ胸をおさへながら、それでもじつと怵へて、『將軍、あなたの御好意を感謝いたします。あなたが（お前）といふやうな言葉を使つて多大の友情をお示し下さるので、私の方からもあなたに（ねえ君）とでも申しあげなければならぬところですよ。しかし、かう年齢がちがひましては、そんな馴々しいお交際も出来かねますよ』と馬鹿丁寧な物柔らかな調子で言つたが、さすがに彼の顔は紅潮でむらになり、肚の中は煮えくりかへつてゐた。將軍は面喰らつてしまつた。言葉と考へをまとめながら、彼は、自分はそんなつもりで『お前』といふ言葉を使つた譯ではない、老人には、時と場合によつては若い者に向つて

「お前」といふことも許されてゐるなどと、稍しどろもどろになつて辯解した。(彼は自分の官等については何も言はなかつた。)

いふまでもなく、それ以來二人は仲違ひをしてしまひ、折角の戀も序の口でお終ひになつてしまつた。一瞬間テンチェートニコフの前に輝いた光りも消え失せて、その後に来た黄昏はひとしほ暗かつた。何もかもが、この章の初めで讀者の御覽になつたとほりの、ごろごろ怠けてばかりゐて何一つしない生活に變つてしまつた。家の中もごたごたと醜態をさらけ出してゐた。帯が塵埃と一緒にまる一日ぢゆう部屋の真中にころがつてゐた。股引が客間にまでほつたらかしてある始末。長椅子の前の洒落た卓子の上には、まるでお客に御馳走でも出したやうに脂染みたズボン吊りが載つかつてゐるといふ爲體で、あまりにも彼の生活がだらしなく無精なものになつたため、終ひには召使どもが彼を尊敬しなくなつたばかりか、雌鷄までが彼を馬鹿にして、嘴で突つつきかねない有様であつた。ペンを手にして、何時間も彼は紙の上に、菱の實や、家や、百姓小屋や、荷馬車や、三頭馬車などの繪を、ただ漫然と描いてゐたりした。が、時には本人の知らないあひだに、すつかり夢中になつたペスが、きやしゃやな輪郭に、はきはきした、人を射るやうな眼差をそなへ、前髪を上へかきあげた可愛らしい顔を、ひとりで描いてゐることがあつた。それが恐らくどんな美術家にも描けさうにない、他ならぬ彼女の肖像であることを發見して、我ながら吃驚したものである。で、いよいよ彼は憂鬱になり、この世にはもう幸福などといふものは

ないと信じて、その後は一層面白くない内氣な人間になつてしまつた。

アンドレイ・イワーノギッチ・テンチェートニコフはかういふ心理状態にあつた。ちやうど彼が、例によつて例の如く、ぼんやり外を眺めるために窓際へ腰をおろしたとき、不思議なことに、いつものグリゴリーやベルフィーリエヴナの聲は聞こえないで、何やら外がざはめいて、それはしてゐるのに氣がついた。血洗ひの小僧と掃除婦とが駈けよつて門を開けた。と、門の中へ三頭立の馬が、ちやうど凱旋門についてゐる彫刻か繪とそつくり、鼻面を一面は右へ向け、一頭は左へ向け、一頭は正面を向いて駈けこんで来た。その馬の頭越しに、だぶだぶのフロックを着て手巾を帯がはりに締めた馭者と従僕とが馭者臺に坐つてゐるのが見える。その後ろには、縁無帽にマントを着用した一人の紳士が、虹色の襟巻をまいて乗つてゐた。馬車が玄關の前へ横づけになると、はつきりそれが、彈機つきの輕快な半蓋馬車であることが分つた。外見の非常にきちんとした紳士が、まるで軍人のやうな敏捷さで、ひらりと入口の階段へ飛び降りた。

アンドレイ・イワーノギッチはぎよつとした。彼は相手を、その筋の役人だと思つたのである。茲でちよつと述べておかなければならないが、青年時代に彼は或るくだらない事件にかかりあつたことがある。その頃、いろんなパンフレット類を矢鱈に讀んでゐる驃騎兵あがりの二人の哲學者と、大學を中途で退學した美學科生と、破産した賭博者とか、老耄れの共濟組合員で、これもまた賭博者であるが辯口の達者な、或るいかさま師の主宰で、一種の慈善團體の設立を計畫した。

この結社は、西はテムス河の流域から東はカムチャッカにいたるまでの、あらゆる人類に恒久的福祉を齎らすといふ、おそろしく廣汎な目的をもつて組織されたものであつた。多額な基本金が必要とあつて、太つ腹な會員から非常に莫大な寄附金が集められた。その金が一體どうなつてしまつたかは、主宰者の他には誰にも分らない。この團體へ彼を引つ張りこんだのは、例のねぢけ者の部類に屬する二人の友人で、もともとは善良な人間であつたが、科學だの、文明だの、人類に對する未來の惠澤だのを祝福する名目で、盛んに杯を擧げ擧げする中に、たうとう本物の醉漢よぼれになつてしまつたのである。テンチェートニコフは間もなくハツと氣がついて、この仲間から身を退いた。が、既にその團體は貴族にとつては餘りかんばしくない或る別な行爲に手を伸ばしてゐたため、後には刑事事件を引き起こしてしまつた……。そんな譯で、その團體からは脱退して、一切の關係を絶つてはゐたけれど、それでもテンチェートニコフがまだすつかり安心しきつてゐられなかつたのも強ち不思議ではない。何となく彼は良心を咎められてゐたのである。で、今も、さつと扉の開いたのを見て、思はずぎよつとした。

しかしその客がいかにも恭しく、首をやや横へ傾げながら、おそろしく氣持のいいお辭儀をして、簡單ではあるが極めて明瞭な言葉で、自分にもう久しい間、或る用件と好奇心とに促がされて露西亞ぢゆうを遍歴してゐる者だと名乗り、我が國はいろんな産業が盛んで土壤の種類がさまざまであることはさておき、實に素晴らしい物象に富んでゐると言ひ、この村の繪のやうな景

色にはすつかり心を惹きつけられてしまつたが、どんなに景色がよくても、春の出水と懸路のためには思ひがけなく馬車が破損して、鍛冶屋と職工の手間を要するやうな事態にさへ立ち至らなかつたら、こんなお門違ひな訪問をして、お騒がせするのではなかつた、しかし自分の馬車にこんな故障が起こらなかつたとしても、御主人に親しく敬意を表する喜びを回避することは出来なかつたであらうと述べるに及んで、テンチェートニコフの怖れは忽ち消滅してしまつた。

これだけの口上を終ると客は、いかにも人の心を蕩かすやうな氣持のいい身振り、眞珠貝の卸をはめたキッドのしやれた半長靴を穿いた片足で足摺りをして、かなりでつぷり肥つた軀からだのくせに、まるで護謨毯のやうに身輕に、ちよつと後ろへ跳びさがつた。

すつかり安心したアンドレイ・イワーノギッチは、これはきつと研究に熱心な博物學の教授か何かで、珍らしい植物か化石のやうなものでも採集する目的で露西亞ぢゆうを歩きまはつてゐる人に違ひないと断定した。そこでさつそく彼は、及ばずながら何でも御用だてするから、自分の家の職人を、車大工でも鍛冶屋でも自由に使つて欲しいと言ひ、どうか御自分の家同様、ゆつくり寛ろいで頂きたいと懇望して、客を大型のヴォルテール椅子に掛けさせると、やをら相手から自然科学の話でも聽かうもの身構へをした。

ところが、客は寧ろ己れの精神上の問題について語つた。彼は自分の一生を、海上に漂ひながら背反つねなき風に翻弄される小舟に譬へて、轉々として職はかへなければならず、正義のため

にはいろんな辛い思ひも耐へ忍んだが、敵方から命までつけ狙はれるやうな際疾い目に逢つたことも度々であると述べて、尙その上に、寧ろ彼が實際家であることを示すやうな、いろんな話をした。ひとくさり話を終つたところで、彼は白いバチスト麻のハンカチを取り出して、アンドレイ・イワーノギッチがつひぞこれまで聞いたこともないやうな、大きな音をたてて涙をかんだ。よくオーケストラの演奏中などに、チューバがかういふ猛烈な音をたて始めると、まるでそれはオーケストラの中ではなく、こちとらの耳の中で我鳴りたててゐるやうな気がする。丁度それと同じやうな音が、眠つたやうな邸内の部屋々々を驚かして響き渡つた。直ぐそれに次いで、バチスト麻のハンカチを巧みに振つた拍子にオーデコロンの薫りがブーンとあたりに擴がつた。

讀者は恐らくこの客が、永らく閑却されてゐた我等の尊敬すべきパーヴェル・イワーノギッチ・チチョフに他ならないことを疾づくにお氣づきのことと思ふ。彼はちよつと老けてゐた。どうやらこの年月が太平無事には過ぎなかつたものと見える。着てゐるフロックも少し古びたやうに思はれ、例の半蓋馬車や馭者や従僕や馬や馬具までが、さんさんに酷使されて疲れはててゐるやうに見える。どうやら財政の方もあまり羨ましい状態ではなささうである。が、彼の顔つきや禮儀になつた作法ものごしには、何の變りもなかつた。立居振舞にかけては前よりも一層調子がよくなつた位で、安樂椅子に腰をおろしながらも、一段と巧者に脚を前で十字に組むやうにしたものである。言葉の調子には一入やはらかみ加はり、用語や表現に一層用心ふかい節度が守

られて、身を持する上に一段と手堅さが増し、萬づに一層の如才なさが加はつてゐた。カラーや胸當は雪よりも白く清潔で、旅の途中であるにも拘らず、彼のフロックには埃ひとつついてゐない、——そのまま真直ぐに命名日の祝ひに招かれてもいい位だ。兩の頬や頤には綺麗に剃刀が當てられて、その氣持のいいふつくらしした圓味には、盲人でない限り、つくづく見惚れずにはゐられなかつた。

がらりと邸内の様子が一變した。これまでずつと鏡屏をおろして、物の文目も分らなかつた家の半分が、にはかに日の目を拜んで明るくなつたのである。新らしく光りを受けた部屋々々には、いろんなものが並べられて、間もなく面目を一新した。寢室に當てられた部屋には夜の身じまひに必要な調度が持ちこまれ、書齋にきめられた部屋へは……いや、それより先きにこの部屋には三つの卓子があつたことを知つておかなければならない——一つは書き物卓子で長椅子の前にあり、次ぎのは骨牌卓子で窓と窓との間の姿見の前にあり、三つめのは隅置卓子で、寢室へ通じる扉口と人の住まない廣間へ通じる扉口との間の隅に置いてある。今度その廣間は控室に使はれることになつたが、いつもは廢物の家具などの置場になつてゐて、ここ一年ばかりのあひだ誰ひとりそこへ足を踏み入れた者もなかつたのである。この隅置卓子の上には旅行鞆から取り出した衣類がのせられた。即ちフロック用のズボンだの、眞新しのズボンだの、鼠色のズボンだの、天鷲絨と縞子との各々二着づつの胸著だの、フロックコートだのである。それを皆、一つ一つ、上へ

上へとピラミッド形に積み重ねて、その上から絹のハンカチが蔽つてある。扉口と窓との間の別の隅には、長靴がずらりと並べてある——一足のはあまり新らしくないが、他の一足は眞新した、エナメル塗りの半長靴もあれば、寢室用の上靴もある。それにも矢張り人目を憚るやうに絹のハンカチが掛けてあるので、一向そんなものがあるやうにも思はれない。書き物卓子の上には手廻しよく、例の宝箱だの、オーデコロンの壇だの、カレンダーだの、どちらも第二巻の小説本が二冊だの——といったものが實にきちんと並べられてゐる。清潔な下着類は、前から寢室にあつた簞笥の中へ片づけられ、洗濯をしなければならぬ下着類は一包みにまとめて寢臺の下へ突つこまれた。空になつた旅行鞆も矢張り寢臺の下へ押し込まれた。盗賊を威すために道中のお供をしてゐる長劔も、寢間へ持ちこまれて、寢臺の手近の釘に掛けられた。何もかもがおそろしく綺麗さつぱりと整頓された。どこに一つ、紙きれや羽毛のやうなものも落ちてゐなければ、塵ひとつ見あたらない。何だか、あたりの雰圍氣までが高尙になつて、いつもちやんちやんと下着を取換へ、日曜ごとに風呂へ行つて濡れた海綿で軀をこすることにしてゐる、健康で生々した男の、氣持のいい匂ひがあたり立ちこめた。下男のベトールシカも例の體臭でいつとき控室の空氣を濁しかけたが、當然の處置として、さつそく臺所へ移された。

初めのうち、アンドレイ・イワーノギッチは、客のために自由を束縛されたり、無理やり生活様式を變へさせられたり、折角いい鹽梅に運んでゐる日程をぶち毀されたりして、自分の自主獨

立が犯されはすまいかと懸念したが、結局それも取越苦勞に過ぎなかつた。我等のパーウエル・イワーノギッチはどのやうにでも巧く調子を合はせることが出来るといふ、變轉自在の異常な順應性を發揮した。彼は主人の哲學的な悠長さに贊意を表して、それでこそ百歳の長壽を約束するものだと言つた。また隱遁生活についても、それこそ人間に偉大なる思想を養はせる所以であるなどと、勝手なことを言つて旨く撥を合はせた。圖書室を一瞥すると、全般的に書籍といふものを稱揚して、人間を無爲安逸から救ふ武器だなどと言つた。言葉数は少ないけれど、言ふことにそつがなかつた。また動作に於いては一層剗切な舉措を示した。ちやうど頃合ひに顔を出し、ちやうど頃合ひに座をたつた。主人が口をききたくなさうな時には、決して餘計なことを質問して相手を困らせなかつた。唯々として將棋の相手もすれば、諸々として沈黙を守りもした。相手がぼかりぼかりと煙管から煙の輪を吹いてゐるやうな時には、こちらは煙管を噛まない代りにその場にふさはしい手すさびを工夫したものである。例へば衣囊から黒金象眼の嗅煙草入を取り出して、左手の二本の指でしつかり挟み、それを右手の人差指でくるくると、まるで地球が地軸を中心に廻轉するやうに廻したり、さもなければ口笛を吹きながら、ただぼんぼんとそれを指で敲いたりしてゐるのである。要するに主人の邪魔になるやうなことは決してしなかつた。『おれは初めて一緒に暮らすことの出来る人間に出合つたといふものだ。』と、テンチエートニコフは心に呟やいた。『どうも一體にかういふ心掛のいい人間は稀だ。なるほど世間には、頭がいいと

か、教養があるとか、善良だとかいふ人間は幾らでもあるけれど、いつ見ても心にむらがなく生涯を共に暮らしても喧嘩をする必要のない人間が、さう世間にざらにあるかどうか、そいつはちよつとおれには分らない。が、この男こそは、おれが見たさういふ人間の第一人者だ。』テンチェートニコフは自分の客をこんな風に見たのである。

チチコフはまたチチコフで、かういふ物静かでおとなしい主人の邸に暫らくでも逗留することになつたのがひどく嬉しかった。ジプシイのやうな生活にも少々飽きが来てゐた。この美しい村で、田園や早春の景色を眺めながら、たとへ一ヶ月でも休養することは、痔疾の豫防だけにでも確かに有効だつた。

こんないい安息の場所を他に見つけることは困難である。長いあひだ寒さに抑へられてゐた春が、にはかにその絢爛の装ひを展開しはじめ、到るところに生命の躍動が感じられた。森のところでどこにある空地は早くも浅みどりを帯びて、若草のすがすがしいエメラルドのあひだに黄いろい蒲公英が點々と花をもたげ、紫がかつた茜いろの翁草がたをやかに首をかしげてゐる。蟻子やいろんな昆蟲の群れが沼澤地に姿を現はし、次いで水蜘蛛が我れ劣らじと水の上を走りだす、それにつれてあらゆる種類の鳥が四方八方から枯蘆の中へ集まつて来た。何もかもが近々と身を寄せて、互ひに相手を眺めあふのである。急に地上が賑やかになり、森は眠りから醒め、牧場は騒々しく聲をたてはじめる。村では圓舞がはじまつた。廣大無邊な遊樂の巷が展けたのである。

緑の色の鮮やかさ！ 空氣のすがすがしさ！ 園で唄ふ鳥の啼聲！ 樂園である、萬象の狂喜と亂舞である！ まるで婚禮でもあるやうに、村は擧つて唄ひどよめいてゐる。

チチコフはずるぶん歩きまはつた。漫ろ歩きや散歩によいところが到るところにあつた。時には、廣々と下に擴がつてゐる盆地を見渡すことの出来る、平らな高臺の上へ歩を進めたが、その盆地には此處彼處に、出水の名残りの大きな湖水がまだ残つてをり、その水面にはまだ葉をつけない森が島のやうに點々として黒ずんでゐた。また時には密林や、木の生繁つた谷間へ足を踏み入れた。そこには、ために天日も暗くなるばかり縦横に飛びかしてガアガア鳴きたてる鴉の巢を夥しくしよはされた木々が、ぎつしりかたまつてゐた。すつかり乾いた地面を通つて、船着場へ行つてみることも出来た。初荷の豌豆や大麥や小麥を積みこんだ船が、今しも纜を解くところで、同時に、一方ではその川の水が、やうやく仕事を始めたばかりの粉磨場の水車に耳を聳するばかりの音をたててぶつかつてゐた。また春先の野良仕事を見に出かけて、新らしく耕やされた畠が緑の中に黒い縞をつくり、種蒔く人が胸に掛けた篩を時々かく叩きながら、種子を餘分には一粒も外方へこぼさないで、手づかみでまんべんに蒔いてゆくのを眺めたりした。

チチコフは到るところへ顔を出した。彼は執事とも意見を闘かれば、百姓や粉屋とも討論した。彼はありとあらゆることを、あれはどうだ、これはどうだと、一から十まで穿鑿して、どんな風にこの所領が經營されてゐるとか、穀物はどれほど賣却されるとか、春と秋とに磨粉の賃金

はどれ位とれるとか、また百姓はめいめいどういふ名前で、誰と誰とが親戚で、どこで牝牛を買ったとか、豚を何で養なつてゐるとか、さういふことを残らず探知した、つまり何ひとつ聞き漏らさなかつたのである。また百姓がどのくらゐ死んでゐるかを調べてみたが、それは大した數ではなかつた。彼は利口な男だから、アンドレイ・イワーノギッチの所領が餘りうまく經營されてゐないことを忽ち見破つた。いろんな手落ちや、怠慢や、横領の跡が到るところに窺はれ、泥酔者もなかなか少なくなかつた！そこで彼は、(テンチェートニコフといふ男は、何といふ馬鹿だらう！) こんな素晴らしい領地をこんな風に投遣りにしておくなんて！ やりやう一つで、年收五萬留ぐらゐは平氣であげられるのに！)と思つた。

かうして散歩をしてゐる間に、彼は度々、自分もいつかはこんな身分になりたいものだ——勿論、今すぐといふ譯ではないが、例の肝腎な一件がうまく成功して、まとまつた金子をいよいよ手に握つた曉には——おれもかういふ所領の、暢氣な持主になりたいものだといふ心に思つた。勿論、さういふ時、彼の胸にはすぐに、商家か、又は他の富裕な階級の出で、多少は音楽の素養もある、色白で瑞々しい若い女房の姿がまざまざと浮かび上るのであつた。またチチコフといふ姓を永久に傳へる義務を負ふ若い世繼の姿も想像にのぼつた——元氣な男の子と可愛らしい女の子が一人づつか、それとも男坊主が二人に、娘つ子の二人や三人はあつても構はない。それでこそ自分といふものが、決して影や幻のやうにこの世を過ぎ去つたのではなく、ちゃんと實際に生き且つ存

在してゐたことを世人に認めさせ得る所以であり、祖國に對しても何ら疚しからぬ譯である。そこで彼は、もう少し官等に箔がつくのも悪くない——さしづめ五等官にでもなれば、まづ押しも押されぬ立派なものだ……などと蟲のいい妄想まで描きはじめたものである。散歩の間などには、よくいろんな考へが人の頭に浮かんでくるもので！ 屢々それが人間を現在の退屈な境地から連れ出して、ちよいちよい引つぱつたり、からかつたりして、いやが上にも空想をつのらせる、それがまた、到底そんなことは實現するものではないと、自分でちやんと承知してゐながら當人にはとても愉快なのである！ 村はパーウエル・イワーノギッチの召使たちにもやはり氣に入つた。彼等も主人と同様にその村に馴染んだ。ペトゥルシカは酒倉番のグリゴリーと直ぐ好い仲になつてしまつた。尤も、初めのうちはどちらも、いやに勿體ぶつて、堪らないほど佛頂面を向け合つてゐたものだ。ペトゥルシカがいろんな土地を見て來たといふ見聞の廣さでグリゴリーを煙に巻くと、グリゴリーの方は、ペトゥルシカがまだ行つたこともない彼得堡の話を持ち出して、相手を即座にやりこめた。それならといつて、こちらが自分の行つたことのある場所の遠さを出して、勢力を挽回しようとするれば、グリゴリーは、どんな地圖を調べたつて決して見つかつこない地名を擧げて、そこまで行くには三萬露里の餘もあると應酬した。だから、パーウエル・イワーノギッチの下男はすつかり面喰らつて、開いた口もふさがらず、邸ちやうの召使に忽ち笑ひものにされた。が、それでも結局二人は、いとも親密な間柄になつたので

ある。村端れに、百姓たちから小父さん小父さんと呼ばれてゐる禿頭のピーメンが、アターリカといふ名前でもつた居酒屋を開いてゐた。その居酒屋に二六時中二人の姿が見られた。二人はすつかりそのお馴染になつた——下々でよくいふ、居酒屋の常連になつたのである。

セリファンにはセリファンでまた別の樂しみがあつた。夕方ともなれば、村では娘たちが唄をうたひながら、解けつほぐれつ春の圓舞を踊つた。今ではもう大きい村ではさつぱり見かけなくなつた、あのすらりとして血統の正しい純粹な露西亞娘の姿に彼はすつかり現つを抜かして、幾時間も我れを忘れてぼんやり立ちつくしたものである。どの娘が一番美しいのか、ちよつと口では言はれない——どれもこれも頸や胸が眞白で、みんなばつちりして潤んだやうな眼を持ち、歩く姿は孔雀のやうで、編髪を腰の邊まで垂れてゐる。さうした娘たちの白い手を両手につないで一緒に踊りながら緩やかに動く時、または他の若者たちと組になつて、娘たちの方へどつと一列に押し寄せてゆくと、娘たちの方からも矢張り一列になつてこちらへ押し寄せながら、『主さん、わしらに花髻お見せ！』と、笑ひさざめきながら、聲を張りあげてうたひ出す——靜かな黄昏があたりをつつみ、遠く河向ふまで響いて行つた歌聲が、物悲しい飴となつてこちらへ戻つてくる——さういふ時、彼は自分で自分の氣持が分らなかつた。それからといふものは、寢ても覺めても、朝に夕べに、絶えず彼には、自分が白い手を両手に握つて、圓舞を踊つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

チチョフの馬どもにも矢張り新らしい住ひが氣に入つた。鞍馬や「職員」はもとより、あの横着な連錢茸毛までが、テンチュートニコフの家に逗留することを少しも退屈だとは思はなかつた。素晴らしい燕麥はあてがはれるし、厩舎の設備が圖抜けてよく出来てゐた。各々別々の仕切りへは入れられてゐたけれど、籠のあひだから互ひに仲間を見ることも出来、もしどれか一頭が、一番遠くにゐる相棒に何か嘶いてみるやうな氣紛れでも起こしたとすれば、相手はすぐそれに應じて斷き返すことが出来た。

要するに誰も彼もが、まるで自分の家にもゐるやうに、すつかり落ちついてしまつたのである。ところでパーウエル・イワーノギッチは、彼が限なくこの廣い露西亞を遍歴してゐる用向き——つまり死んだ農奴の一件については、縦へまるきりの馬鹿を相手に取引する場合でも、極めて慎重に周到の用意をめぐらしたものである。しかもテンチュートニコフは、兎にも角にも本を讀んでゐるし、哲學的な思索にも耽り、何故？ どうして？ と萬事にかけて一々くどく、その理由を究めたがる男だ。『いや、これは寧ろ、別な方面に端緒を見つけた方がよささうだ。』チチョフはさう考へた。彼は時々、住込みの召使たちと無駄口を叩きながら、その間に、彼等の主人が前にはよく隣り村の將軍の家へ出入してゐたこと、その將軍には娘が一人あつて、どうやら主人はその娘に思召しがあり、娘の方でもこちらの主人を憎からず思つてゐたらしいが……その後、何か面白くないことがあつて、ふつたり遠ざかつてしまつた、といふやうなことを嗅ぎだし

た。それに彼自身も、アンドレイ・イワーノギッチが始終ペンや鉛筆で描きちらす誰かの顔が、どれもこれも皆同じ顔であることに気がついた。

或る日のこと、晝飯のあとで、彼はいつものやうに銀の嗅煙草入をくるくると指でまはしながら、「アンドレイ・イワーノギッチ、あなたのところには、ちゃんとは何から何まで揃つてゐますが、ただ一つだけ足りないものがありますねえ」と、言つた。

「と仰つしやるのは何ですか？」と主人は、煙の輪を吐き出しながら、訊きかへした。

「生涯のお伴侶ですよ。」とチチコフが言つた。

アンドレイ・イワーノギッチは何とも答へなかつた。話はそれで跡切れてしまつた。

チチコフはその位のことでは僻易せず、次ぎの機会を選んで、今度は夕飯の前に四方山の話をしなから、出しぬけに「ねえ、アンドレイ・イワーノギッチ、ほんとにあなたは御結婚なすつたらしいでせう。」と言つた。

それに對してテンチエートニコフは、まるでそんな話をするのは不愉快だといはんばかりに、一口も返事をしなかつた。

それでもチチコフは僻易れなかつた。三たび機会をつかんだ彼は、夕飯の後でまたこんな風に切りだした。「段々と御事情を拜察してみますのに、どうも矢張りあなたは、御結婚なすつた方がいいと思ひますねえ。このままですと憂鬱症におかかりになりますよ。」



大つすな結婚御はたなあにとんほ チツギノーワイ・イレドンア
《うせでいいら

チチコフの言葉に今度はそれほど説得力があつたのか、それともテンチェートニコフがこの日に限つて蟲のゐどころがよくて、打明け話をする氣になつたのか、彼はほつと一つ溜息をついて、煙管の煙をぶうつと上へ吐き出しながら、『何事にも人間は運がよくなくちや駄目ですなえ、パーウエル・イワーノギッチ』と前置をして、さて自分と將軍との交友關係から絶交に至るまでの一部始終を、ありのままに話して聞かせた。

つぶさにすべての経緯を聞いてみれば、そんなことになつたのも、ただ『お前』といふひと言がそもその原因だと分り、さすがのチチコフも呆れて物がいへなかつた。少時のあひだはテンチェートニコフの顔をまじまじと眺めてゐるばかりで、一體この男はまるきりの馬鹿なのか、それとも少しどうかしてゐるのか、頓と相手の本體をつかむことが出来なかつた。が、やうやくのことには――

「これはしたり、アンドレイ・イワーノギッチ！ あなたとしたことが！」と、相手の両手を取りながら彼は言つた。「それがどうして侮辱になるんです？ その際（お前）といはれたからとて別に腹を立てるにも當らないぢやありませんか？」

「なるほど言葉そのものには別に腹を立てるいはれありませんがね、」とテンチェートニコフが答へた。「ただその言葉に含まれた意味に、またそれが口外される時の語調に侮辱が感じられるのです！（お前！）——それはかういふ意味なんです——（心得ておくがいい、お前はくだら

ないやくざ者だが、さうかといつて他に確な話相手もないから仕方なしに家へ寄せつけてゐるのだぞ。だが今は、公爵令嬢ともあるユジャキナが來られたから、お前も自分の身の程をわきまへて、恭しく下座に立つてゐるがいい。これがつまりその意味なんですよ！」かう言ひながら、温順で柔和なアンドレイ・イワーノギッチもギラギラと眼を光らせた。その際には傷つけられた感情の苛立ちがこもつてゐた。

「假にそんな意味であつたにしても、別になんでもないことぢやありませんか。」と、チチコフが言つた。

「なんですか？ こんな不當な仕打ちを受けてまで、僕におめおめとあの將軍の御機嫌を取りに行けども仰つしやるんですか？」

「何を不當な仕打ちだと仰つしやるんですか？ 別に不當な仕打ちでも何でもありませんよ。」とチチコフは落着き拂つて言つた。

「どうして不當でないのです？」と、テンチェートニコフは意外な面持で訊ねた。

「それはえて將軍などといふものの癖で、別に底意があつてのことぢやありませんよ。あの手合ひは誰彼なしに（お前お前）と呼びすてにするんです。しかし、なにしろ相手は武勳赫々たる尊敬すべき人物ですから、それ位のことには仕方がないぢやありませんか。」

「それとこれとは別問題です。」と、テンチェートニコフが言つた。「あれがもし將軍でなく

ただの老人で、傲慢でも不遜でもない貧乏人だつたら、私は（お前）と言はれても許してやりませぬ、それどころか却つて町重に應待しますよ。」

（この男はよつぽどどうかしてゐる）と、チチコフは吐の中で呟やいた。（襤褸をさげた素褌費にやら許せるが、將軍には許せないといふ！）——「よろしい！」と、彼は聲に出して言った。「では假に將軍があなたを侮辱したとしておきませう、ところがあなたの方の間にはちやんともうお互ひに憤ひがついてゐる譯です。それなのに自分の大事な戀を抛つてまで、いつまでも唾みあつてゐるなんて——失禮ながら、それは無茶ですよ……。一旦これと目星をつけた限りは、遮二無二それに向つて突進しなくつちや嘘ですよ。人が唾を吐けばとて何とも仕様がありませんさ！人間はしじゆう唾を吐きます——もともと、さういふ風に出来てゐるのだから仕方がありません。今どき唾を吐かない人間なんて、世界ぢゆう捜しまはつても見つかりつこありませんからね。」その言葉にすつかり面喰らつたテンチェートニコフは、（このチチコフといふ男も變りものだなあ！）と、途方に暮れたやうに、心の中で呟やいた。

（だが、このテンチェートニコフつて男はよつぽど變り者だよ！）と、一方ではチチコフが考へた。

「アンドレイ、イワーノギッチ！ 私はあなたに兄弟同士のやうにざつくばらんにお話しますかね。あなたはまだ經驗がお浅い。どうです、この一件は手前にお委せ下さいませんか。ひとつ

關下の邸へお邪魔しまして、今度のことは偏へにあなたの誤解から、あなたのお若いことや、世間や人間をよく御存じないことから起こつたのだと、私からよく將軍に釋明いたしませう。」

「僕はある人の前に諂らふ考へはありませんよ。」とテンチェートニコフは、少し憤然として言つた。「それに、そんな權限をあなたにお委せする譯にはまゐりませんよ。」

「私も人に諂らふことは出来ない性質でしてね。」と、チチコフも憤然として言つた。「私も人間ですから、他の過失は或は犯すかも知れませんが、卑劣なことだけは——斷じて……。いや御免なさい、アンドレイ・イワーノギッチ、これも眞實お爲を思へばこそで、まさか、あなたがそんな風な侮辱の意味に私の言葉をお取りにならうとは思ひませんでしたからね。」かうした言葉には飽くまで威嚴の情がこもつてゐた。

「いや、勘忍して下さい、私が悪かつたのです！」と、すつかり感動したテンチェートニコフは相手の両手を掴みながら、あわてて言つた。「私は毛頭あなたを辱めるつもりではなかつたのです。誓つて申しますが、あなたの御親切なお心遣ひを疎かには思ひません！ ですが、この話は止めにしませう。こんな話はもう二度と再び繰り返さないことにいたしませうよ！」

「さういふことでしたら、私は一つ將軍のところへ行つてまゐりませう。」

「どうしてですか？」とテンチェートニコフは、合點のゆかぬ面持で相手の顔を見つめながら訊ねた。

「敬意を表するためにですよ。」

「このチチコフつて男も妙な人間だなあ！」とテンチェートニコフは思った。

「このテンチェートニコフつて男も變な人間だなあ！」とチチコフも思った。

「ぢやあ、アンドレイ・イワーノヴィッチ、私はあすの朝、十時ころあちらへまゐることになっています。人に敬意を表するのは早いに越したことはありませんからね。手前の牛蓋馬車はまだよく直つてゐないやうですから、輕馬車一つ拜借できないでせうか。さうすれば私は、明朝十時ころには先方へ着くことが出来ますからね。」

「何ですか、一々そんな難かしいことを仰つしやつて？ あなたはこの家の主人も同然ですよ。馬車だつて、なんだつて御自由にお使ひ下さい。」

こんな會話をしたあとで、二人は挨拶を交はして、それぞれ寢室へ引きあげたが、お互ひにどちら相手も風變りな氣質についていろいろと考へてみないではゐられなかつた。

しかし、不思議なことには！ 翌る朝チチコフのために馬車の用意が出来て、新らしいフロツクに白い襟飾と白い胸着をつけた彼が、殆んど軍人のやうな輕快さでひらりと輕馬車に飛び乗りざま、將軍に敬意を表するために出發した時、テンチェートニコフは長いあひだ經驗しなかつた妙な胸騒ぎを覺えた。今までは錆びついて眠つてゐたやうな彼の全思想系統が、俄かに一變して、それはそはと活動を開始したのである。これまで暢氣に隋眠を貪ぼつてゐた怠け者のあらゆる感覺

が、不意に神經的な苛立たしさに襲はれた。彼は長椅子に腰かけてみたり、窓際へ立寄つてみたり、さうかと思ふと、書物を取りあげてみたり、何か考へをまとめようとしてみたりした。それが空しき望みで！ どんな思案も頭へは浮かばなかつた。今度は何も考へまいと努める。それが、それも空しき努力で！ 思想に似たやうな切れ切れのものが、思想の端くれか尻尾みたいなものが彼の頭へ忍びこんで、四方八方から小突きまはすのである。「どうも變な氣持だ！」さう呟やいて彼は窓へ近寄つた——鬱蒼たる森を貫いて走つてゐる街道を眺めると、その端れには馬車の立てた土埃がまだ鎮まりきららないで煙のやうに立ち迷つてゐた。が、テンチェートニコフのことはさておき、チチコフの後をつけてみよう。

第二章

駿馬は半時間とほんの少しで、もうチチコフを十露里さきへはこんでゐた。最初は鬱蒼たる森をぐぐり抜け、次いですがすがしい耕地に青みそめた穀類の中を通りすぎて、やがて山の端にかかると、刻一刻と眺望がひらけ、更に、やうやく芽ぐみそめたばかりの菩提樹の廣い並木道を進んで行くと、いつの間にか村の真中へはこびこまれてゐた。そこで菩提樹の並木道が右へ曲ると、根本を贅でかこつた白楊の並木道に變つて、そのまま真直ぐに、鑄鐵格子の門に達してをり、その門をとほして、八基のコリント式の圓柱に支へられた、絢爛な彫刻のある將軍邸の豪華な破風が覗いてゐる。どこにもかしこにも油性塗料の匂ひがふんふんとして、すべてに新粧が施され、少しも老朽に委されたところがない。前庭はまるで寄木の床のやうに綺麗に掃き清めてある。チチコフは憤みぶかく馬車を降りると、將軍へ取りつぎを頼んだが、すぐに將軍の書齋へ通された。將軍は先づ威風堂々たる外貌によつて相手を驚かした。彼は綿の入つた豪華な紫いろの襦子の寛衣をまといつてゐた。あけすけな眼差、凛々しい顔、白毛まじりの大きな頬髯と口髭、髪を短かく刈込んだ後頭部、縦に裂目の入つた三重襲の、太い、謂ゆる三段項——要するにこれは、かの有名な十二年の役を華やかに飾つた、武者繪の中からでも抜けだして來たやうな將軍の一人であ

つた。我々凡俗と同様に、このベトリッシェフ將軍は様々の美點と様々の缺點とを兼ね具へてゐた。露西亞人にはよくある例で、この二つが錯綜して見事に彼の人柄を形づくつてゐた。いざといふ場合の度量と勇氣と底の知れぬ鷹揚さと縦横の機智、かういふものに、斑氣だの、名譽心だの、自尊心だの、また露西亞人がなすこともなく手をつかねて坐つてゐる場合、何か切羽つまつた事情でも起こらない限り決して免れられぬ、あの卑小くさい根性だの、といつたものがつきまとつてゐたのである。彼は勤務上で自分を追ひ越して昇級したやうな連中を毛嫌ひして、散々にさういふ連中をこきおろし、辛辣な皮肉を浴びせたものである。中でも最もひどくやつつけられたのは、彼が頭腦に於いても才幹に於いても、遙かに自分より劣つてゐるものと考へてゐたのに、彼を追ひ越して、今はもう二つの縣の總督になつてゐる以前の同僚であつた。それがまた故意とのやうに、どちらも彼の所領のある縣であつたから、結局その相手の支配を受けるやうな立場になつた。その腹藏に彼はことごとく相手にくさし、あらゆる指令にけちをつけ、その處置や行動をことごとく愚の骨頂だと罵つた。彼には萬事につけて何處か變なところがあつた。自分が熱心に擁護してゐる教育の方面にしてからがさうであつた。また他人の知らないやうなことを知るのが好きで、何か自分の知らないことを知つてゐるやうな人間は毛嫌ひした。つまり自分の智慧をひけらかすことが好きだつたのだ。半ば外國風の教養を受けてゐながら、それでゐて矢張り露西亞式な且那を氣取りたがりもするのだ。いふまでもなく、かうした性格の不整と眼に見えて

大きい矛盾とが災ひして、勤務中にも當然いゝんな面白くない問題を惹き起こし、そんなことから遂に役を退くやうなこともなつたのであるが、すべてを反対派の責任に歸して、自分自身を責めるだけの雅量を缺いてゐたことは決して推察に難くない。退職後といへども彼は従前どほりの威風堂々たる態度で押しとほした。燕尾服をつけてゐるやうが、フロックを着てゐるやうが、乃至は寛衣かんいにくるまつてゐるやうが、彼の態度には少しも變りがなかつた。彼には、その音聲からちよつとした動作もつしに至るまで、飽くまで横柄で高飛車なところがあつたから、目下の者は、たとへ敬意を感じないでも、少なくとも畏怖の念に驅られたものである。

チチコフはその敬意と畏怖とを同時に感じた。彼はさも恭しげに首を横へちよつと傾げ、茶碗を載せた盆でも捧げるやうな恰好に両手をサツと攪げて、驚くばかり巧者に上體を屈めながら、『手前は閣下の前に伺候いたしますることを義務と心得ました。戰場に於いて祖國を救はれた方々の武勇に對して、豫て敬意を抱いてをりましたので、親しく閣下の前に伺候いたしますることを義務と心得たのでございます』と、挨拶を述べた。

こんな風を持ちかけられては、將軍もどうやら悪い氣持はしなかつたらしい。彼はひどく機嫌のいい合點々々をしながら、『お近づきになれて大變満足ぢや。さあ、お掛け下され。ときに何處どこにお勤めぢやつたかな？』

「はい、手前の勤務經歷は、」とチチコフは、安樂椅子の端に、それもちよつと斜めに腰をおろ

して、片手で椅子の腕をつかみながら言つた。「まづ、支金庫から始まりましたので、閣下。それからといふものは、もう、いろいろなところに勤めてまゐりました。上級裁判所にもをりますれば、さる建築委員會にもをりましたし、税關にもをりました。手前の半生はまるでもう、波にもまれる小舟も同然でございましたよ、閣下。手前はもう生まれるとから忍耐といふものに取りまかれ、忍耐といふものに育まれて參つたと申してもよい位で、手前そのものが一個の忍耐の權化でございました……。それに手前の生命いのちまでもつけ狙ふ敵にどのくらゐ苦杯をなめさせられましたことやら、それはもう、繪にも言葉にも、申さば筆紙のよく盡くすところではないのでございます。さやうな譯で、おひおひ年も傾いてまゐりましたので、せめて餘生を送る安住の地を見つけようとしてゐるのでございます。ちやうど閣下のつい御近所に暫らく逗留いたしてをりますので……。」

「ほう、いつたい誰のところか？」

「テンチエートニコフのところでございますよ。閣下。」

將軍は顔をしかめた。

「閣下、彼は當然の敬意を拂はなかつたことを非常に後悔してをりますので……。」

「何にね？」

「閣下の御勤功に對してでございます。彼は言ふべき言葉も知らないほどでございまして……。」

かう申してをります——『なんとかして、せめてお赦しがかつたら……』と申しまして、『私も祖國を救はれた方々の價值判断を誤まつてゐる譯ではないから。』と、さう申してゐるのでございますよ。」

「それはまた異なことを、あの男は一體どうしたといふのぢやね？ わしは別に腹を立ててゐる譯でもないのに。」と、顔色を柔らげて將軍が言つた。「内心わしは、あの男に眞實ほれこんでゐたのぢや。そして今に素晴らしい有用の材になるとも信じてゐたのぢや。」

「閣下、ほんとに御名言でございます。彼はまづたく有用な人物です。非常に文才に恵まれて、なかなか筆も立ちます。」

「しかし書きをるものは、どうも感心できんぢやて——何かつまらん詩のやうなものでも書くのぢやらう？」

「いや、閣下、決してつまらんものではございません……。極めて有益なものを……。何でもその……歴史を書いてゐるのでございますよ、閣下。」

「歴史を？ そりや何の歴史ぢやね？」

「はい、歴史で……」と、茲でチチコフはちよつと言葉につまつたが、眼の前に將軍が坐つてゐたためか、それともただ話に勿體をつけようと思つてか、彼はかう附け加へた。「將軍の歴史でございますよ、閣下。」

「將軍の？ といふと一體どんな將軍のだね？」

「一般の將軍がたでございますよ、閣下、全體をひつくるめまして。つまり、嚴密に申しますれば、我が國の諸將星の傳記でございますなあ。」

チチコフはすつかり混亂して、まごついてしまひ、忌々しさにベツと唾でも吐きかねない氣持になりながら、(ちえつ、なんといふ拙いことを言つたものだ!)と心の中で呟やいた。

「いや、どうもあんたの仰つしやるがよくのみこめんが……。一體それはどういふことになるんだね、或る時代の歴史なのか、それとも一人々々の傳記なのかね？ それにまた、將軍全體を取扱ふのか、それとも十二年の役に參戦した將軍だけに限るのかね？」

「さう、それなんでございますよ、閣下、十二年の役に御參戦になつた將軍がたの歴史なんでございます！ 彼はかう言ひきつたものの、肚の中では、(何が何だか、殺されたつて分りやしない!)と思つた。

「それなら、どうしてわしのところへやつて來ないのぢやらう？ いろんな面白い材料が幾らでも集められるのに。」

「閣下を怖れて、後込みしてゐるのでございますよ。」

「何を馬鹿な！ ただ、つまらん言葉の行違ひがあつただけでな……。わしは決してそんな人間ぢやないよ。なんなら、わしの方から出かけて行つてもいい。」

「そんなことをおさせするのですか、自分で屹度こちらへ伺ひますよ。」さう言ふとチチコフは、ほつとして、すつかり勇氣を取戻し、(やれやれ、よかつた！ 將軍の歴史なんて出鱈目をいつたのが、かう旨くゆかうとは！ それも苦しきまぎれに、ふと口をすべらしたのだのに！)と思つた。

さらさらといふ絹ずれの音が書齋へ聞こえて來た。彫刻のついた嵌込み戸棚に似た出入口の胡桃材の扉がさつと開くと、その開いた扉を背にして、一人の女が眞鍮の把手を握つたまま、生々した姿を現はした。たとへ暗がりの部屋へ、後ろから強いランプの光りに照らされた透し繪が不意にパツと現はれたとしても、この女の突然の出現ほどには人の眼を驚かさなかつたらう。明らかに彼女は、將軍に何か言ふつもりで入つて來たのであるが、見知らぬ客の姿を眼にして……。あたかも彼女と共に太陽の光りが映しこんだやうに、將軍の七難かしい書齋までが朗らかに笑ひだしたやうであつた。チチコフには自分の眼前に立つてゐるのが果して何者であるか、咄嗟には見當もつかなくあつた。この女はどこの國の生まれともはつきり斷言することが難かしかつた。このやうに清楚で氣高い顔立といふものは、ひとり古代の希臘彫刻の中でもなければ、ちよつと見つかさうになかつた。彼女は輕快で箭のやうにすんなりしてゐたから、誰より遙かに背が高く見えた。が、それは見る者の錯覺であつた。彼女は決して背が高い方ではなかつた。さういふ錯覺の生じるのは、彼女の肢體の各部が互ひにびつたりと非常によく調和してゐたからである。衣

裳も軀によく釣合つて、まるで腕利の裁縫師が、彼女に最も似つかはしい衣裳について寄り寄り相談をして仕立てたのではないかと思はれる位であつた。が、これも矢張り見る者の眼の錯覺であつた。彼女は着物もどうやら自分の手で仕立ててゐるらしく、碌に裁ちもしない無地の布地にしくしくと二三ヶ所針を通しただけのものであつたが、それだけでもう見事に襷や折目が出來て立派な衣裳となり、それがしつくり彼女の軀に似合つてゐたから、そのままの姿を繪に描いても、その前へ出てはどんな流行の装ひをこらした令嬢がたも、まるで地鼠か、襦袢市場の商品としか見えないだらう。またその擬ひものの衣裳の襷そのまゝに、彼女を大理石の像に刻んでも、人はそれを名作の複製と見違へることだらう。ただ一つ、あまりほつそり瘦せてゐるのが玉に瑕であつた。

「うちの駄々つ娘ぢや、一の會つてやつて下さい！」と、將軍はチチコフの方を向いて言つた。「ぢやが、あんたの苗字も名前もまだ承らないやうぢやが。」

「何ひとつ勇名を轟かしたといふでもない人間の名前など、申しあげるにも及ぶまいと存じますが。」と、チチコフは首を横へ傾げながら、謙遜して言つた。

「ぢやが、やはり承つておかんでは……。」

「パーウェル・イワーノギッチと申しますので、閣下。」とチチコフは、まるで軍人のやうに巧者に會釋をして、護謨毯のやうに輕快に一步うしろへ飛び退りながら答へた。

「ウーリニカ！」と、娘の方へ振り返りながら將軍が言つた。「今な、このパーウェル・イワトノギッチが大へん面白い珍聞はなしをきかせて下さつたところぢやよ。あの隣り村のテンチュートニコフも決してわたしたちが思つてゐたやうな馬鹿者ではないわい。なかなか氣のきいた仕事をしてゐるさうぢや。十二年の役の將軍の歴史を書いてゐるとよ。」

「だつて、あの方を馬鹿だなんて、誰だあれも思つてやしませんでしたわ！」と、彼女は一氣に言つてのけた。「ただ、お父さまの信用していらつしやる、あの淺薄で下素なヴィシネポクローモフさんの他には！」

「どうしてあの男を下素だといふのだ？ なるほど少し淺薄なところはあつたがな。」と、將軍が言つた。

「淺薄なだけぢやありませんわ、あれは下等で穢ららしい人ですわ。あんなに兄弟をいぢめたり、妹を家から追ひ出したりするやうな人ですもの、下等な人間にきまつてゐるわ。」

「だが、それはただ人の噂だけぢやよ。」

「根も葉もないことであんな噂が立つもんですか。お父さま、あたしお父さまのやうに御立派な精神と、ほんとに稀な心を持つていらつしやる方が、お父さまとは天と地ほどかけ離れてゐるやうな人を、それも、悪い人だと御自身でちやんと御存じの癖に、うちへ出入りさせていらつしやる譯がさつぱり分りませんわ。」

「そつら、ね、この通りぢや。」と、將軍は苦笑しながらチチコフに言つた。「こんな風に始終これと口喧嘩をするのでな。」さう言つてから又、口を尖らせてゐる娘の方へ向き直つて言葉をつづけた。

「そんなことを言つても、お前！ あの男を追ひ出す譯にもいかんぢやないか？」

「何も追ひ出せなんて申しませんわ！ でも、あんなに目をかけてあげることもないでせう？ あんなにお可愛がりになることはないぢやありませんか？」

茲でチチコフは、自分も一言口をはさむのが義務だと思つた。

「誰でも、可愛がりたいと希つてゐるのでございますよ、お嬢さま。」と、チチコフは言つた。「どうもそれは仕方がありませんよ。家畜だつて撫でてもらふことは好きですからね。さあ撫でて下さい！ といはんばかりに、小舎から鼻面を差しだしてゐるぢやありませんか。」

將軍はわつと笑ひだした。「うん、まつたく鼻面を差しだしてゐるを——さあ撫でてくれ！ といはんばかりに……はつ、はつ、はつ！ しかもその面かほだけぢやなく、軀からだぢゆうを煤で眞黒にしてゐる癖に、謂ゆる鼓舞おどちふやつをせがみをるのぢや。はつ、はつ、はつ、はつ！」そして將軍の胴體は高笑ひに波うちはじめた。曾てはどつしりした肩章を載せてゐた肩が、今でもそんなものを載つけてゐるやうに、ブルブルとふるへたものである。

チチコフも矢張り、笑ひ聲をたてたが、將軍に對する敬意から、口をすぼめて、へつ、へつ、

へつ、へつ、と笑つた。そして彼の胴體も矢張り笑ひのために波うつたけれど、その肩は一度もどつしりした肩章を載せたことがないので、將軍のやうには震へなかつた。

「いや、泥坊をする、公金は盗む、それでゐて人間といふ悪黨は、おまけに褒美までせがみをするのぢや！ どういたしまして、お褒めにでも預からなくちや働けませんとね……。はつ、はつ、はつ、はつ！」

上品な、愛くるしい娘の顔に惱ましげな感情が現はれた。「まあ、お父さま！ どうしてそんなにお笑ひになれるのか、あたしには譯が分りませんわ！ さういふ破廉恥なことを平氣でするやうな人のことを思ふと、あたし憂鬱になるばかりですわ。白晝公然と詐欺やベテンが行はれてゐながら、さういふ悪人が世間から侮辱の眼をもつて罰せられもしないのを見ると、あたしほんとに自分で自分が分らなくなつてしまひますわ。一時に赫あつとなつて、胸までむかひてきますのよ。あたしさう思ふわ、さう思ふわ……」さう言つて彼女は今にも泣きだしさうになつた。

「だが、どうかさう、わたしたちに當りちらさないでおくれ。」と、將軍は言つた。「別にそれはわたしたちの罪ではないのぢやから。ね、さうぢやらうがな？」と一言チチコフに向つて口を挿んでから、「さあ、わしに接吻して、部屋へ歸るがいい。わしもこれから着換へをして、午餐に出るからな。無論あんたも」と、彼はチチコフの顔をまともに見ながら言つた。「午餐をつきあつて下さるでせうな？」

「ですが、ただ手前ごときが閣下の……。」

「いや、なに、無禮講といふことにしてさ！ お蔭でまだどうにか、食事ぐらゐは御馳走できるからな。ほんの玉菜汁だけぢやけれど。」

チチコフはさつと両手を泳ぐやうにひろげると同時に、さも感に堪へぬといはんばかりに恭しく首をぐつとさげたので、しばらくの間は部屋の中の調度がすつかり彼の視野から姿を消して、ただ自分の穿いてゐる半長靴の爪先だけしか見えなかつた。暫らくさういふ慙慙な姿勢を保つてゐてから、彼がやつと頭を上げた時には、もうウーリニカの姿はそこになかつた。彼女は姿を消してしまつて、その代りに、濃い口髭と頬髯とを生やした大男の従僕が、銀の洗面器と水差とを持つて立つてゐた。

「ひとつ御免を蒙つて、ここで着換へをさせて貰はうかな。」

「いいえ、お着換へは愚か、なんなりと閣下のお好きなことを遊ばして頂きたいものでございます。」

そこで將軍は寛衣を片肌ぬぎ、襦袢の袖をたくしあげると、いかにも偉丈夫らしい兩腕を現はして、まるで鴨のやうに飛沫をとばしたり、ブルブル鼻を鳴らしたりしながら顔を洗ひはじめた。石鹸の水が四方八方へ飛び散つた。

「なるほど好きなんぢやよ、好きなんぢやよ、まつたくおだてて貰ふことが好きなんぢやよ。」

さう言ひながら、頸をこしこしと八方から擦りつづけた……。『まあ、さういふ奴は、せいせい撫でてやるさ！ おだてて貰はにや盗みだつてしをらぬからなあ！ はつ、はつ、はつ！』

チチコフは何ともいへない好い氣持になつた。と、不意に、天來の思ひつきが彼の胸に湧いた。(さうだ、この將軍はなかなか愉快な人間で、お人好しなんだ。ひとつ話を持ちかけて見るかな！) さう思ふと彼は、ちやうど従僕が洗面器を持つて出て行つたのを機會に、こんな風に切りだした。

『閣下！ あなたは誰に對してもほんとに御親切で、それに、よくお氣がおつきになりますから、折入つてお願いがあるのでございますが。』

「どんなことだね？」——茲でチチコフはあたりを見廻した。

「實は、閣下、手前には老耄れの伯父が一人ございまして、その伯父は三百人の農奴を持つてをりますし、二千の……、ところで手前の他には相續人がないのでございます。もう寄る年波で自分では所領の支配も出来ない癖に、さうかといつて、手前に譲らうともしないのでございます。しかも誠に奇妙な理由を楯に取つてゐるのでございます！ 『わしは、あの甥のことはよく知らないが』と、かう申すのでございますよ。『ひよつとすると、あいつは放蕩者かも知れない。まあ、あいつが確かな人間だといふ證據をわしに見せるがいい。まづ、見事あいつが自分で三百人の農奴の持主になつたら、わしの三百人の農奴も奴にくれてやらう』と、かうなうでございませうよ。』

「ふむ、さうすると何だね、その伯父さんちふのはよくよくの馬鹿なんぢやね！」

「馬鹿なら馬鹿でも構ひません、それは伯父だけの問題ですからね。ところが、手前の立場でございませうよ、閣下！ 老人には女中頭が取りいつてをりまして、それがまた子持ときてゐるのでございます。うっかりしてゐると、何もかもそいつらのものになつてしまひますので。」

「その馬鹿な老人は、よくよく考へてしまつたのぢやな。」と、將軍が言つた。「だが、一體どうしたら御援助が出来るのか、頼とわしには分らんねえ。」さう言ひながら將軍は、怪訝さうにチチコフの顔を眺めた。

「そこで一つ思ひついたことがあるのでございますよ。閣下がもし、御領内で死んだ農奴を残らず、生きてゐるものとして正規の賣買登記を済まして手前にお譲り下さいますならば、手前はその證書を老人に見せてやります。さうすれば、伯父も遺産を手前に譲つてくれることになるので存じますので。」

これを聞くと將軍は、つひぞ人間がそんな聲で笑つたことがあるだらうかと思はれるやうな大聲をあげて笑ひ出した。彼は安樂椅子に腰かけたまま、腹をかかへて笑ひころげた。頭を後ろへ仰反らして、殆んど息もつまるほど笑ひつづけた。家内ちゆうが吃驚仰天した。従僕があわてて入つて來た。娘が驚いて駆けつけた。

「お父さま、どうなすつたの？」さう言つて彼女は、おどおどしながら、途方に暮れたやうに父親の顔を見つめた。

しかし將軍は長いこと一口も物をいふことが出来なかつた。

「いや、なんでもないよ、お前！ 氣にかけることぢやないよ。部屋へおかへり。わしたちもすぐ午飯に行くからな。さあ、落着いたがいいよ。はつ、はつ、はつ、はつ！」

それから、數回せいぜい喘ぐと、將軍の哄笑は新規の力をもつてどつと破裂し、玄關から一番奥の部屋にまで響きわたつた。

チチコフはぎごちない氣持であつた。

「伯父さんこそ、いい面の皮ぢやて！ その伯父さんはうまうまと一杯くはされる譯ぢやないよ、はつ、はつ、はつ！」

（また始めやがつた！）とチチコフは肚の中で思つた。（よつぽどこの先生はくすぐつたがり屋だよ！ 腹の皮がよく裂けないものだ！）

「はつ、はつ、はつ！」と、將軍は笑ひながら語をついだ。「何といふ頼馬ぢや！ 思ひつくにも事をかいて、そんな馬鹿な條件を持ち出すなんて——『まづ空手空拳で三百人の農奴を手に入れる、さうすればおれの三百人もくれてやる』か！ まつたく伯父さんは頼馬ぢやよ！」

「頼馬でございますとも、閣下。」

「いや、それにしても、その老人に死んだ農奴を御馳走しようといふ君の悪企みにも恐れいそぞ！ はつ、はつ、はつ！ 君が伯父さんの前へその賣買證書を差したす時の様子が見られるも



しかし將軍は長いこと一口も物をいふことが出来なかつた

のなら、わしは何を犠牲にしても惜しくないよ。で、その伯父さんといふのは何者だね？ 一體どんな人だね？ よほどの老人かね？」

「もう八十歳からになりますので。」

「それでもまだ動くことが出来て、達者なのかね？ なるほど女中頭と同棲してをるやうではまだよほど達者なんぢやらうな？……」

「何が達者なものですか！ よぼよぼでございますよ、閣下！」

「何といふ馬鹿ぢや！ まつたく馬鹿ぢやらう？」

「馬鹿でございますとも、閣下。」

「それでも、まだ外へ出かけたたりするのかね？ 人中へも顔を出すのかね？ 足腰がまだ立つといふのかね？」

「まあ足腰は立ちますが、それも危つかしいものでございます。」

「何といふ馬鹿ぢや！ それでも、達者なんだね？ 齒はまだあるのかね？」

「全部で二本きりでございます、閣下。」

「何といふ頼馬ぢや！ いや、君、腹を立てちやいけないう……。たとへ君の伯父さんにして、それあ、よつぼどの頼馬ぢやて。」

「頼馬でございますとも、閣下。手前も身内のことでございますから、どうもそんなことを認

めるのは辛いのでございますが、何とも致し方がございませんので。」

チチコフは嘘をついたのである。そんなことを認める位は辛くも何ともなかつたのである。況んや彼に伯父などといふものが果してあつたかどうか怪しいのだから尙更である。

「さういふ譯でございますから、閣下、一つ手前にお譲り願へませんでせうか、その……。」

「死んだ農奴を譲れつていふのかね？ うん、さういふ思ひつきのためなら、わしは土地も家もつけて譲つてあげるよ！ 墓場もろとも持つて行つて貰ふよ！ はつ、はつ、はつ！ その老人こそいい面の皮ぢや！ はつ、はつ、はつ！ 伯父さんめ一杯くはされるんだな！ はつ、はつ、はつ、はつ！」

そして將軍の哄笑が再び將軍邸の部屋々々に反響した。

完成せる『死せる魂』第二部の朗讀をゴゴリから直接きいた人々の記憶によると、この章はまだかなり長くつづき、チチコフの斡旋で將軍とテンチエートニコフは和解し、ウーリニカとテンチエートニコフの戀も復活して目出たく婚約がととのひ、その婚約の成立したことを將軍の親戚ぢゆうへ傳へるため、使者となつてチチコフが出發するまでの経緯が、最も精彩に富んだ描寫で敘述されてゐたことである。〔譯者〕

第三章

「コシカレョフ大佐がほんとに狂人だとすれば、却つて好都合といふものだ」と、再び廣々とした田野の眞中へ出て、ただ天の穹窿とその一方に浮かんでゐる二つの斷雲の他には何一つ眼を遮るものなくなつた時、チチコフは呟いた。

「こら、セリファン、お前はコシカレョフ大佐のところへ行く道をよく聞き糺しておいたらうな？」

「まあ、つもつても見て下せよ、パーウェル・イワーノギッチ、わつしはもう馬車の支度でてんでこ舞ひをしてをりましたもの、そんな暇はありつこねえちやござえませんか。でも、ペトゥルシカが馭者によく訊いておいたはずでござえますだよ。」

「この馬鹿野郎！ ペトゥルシカなんか當てにならないと、あれほど言つてあるぢやないか。ペトゥルシカは間抜けで、木偶の坊だよ。おほかた今だつてあいつは酔つ拂つてゐやがるんだ。」

「なんにも、ハア、別に難かしいこたあねえでござう！」と、ペトゥルシカが上體を半ばねぢまげて流汗をくれないながら言つた。「丘を降りたら、草地について行くぢふだけのことつて、なんの雜作もねえでがすよ。」

「貴様といふ奴は、燒酎をあふるより他に能はないのか？ ふん、なるほど大した男前だて！ さうさ、その男振りでは歐羅巴もおつ魂消るといふもんだ！」かう言つてからチチコフは、自分の頸をちよつと撫でて見て考へた。（それにしても、教養のある人士と粗野な下男階級の容貌とでは、ずるぶん差異があるものだ！）

その間に馬車は降りはじめた。またしても草地と、ところどころ白楊の茂みに點綴された廣々とした平地が眼の前に展開した。

乗り心地のよい輕馬車は、輕快な彈機の上で靜かに揺れながら、あるかなきかのだらだら坂を暫らくは用心ぶかく降りつづけたが、やがて草地の中へ出ると、水車小屋の傍を通つたり、ガラガラと軽い音を立て橋を渡つたり、低地の柔らかい凹凸した土の上でちよつと揺れたりした。が、それから先きは動搖を知らせる土塊ひとつない坦々たる道で！ 馬車を驅つてゐると思へない好い氣持である。

楊柳の茂みや、か細い赤楊や、銀のやうなポプラが、その枝で、馭者臺に乗つてゐるセリファンやペトゥルシカを叩きながら、急速に傍らを飛び過ぎて行く。ペトゥルシカは絶え間なくそれに帽子を取られた。氣の荒い下男はそのたんびに馭者臺から飛びおりて、馬鹿な眞似をする樹木や、そんなものを植ゑておく主人に劔突をくはせるが、その癖、もうこれが最後で、二度とそんなことはないだらうと思つて、帽子を頭にしばりつけるは愚か、手で押へようとさへしな

つた。間もなくそれらの樹木に白樺が、それから樅が仲間入りをした。樹々の根本には草叢があつて、紫の菖蒲や黄いろい野生の鬱金香が咲いてゐた。が、不意に四方八方から、鏡が反射するやうな光りが木の枝や切株をとほしてキラキラと閃めきだした。樹木がだんだん疎らになり、光りの反射がますます大きくなつた……。と、一行の眼前に湖が現はれた——さしわたし四露里ばかりもある水の原因だ。湖ごしの對岸には村があつて、灰色の丸太づくりの百姓家が點在してゐる。水中でわいわいと叫ぶ聲がする。二十人ばかりの人間が、或る者は腰まで、或る者は肩まで、又或る者は頸まで水につかりながら、向ふ岸へ網を曳いてゐるのだ。不圖その時、棒事が持ちあがつた。どうかした勢に魚と一緒に一人の男が網に絡まつてしまつたのであるが、それは背丈と横幅と同じ位まるまるした、西瓜か樽にそっくりの男であつた。その男は無我夢中の状態に陥つて、あらんかぎりの聲で絶叫してゐた。「デニスの間抜けめ、それをコジマへ渡すんだ！ コジマ、貴様はデニスの手からその端つこを取るんだ！ そんなに押しつけちや駄目ぢやないか、のつぽのフォマつ！ あの、ちびのフォマのゐるところへ行くんだ！ えい、畜生ども！ 網が破れつちまふといふのに！」この西瓜先生はどうやら自分の身の危険はいつかう氣に懸けてゐないらしい。あれだけ肥満してゐては溺れようにも溺れる心配はなく、水中へもぐらうとしていくら騒筋斗をうつたところで、水が彼を水面から下へ沈める筈はなかつたのだ。そればかりか、人間が二人ぐらゐる背中へ乗つかつたところで、彼は二人を乗つけたまま、まるで頑固な膀胱の浮囊み

たいに水面に浮かんでゐて、ただ二人の重みで僅かに呻き聲をたてたり、鼻からブクブク水泡を吹くぐらゐるが關の山だらう。だが、彼は網が破れて魚の逃げ出すことを無性に心配してゐたのである。で、定めの人數以外に、岸に立つてゐた數人の男までが、網に繩を掛けて、えんやらえんやら曳いてゐるところであつた。

「屹度あの人が旦那の、コシカレヨフ大佐でがすぜ。」と、セリファンが言つた。

「どうして？」

「それでも御覽なせえまし、あの人の軀は他の奴らより色が白うがすし、いかにも旦那衆らしく、でつぶりした恰幅でがすからね。」

その間に、網に絡まつた旦那は、もう大分岸へ曳きよせられてゐた。足がやうやく水底にとどきさうだと氣がついて、彼はそこに突つ立つたが、それと同時に、堰を降つてくる輕馬車と、それに乗つてゐるチチコフの姿に眼を留めた。

「晝飯はあがりましたかあい？」と、その旦那は捕まへた魚と一緒に、まるで夏どきレースの手套をはめた淑女のお手々といつた恰好で、軀ぢゆうすつかり網につつまれたまま、陸の方へ歩みよりながら、片手で眼の上に小手を翳して日光を遮り、片手で、沐浴からあがつたメディチのヴィーナスの像よろしく下の方を隠しながら、叫んだ。

「いや、まだです。」さう言ひながらチチコフは、帽子を持ちあげて馬車の上から續けざまに

お辭儀をした。

「やあ、そいつは有難いですなあ！」

「どうしてですか？」チチコフは帽子を頭の上へ持ちあげたまま、妙な挨拶だといはんばかりに訊き返した。

「どうしてだか、今御覽に入れませあ！ ちびのフォマ、貴様は網をうつちやつといて、桶の中から蝶鮫を持ちあげるんだ！ 間抜けのクジマ、貴様も行つて手を貸してやれ！」

二人の漁師は桶の中から何か怪物の頭を持ちあげた。——『どうです、素晴らしい殿様でござう！ 川から御入來になつたんですよ！』とまん丸つこい旦那が喚き立てた。『どうか邸へ行つて下さい！ 馭者、野菜畠を通つてずんずん降りて行くんだよ！ 此ら、のつぼのフォマの間抜けめ、走つて行つて圍ひを取りな！ あいつが御案内しますよ。わしも後からすぐに……』脚のひよろ長いフォマは、襦袢一枚きりの姿で馬車の先頭に立つて跣足のまま村を走り抜けたが、村には曳網だの投網だの梁籠だのが、どの家にも懸けてあつた。この百姓はみんな漁師だつたからだ。フォマが野菜畠の圍ひを引き倒したので、馬車は野菜畠の中を通つて木造のお寺の傍の廣場へと出た。お寺の後ろの少し先きに地主館の屋根が見えてゐた。

(「コシカロフといふ男はちよつと變つてゐるわい」と、チチコフは肚の中で考へた。

「そら、わしもやつて來ましたよ。」さういふ聲が横から聞こえた。チチコフは振り返つた。



……だん叫は那且のもと《?いあかたしまりがあは飯量》

見れば、もつちやんと着物を著た旦那が自分の傍へ乗りつけてゐるのだ。草色の南京木綿のフロックに黄いろいズボンといふ扮装で、頸はネクタイなしの、キュービット式だ！ 横向きに弾機附馬車に乗つて一人で馬車全體を占領してゐる。チチコフが何か言葉をかけようとしたけれど、その肥大漢はもうそこにゐなかつた。弾機附馬車はいつの間にか再び魚を曳きあげてゐる場所へ引返してゐた。またしても、『のつばのフォマにちびのフォマつ！ クジマにデニスつ！』などといふ聲が響きわたつた。ところが、チチコフが邸の車寄へ馬車を持ちつけると、おつ魂消たことに肥大漢の旦那がもう玄關へ出迎へて、彼を抱擁したのである。どうしてそんなに疾く立ちまはれたものか——さつぱり合點が行かなかつた。二人は露西亞の古い習慣に従つて、首を交叉するやうにして三度接吻した。この主人は舊い型の人物であつた。

「手前は貴下に閣下からの御挨拶をお傳へするためには参上したのでございます。」と、チチコフが口を切つた。

「えつ、閣下といはれますと？」

「あなたの御親戚に當るアレクサンドル・ドミートリエギツチ將軍からでございますよ。」

「そのアレクサンドル・ドミートリエギツチといふのは、いつたい誰ですか？」

「ベトリッシチエフ將軍ですよ。」とチチコフは、ちよつと怪訝な面持で答へた。

「いつかう存じませんなあ。」と、相手も怪訝さうに言つた。

チチコフはいよいよ驚いてしまつた。

「これはまた異なことを？……それにしても、少なくとも手前はコシカレヨフ大佐殿に御意を得てゐることと存じますが？」

「いや、それはお間違ひですよ。あなたがおいでになつたのは彼の家ではなく、手前のところなんです。これはビョートル・ペトロギツチ・ペトウーフの邸です！ 手前がそのペトウーフで、ビョートル・ペトロギツチなんです！」と、主人はすかさず答へた。

チチコフはアツと驚いてしまつた。「見ろ、これはどうしたといふんだ？」さう言つて彼はセリファンとペトウールシカの方へ向きなほつたが、彼等も一人は馭者臺に坐り、一人は馬車の戸口に突つ立つたまま、二人とも矢張りぼかんと口をあけて、眼ばかりまるくしてゐるのであつた。「いつたいどうしたといふんだ、馬鹿者め！ コシカレヨフ大佐のところへと吩咐かつてをりながら……こちら様はビョートル・ペトロギツチ・ペトウーフさんのお邸ぢやないか……。」

「いや、お前がたは旨くやつてくれたんだよ！ さあ、臺所へ行くがいいよ、ウオツカを一杯御馳走するからな。」と、ビョートル・ペトロギツチ・ペトウーフが言つた。「馬を外づして、さつそく下男部屋へ行くんだよ。」

「面目次第もございません。——飛んだ間違ひを仕出かしまして……。」とチチコフは詫言をいつた。

「いや、間違ひぢやありませんよ。先づどんな料理が出るか、それを試してみたら、果して間違ひであつたかどうか、仰つしやつて下さるがよろしい。さあ、どうぞお入り下さい。」さう言つてベトウーフは、チチコフの腕をとつて奥へ案内した。奥から二人の青年が出て来て彼等を迎へたが、どちらも夏のフロックを著てゐて、まるで柳の鞭のやうに細つそりした青年で、たつぷり一アルシンは父親より背が高かつた。

「わしの伴どもでしてな、どちらも高等中學へやつてありますが、いま休暇で歸つてをりますので……。ニコラーシャ、お前はちよつとお客様のお相手をしてゐてくれ。それからアレクサーシャ、お前はわしについて來な。」さう言ふと主人は姿を消してしまつた。

チチコフはニコラーシャの觀察に没頭した。どうやらこのニコラーシャは、行々はやくざになる兆しを十分そなへてゐるやうであつた。彼はチチコフに向つて初手から、縣立の高等中學校などでは勉強する甲斐が少しもないとか、こんな田舎に暮らしてゐてもしやうがないから、自分は兄弟と一緒に彼得堡へ出かけたと思つてゐるなどと言つた。

（成程なあ）とチチコフは思つた。（結局、喫茶店へ入りびたつたり、並木街をうろつくことを覚えるくらゐが落ちだらうさ……）それから聲に出して、「時に、如何ですか、お父さんの御領地はどんな状態なんですか？」と訊ねた。

「抵當にはいつてゐますよ、」と、再び客間へ姿を現はした親爺自身がそれに答へた。「抵當に

ね。」

（こいつはいけないぞ）とチチコフは思つた。（この調子では、間もなく所領といふものは一つもなくなつてしまふぞ。こりや急がなくなつちやならない。）——『しかし、それは惜しいことをなすつたもので、』と彼は、いかにも同情するやうな面持で言つた。『抵當にお入れになるなんて、ちと早計でしたねえ。』

「いや、そんなことはありませんよ。」とベトウーフは平氣で、「その方が利益だといひますからね。みんな競つて抵當に入れますわい。わしも人に負けることもないと思ひましてね。それに始終、田舎にばかりすつこんでゐましたから、今度は一つ莫斯科へ出て暮らしてやらうと思ひますので。伴どもも切りにさうしてくれと強請みましてな、やはり都會の教育が受けたいといふ吐ですわい。」

（馬鹿だよ、この男も！）とチチコフは心に思ふのだつた。（すつかり身代をすつてまで、子供を極道者に仕立てあげようとしてゐるのだ。結構な領地で、百姓たちも何不足なく暮らしてをれば、この一家だつて相當にやつてゐることは一目でわかる。ところが、都會へ出て料亭や劇場で磨きをかけた日には、何もかもが煙になつてしまふのだ。田吾作らしく田舎におとなしくしてをればいいのに。）」

「あなたが何を考へていらつしやるか、ちやんとわしには分つてゐますよ。」とベトウーフが

言つた。

「ぢやあ何ですか？」とチチコフは、やや狼狽氣味に訊ねた。

「あなたは屹度、(馬鹿な奴だよ、このベトウーフつて奴はほんとに馬鹿だよ。晝飯に招んでおきながら、今だに食事も出しやがらん)と思つていらつしやるんでせう。いや、もう直ぐ用意が出来ますよ。比丘尼が髪を結ふよりも早く用意をしてお目にかけますよ。」

「お父さん！ プラトン・ミハールイチがやつて来ましたよ！」と、窓のそとを眺めながらアレクサーシャが言つた。

「さうだ、栗毛の馬に乗つて！」と、窓枠へ軀を屈めながらニコラーシャが相槌をうつた。

「何處へ、何處へ？」と窓へ近寄りながらベトウーフが喚いた。

「プラトン・ミハールイロギッチつて誰方なんですか？」とチチコフは、アレクサーシャに訊ねた。

「手前どもの隣人でしてな、プラトン・ミハールイロギッチ・プラトノフといつて、實に上品な素晴らしい人物ですよ。」と、ベトウーフが引取つて答へた。

その間に當のプラトノフが部屋へ入つて来た、成程すらりとした美男子で、ピカピカと光る明るい亚麻色の頭髪を房々と波打たせてゐた。その後ろから、眞鍮の頸圈をガチャガチャ言はせながら、ヤルプといふ名前の、いかつい面構への猛犬がついて入つて来た。

「晝飯は済んだかね？」と、主人が訊いた。

「済みましたよ。」

「ぢやあ、いつたい何のためにやつて来たんだね、わしを嘲笑ひにでもやつて来たといふのかね？ 晝飯を済まして来た人が、わしに何の用がありますい？」

客は苦笑ひをして、「ぢやあ、僕が何にも食つてゐないことを白狀してお慰みにしようか。なんしろ食欲がちつともないんでね」と言つた。

「ところが、大變な獲物があつてね、是非あなたにも見せたかつたねえ！ 素敵もない蝶鮫の御入來でさ！ それに見事な鮎に見事な鯉のお供つて譯で！」

「聞いただけでもうんざりしますよ。どうしてあなたはいつもさう陽氣でゐられるんだね？」

「何でも、ふさいでなきやならん譯がありますね？ 滅相な！」と主人が言つた。

「ふさいでなきやならん譯つて？——それあ、退屈だからさ。」

「そもそも少食すぎるからだよ、それだけの話さ。まあ、せいぜいうんと食つてみるんだねえ。退屈するなんて、それあ最近に發明されたことで、以前は誰も退屈なんてする者はなかつたからね。」

「その御託宜はもう澤山ですよ！ まるで退屈なんて一度もしたことがないといつた口振りですねえ？」

「まつたくだもの！ 退屈なんてした憶えもなければ、第一そんな暇がありませんからね。朝まづ眼を醒ますと——さつそく料理番がやつて来ませう、晝飯の差圖をしなきやならない。やれお茶だの、やれ執事だの、やれ漁に行くだの、忽ち晝飯になつてしまふ。晝飯がすんで、やれ一と軒と思ふ暇もなく、また料理番を呼んで、夕飯の差圖をしなきやなりません。そこへまた料理番がやつて来る——あすの晝飯の差圖といつた鹽梅でな……。退屈などしてゐる暇がいつたい何處にありますい？」

この會話のやりとりの間ぢゆう、チチコフはしげしげと客の様子を眺めながら、相手の稀に見る美貌や、きりりとした繪のやうな姿や、まだ汚濁の跡をとどめぬ青春の瑞々しさや、吹出物ひとつない純潔無垢な顔の美しさに驚かされた。情熱や悲哀はもとより、不安や動搖に似たやうなものすら、この男の處女のやうな顔に一抹の暗翳を投げることも、一筋の皺を刻むことも遠慮してゐた、さればとて、それがために生氣が躍動してゐる譯でもなかつた。時たま皮肉な微笑に輝くことはあつても、その顔は妙に始終ねむたさうである。

「横合ひから甚だ失禮ですが、」と、チチコフが口を出した。「お見かけしたところ、あなたのやうな御立派な方がくさくさしていらつしやるとは、どうも手前にも腑に落ちませんなあ。尤も金子が自由にならないとか、悪い敵でもあるといふのなら別ですがね、世間にはまます人の生命^{いのち}まで狙ふ奴がありますから……。」

「それあもう、」と、美男の客がそれを遮つた。「生活に變化さへ生じるなら、時には何か心配ごとでもあつてくれた方がいいと思ひますよ。せめて腹でも立てさせてくれる人があつたらと思ふんですがね、それさへないんです。いやもう退屈でくさくさするばかりですよ。」

「それでは、御所領の土地でも十分おありにならないとか、農奴の数が少ないとでも？」

「いや、どういたしまして。私は兄と二人で一萬^{マン}デシヤチンからの土地と、千人以上の農奴を持つてゐますよ。」

「をかしいですねえ、手前にはどうも會得^{あはれ}めませんよ。では、もしや凶作とか悪疫にでも見舞はれなすつたんで？ 男の百姓がうんと斃れたとでも仰つしやるんで？」

「ところがその正反對で、萬事がすこぶる好都合に行つてをりますし、それに私の兄は素晴らしい手腕の領主でしてね。」

「それでゐて、くさくさしてをられるなんて！ 手前にはとんと吐へ入りませんねえ。」さつと言つて、チチコフは肩をすくめた。

「さあ、ではそのふさぎの蟲を一つ追つばらつてやりませうや。」と主人が言つた。「アレクサトシヤ、大急ぎで臺所へ駆けて行つて、料理番に直ぐ肉饅頭を出すやうに言ひなさい。それから、のらくらのエメリヤンと泥坊のアントーシカは何處にゐるんだ？ どうして前菜を出さないのだ？」

ところが、その時パツと扉が開いた。のらくらのエメリヤンと泥坊のアントーシカとがナブキソを持って現はれると、忽ち食卓の用意が出来て、先づ盆に載せた色とりどりの浸酒の饅が六本出た。その盆や玻璃壺のまはりに、見る見る食慾をそそるいろんな摘みものの皿がまるで頸飾のやうに竝べられた。召使たちは次ぎ次ぎと何か蓋物に入つた料理を運びながら、きびきびと立ちまはつた。その蓋物の中からは沸々とバタのたぎる音が聞こえてゐた。のらくらのエメリヤンと泥坊のアントーシカとは、なかなかどうして、痒いところへ手がとどくやうに立ち働いた。のらくらだの泥坊だのといふ綽名は、單に彼等を鼓舞激勵するために附けられたものである。主人も決して口汚く罵ることの好きな人間ではなく、根は至つて好人物であつた。が、露助といふやつは、どうもかういふピリツと薬味のきいた言葉を使はずには濟まされないので。それは胃の腑を刺戟するための一杯のウォツカと同様に、露西亞人には必要なのだ。どう仕様があらう？ さういふ性分で、何によらずあつさりしたことが嫌ひなのだから。

前菜につづいて午餐になつた。ここへ來ると好人物の主人が、すつかり暴君に變つてしまつた。誰かの皿に肉が一切れしかないと見てとると、『連理の枝、比翼の鳥といつてな、人でも鳥でも配偶なしでは世渡りが出来ませんよ』と言つて、彼はすぐさま別の肉片を取つて相手の皿へ載せた。相手の皿に二切れあれば、『二つといふ數はよくありませんよ！ 神様だつて三位一體がお好きでせう。』さう言ひながら、すかさず三切れめを轉がしこむ。お客が三切れ食べをはると、『何

處に三つ輪の荷馬車といふのがありますかい？ 誰が三隅の小屋なんてものを建てますかね？』と言ふ。四切れの場合にもちやんとそれに適した洒落があり、五切れの場合にも同様である。チコフは大きな切れをかれこれ十二ばかりも平らげてから、『うん、主人もまさかこれ以上しつこいことは言はないだらう』と思つた。ところが案に相違して、主人は今度は何も言はずに、串焼きにした犢の鞍下の部分を、腎臓と一緒にドサリとばかり彼の皿へ盛りこんだもので、そのまゝ犢が並大抵の代物ではないのだ！

「こいつは二年越し牛乳で育てましてね、」と主人が言つた。「まるで息子のやうに面倒を見たものですぜ！」

「もうとてももいただかれませんかよ。」とチコフが言つた。

「まあ一口やつてみてから、『とても食へない』と仰つしやるがよろしい。」

「もうお腹へ入りませんよ、入れる餘地がありませんもの。」

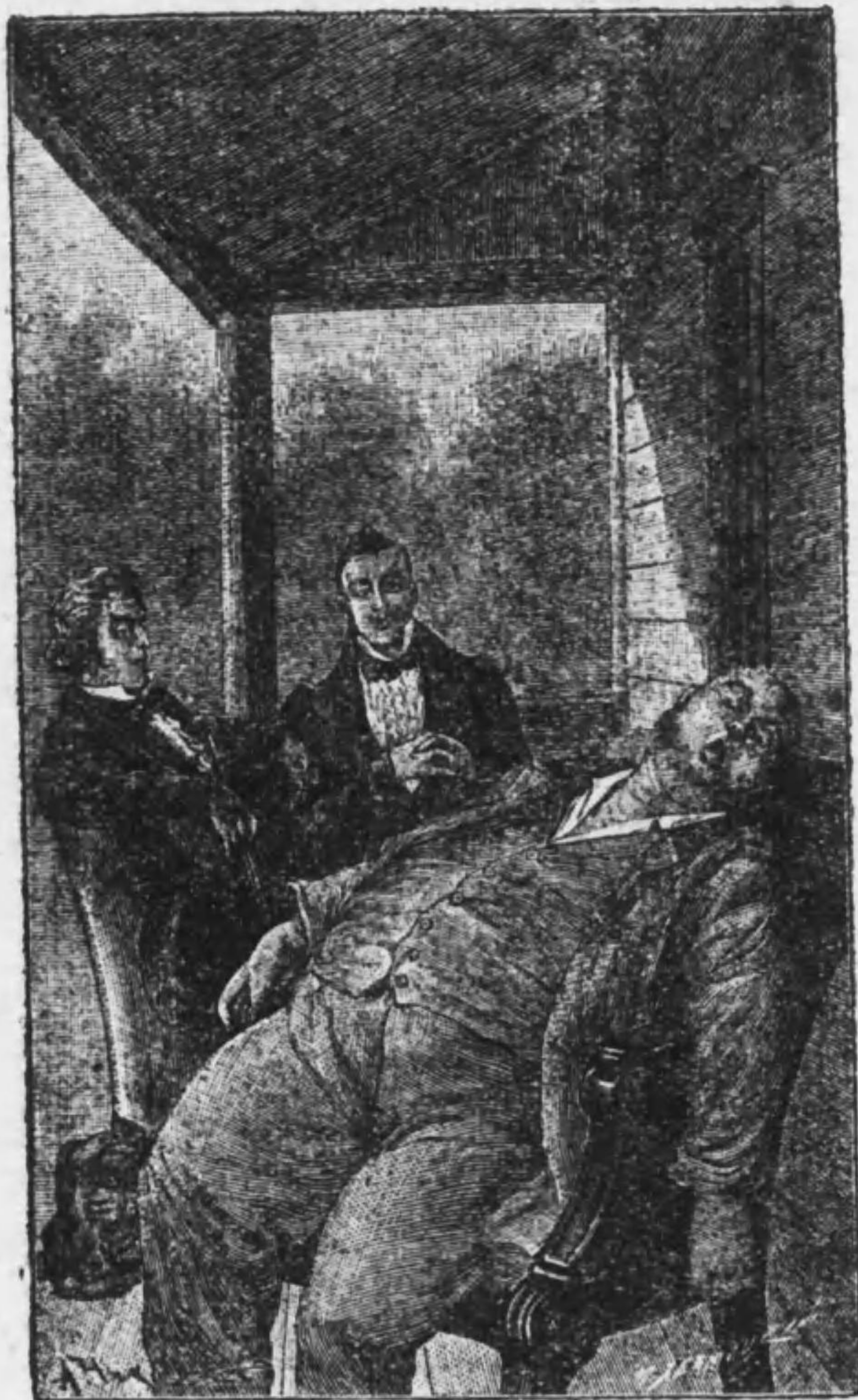
「ね、諺にもいひませう——教會が一杯で席がなくても、市長がやつて來れば席が見つかるつてね。それも、林檎一つ落つことす隙もない雑沓の中にですぜ。まあ一口やつて御覽なさい——この一切れがつまりその市長なんですよ。」

チコフは食べて見た——成程そいつは市長と同じで、とても入りつこないと思つたのに、胃の腑の中にはちやんと空席が見つかつたものだ。

「ふん、こんな人間が彼得堡だの莫斯科だのへ行つたらどうなるだらう？　こんな御馳走をせめては三日には、三年と経たないうちに元も子もすつてしまふだらうに！　」つまり、かう思つたチチコフは、現在すでにさうなつてゐて、こんな御馳走せめなどはしなくても、三年どころか三月で何もかもがファイになりかけてゐることを知らなかつたのである。

主人は引つ切りなしに、次ぎから次ぎへと酒を注いだ。客があけない杯は、アレクサーシャとニコラーシャに飲みほさせたが、二人はぐいぐいと平気で杯を重ねたもので、彼等が都會へ着いた曉に、人知の如何なる部面へ注意を向けるかといふことは今からもう明白であつた。客たちはそんな調子には行かなかつた。彼等はえんやらやつとの思ひで露臺へ軀を運び、辛うじて安樂椅子に腰をおろした始末である。主人は座褥の大きさが四人分もあるやうな専用の太安樂椅子に腰をおろすなり、すぐにぐつすり眠つてしまつた。彼のでつぷり肥つた五體は忽ち鍛冶屋の轆に轉化して、だらしなく開いた口と大きな鼻の孔からは、どんな新進作家の頭にもちよつとやそつとには浮かびさうにないやうなおそろしい音が漏れはじめた。太鼓のやうな音もすれば、フリュートのやうな響きも混り、さうかと思ふと妙に斷續的な、犬の遠吠のやうな唸り聲も聞こえた。「どうです、えらい嘶子方ぢやありませんか！」と、プラトリーノフが言つた。チチコフも笑ひ出した。

「無論、あんな風に無茶な大食をしてをれば、何もくさくさとふさぎの蟲などに取つつかれる



《どろどろと、いらいら、あやまちのせいかん》とフートラフが
言つた

心配はない筈ですよ！ すぐに寝込んでしまふのですもの。ね、さうぢやありませんか？」

「さうですなえ。しかしですよ、こんなことを申しては甚だ失禮ですけれど、どうして又さうくさくさなすつていらつしやるのか、頓とのみこめませんよ。退屈をまぎらす方法は幾らでもあるぢやありませんか。」

「ぢやあ、どんな方法がありますか？」

「お若い方には何だつて出来るぢやありませんか！ ダンスをするとか、何か器樂をやつて見るとか…… それとも、結婚をなさるのもいいぢやありませんか。」

「誰と結婚するのです？」

「では、この界限には年頃の綺麗で金持の娘さんがないとも仰つしやるのですか？」

「ええ、ありませんねえ。」

「ぢやあ、他所でお捜しになつたらいいでせう、あちこちへお出かけになつて。」かう言ひかけた時、チチコフの頭の中にフト素晴らしい考へが閃めいた。「さうさう、素晴らしい方法がありますよ！」さう言つて彼は、プラトリーノフの顔をじつと見つめた。

「どんな方法なんです？」

「旅行をするんですよ。」

「旅行といつて、いつたい何處へ行くんですか？」

「もしお暇でしたら、一つ私と一緒ににお出かけになりませんか？」かう言つてチチコフは、プラトリーノフを見やりながら吐の中では、「こいつは旨いことになるぞ。さうすれば旅費は割勘にしても、馬車の修繕費はそつくりこの男に負擔せることが出来るからなあ」と考へた。

「で、あなたは何處へいらつしやるのですか？」

「さしあたり、自分の用事といふよりは、他人の用事で旅をしてゐるのです。つまり私の極く近しい友人で、まあ恩人ともいへるベトリッシェフ將軍に頼まれて、親戚まはりをしてゐるのです……。無論、その親戚まはりには親戚まはりとして、一つには、いはば自分自身のためもありましてね。それと申しますのも、廣く世間の様子や、人の世の浮き沈みを見て歩くのは、誰が何と言つても、ちやうど生きた書物と同じで、まあ第二の學問なんですからねえ。」かう言ひながらチチコフは、同時に心の中では、「實際、こいつは旨く行きさうだぞ。旅費を全部この男に負擔せたいし、おまけにこの男の馬で出かけることにして、おれの馬は奴さんの村に當分あづけておくことだつて出来るんだから」と思案をめぐらしてゐた。

（少しくらゐ旅に出て悪い筈はないさ！）と、プラトリーノフはプラトリーノフで心に思つた。（家にゐても別にすることがあるぢやなし、さうでなくても家政は萬事兄貴が引受けてゐるんだもの。して見れば、何ひとつ差支への起こる心配はない。ほんたうに旅に出て悪い譯はないさ！）——「では、如何でせう、」と、彼は隣に出して訊ねた。「僕の兄のところは二日ばかり逗留して頂け

ないでせうか？ でないと、兄が僕を出してくれないかも知れませんから。」

「それあもう、願つてもない仕合せで、二日どころか、三日でも御厄介になりますよ。」

「ぢやあ、話はきまりました！ 御一緒に出かけることにしませう！」と、プラトリーフは元氣づいて言つた。

二人は約束の手打ちをした。「出かけませう！」

「何處へ！ 何處へ行くんです？」と、主人が眼を醒まして、きよろきよろと二人を眺めながら喚き出した。「いや、いけませんよ、御兩人！ 馬車の輪はもう外づさせておきましたし、あなたの馬は、プラトン・ミハールイッチ、十五露里も先きへ追ひやつてしまつてありますよ。いや、あなた方は今晚は泊つて、あす早目に晝飯を食つてから、何處へでも勝手に出かけなさるがいいいで。」

ペトウィーフにかかつては手も足も出なかつた。結局、否應なしに居残らされてしまつた。その代り二人は素晴らしい春の夕べを享樂することが出来た。主人は客のために川遊びを催した。十人の漕手が二十四艇の櫂をそろへて、唄をうたひながら、鏡のやうに滑らかな湖面に舟を進めた。舟は湖水から、兩岸の急勾配をなした、見渡すかぎり際限もない川へ入つて、岸から岸へ横に張り渡された、魚漁のための網を絶えずぐぐつた。流れは小波ひとつ立てず、ただ聲もなく次ぎから次ぎへと景色が移りかはり、相次いで現はれる木立はさまざま樹木のたたずまひで一行

の眼を樂しませた。漕手たちが二十四艇の櫂を一齊につかんで、不意にそれをさつと上へ持ちあげると、端艇はひとりで、微動だにせぬ鏡のやうな水面を、するすると輕快な鳥のやうにすべつて行く。舵子から三番目の、肩幅のひろい音頭取りの若者が、きれいに澄んだ朗々たる聲を張りあげて、まるで小夜鳴鳥の咽喉を思はせるやうな節まはしで唄の冒頭のはじめの節をうたふと、五人がそれにつれて合唱し、六人がそのあとをつけた——そして露西亞そのもののやうに涯しない唄は翳々としてあたりにひろがつた。ペトウィーフもぞくぞくしながら、合唄隊の聲が弱ると、それに力を添へるやうに胸間聲を張りあげ、チチコフもまた自分が露西亞人であることを今更のやうに痛感した。が、プラトリーフだけは、「こんな物悲しい唄のどこが好いのだらう？ こんなものを聞いてゐると心がますます憂鬱になるぢやないか」と思つた。

一行が歸路についたのはもう黄昏時であつた。もう空の色も映らぬ水面を盲ら滅法に櫂がたたいた。闇の中から一行は、ここかしこに篝り火の燃えてゐる岸へ着いた。そこでは漁師たちがピチピチした鱈を料理して、大五徳にかけた鍋で魚汁を煮てゐた。何もかもがもう皆家へ歸つてゐた。村の家畜や家禽はもう疾づくに追ひやられて、そのために立つた埃ももう鎮まつてゐた。それを追ひ立てた牧夫たちは、いつも貰ふ一壺の牛乳を待ちながら、魚汁の御相伴にあづからうもの、門際にじつと立つてゐた。薄暮の中に人々の立ち騒ぐ微かな物音と、どこか他所の村から聞さえてくる犬の啼き聲がした。月が昇つて、暗くなりかけた四邊を照らしはじめた。と、隈な

く萬象が光りを浴びた。素晴らしい畫面である！しかし、それを嘆賞する者は誰ひとりなかつた。かういふ時にはいつも先頭に立つて、互ひに追ひつ追はれつ標悍な駒を驅るニコラーシャとアレクサーシャも、今は、都から來た士官候補生に吹きこまれた莫斯科や、喫茶店や、劇場のこつとばかり考へてゐた。また彼等の父はどうして客に饜腹くはせたものかと案をねつてゐた。ブラトノフは欠伸ばかりしてゐた。結局チチコフが一番昂奮してゐた。(ええ、ほんとに！何時かはおれもこんな村を手に入れたいものだ！)そして美しい細君や幼いチチコフ二世どもの姿がまざまざと臉に浮かぶのであつた。

が、夕飯にも亦一同は饜腹つめこんだ。パーヴェル・イワーノギッチは就寢のために案内された部屋へ入ると、寢床の上へごろりと横になつて、ちよつとお腹をさすりながら、『まるでこりや太鼓みたいだ！』と、呟やいた。『もつどんな市長だつてはいれつこないぞ。』と、こゝろで、どういふ廻りあはせか、彼が案内された部屋は主人の書齋と壁一重となりで、その壁がまた薄つべらなため、隣室の話聲が一々手に取るやうに聞こえた。主人は料理番を呼んで、あすの朝食が早いことに事よせて、純然たる晝餐の料理を言ひつけてゐるのであつたが、その素敵もない註文といつたら！これを聞いたら死人でも食欲を起こさうな、素晴らしいものであつた。

「それから魚肉饅頭の四角いやつを拵らへてくれ。」と主人は、舌舐めずりをするやうな音をさせて、スーつと息を吸ひながら言つた。「一つの角へは蝶鮫の頬と軟骨を入れてくれ。もつ一

つの角へは蕎麥粥と、それから葱をまぜた蕪だの、甘い牛乳だの、腦髓だの、それからまた……それら、いろんなものがあるだらう。……それでな、いいかい、片側は狐色に焦がして、反対側はうつつりと軽く焼くんだぞ。それから、底へはな……。全體をじつくりと、中までよく焼いて、つまり、その何だよ、全體がふんはりとして——ぼろぼろこぼれるやうな風ではなく、口へ入れると音もなく、淡雪みたいに溶けてしまふといつた鹽梅にだよ。」ペトワーフはさう言ひながら、舌を鳴らして、唇を舐めずらしい様子だつた。

「えい、畜生！ さつぱり寝られやしない。」さう呟やいてチチコフは、何も聞こえないやうにと頭からすつぱり上掛けをひつ被つた。が、やはり上掛けを通して次ぎのやうな言葉が聞こえて來た。

「それから、蝶鮫のぐるりには甜菜を花形に切つたのや、しらすや、椎茸や、それから、それ、蕪だの、人參だの、豌豆だの、まあ、さういつた風ないろんなものでな、出来るだけ澤山にあしらいひをつけるんだぞ。それから豚の胃囊は、よくふやけるやうに今から氷を入れておくんだぞ。」まだその他にペトワーフはいろんな料理を言ひつけた。が、ただ『うつつりと焦げ色をつけるんだぞ、狐色に焼くんだぞ、よく蒸すんだぞ！』などといふ聲が聞こえるだけであつた。なんでも七面鳥をどうのかうのと言つてゐる聲を聞きながら、やうやくチチコフは眠りに落ちた。

翌る日も客はまた、しこたま詰めこまれたものだから、ブラトノフはとても馬になど乗つ

て歸られない始末であつた。で彼の乗馬は、ペトウーフの家の馬丁をつけて送りかへされた。二人は輕馬車に乗りこんだ。例の顔のいかつい犬も氣懶さうに馬車の後について歩きだしたが——こいつも矢張り食ひすぎたのである。

「何にしてもこれはあんまりです。」と、邸の外へ出た時チチコフが言つた。

「第一、あの男は退屈ひとつしないのだから、まつたく癪にさりますよ！」

（ふん、おれだつて君みたいに年に七萬留からの収入があつたら）と、チチコフは心に思つた。

（退屈なんて素振りにだつて見せやしないぞ。例の徴税代辨人のムラーゾフつて男はどうだい——口でいふのは容易いもの、一千萬といへば……どえらい身代だからなあ！）

「どうでせう、ちよつと寄り道をしてもお差支へないでせうか？ 姉と姉婿に暇乞ひをして行きたいと思ふんですが。」

「喜んでお供いたしますよ。」とチチコフが答へた。

「その義兄は、まづこの界限きつての地主なんですよ。義兄はね、あなた、七八年前までは二萬留しか収入のなかつた所領から、今では二十萬留からの収入をあげてゐるんですからね。」

「成程、それあ確かに珍らしい御人物ですねえ！ そんな方とお近附になるのは至極愉快ですよ。どうしてどうして！ いはばも……。時にその方の御苗字は何と仰つしやるんですか？」

「コスタンジョーグロといひます。」

「お名前と御父稱も、伺つておきたいのですが。」

「コスタンチン・フォードロギッチといふんですよ。」

「コスタンチン・フォードロギッチ・コスタンジョーグロさんですね。その方とお近附になるのは非常に愉快ですよ。さういふ方を知ることがは教訓になりますからね。」

プラトノフはセリフアンの介添役を引受けた。それもその筈で、この先生は辛うじて馭者臺にしがみついてゐる有様だつたからである。ペトウーフに至つては、二度も眞逆様に馬車からころげ落ちたので、到頭しまひには、荒縄で馭者臺に縛りつけておかなければならぬ爲體であつた。「何といふ畜生だらう！」チチコフはたださう繰り返すより他はなかつた。

「ね、御覽なさい、ここからが義兄の地所なんですよ。」とプラトノフが言つた。「がらりと様子が違ふでせう。」

成程さういへば、原一面に實生の苗木が植わつてゐて、すくすくとまるで矢のやうに揃つてゐる。その次ぎには前のより丈の高い、やはり若木の林がつづき、その次ぎにはまた更に生長した植林がつづくといふ鹽梅に、だんだん丈が高くなつてゆく。次ぎにはまた一面に苗木に蔽はれた原つばが現はれて、再び前と同じやうに、若木の林となり、成木の林となつて行くのである。一行は城壁でもくぐるやうに、さういふ林を三度くぐり抜けた。「これは皆、ざつと八年から十年ぐらゐの間に生長したものです。他の人のやり方なら二十年かかつてこれだけにはなりません

まいよ。」と、プラトノフが言った。

「こんな風にするのはどうしてですか？」

「それは義兄に訊いて下さい。あれは一角の地質学者ですからね、理由のないことは決していたしませんよ。土壌のことに精通してゐるだけでなく、何の隣りへは何をおかねばならないとか、どんな穀類の傍へはどんな木を植ゑなければならぬといふやうなことをちゃんと心得てゐるのです。義兄のところでは何によらず同時に三つも四つもの働きをしてゐるのですよ。森にしても同じで、森が森として役に立つ外に、それがあたりの島に如何ほどの濕氣を與へるとか、落葉が如何ほどの肥料になるとか、また如何ほどの蔭を提供するといった具合に役立つのです……。近隣が早魃に苦しむやうな場合にも、義兄のところでは一向そんなことには困りませんし、隣り近所が不作の場合にも、義兄のところでは一向そんな氣配もないのです。残念ながら、僕はどうもさういふことはよく知りませんので、十分にお話することが出来ませんが、義兄はいろいろな事を知つてゐるのですよ……。魔法使だなんて言はれてゐましてね。實にいろいろさまざまなやり方をしてゐますよ……。が、しかし僕には矢張り退屈ですなあ……。」

「いや、こいつはまつたく驚くべき人物だぞ」と、チチコフは思つた。(それにしても、この若造は一向うはつづらのことしか知らないのです、詳しい話の聴けないのは甚だ残念だ。)

つひに村が現はれた。まるで何處かの町のやうに、三つの丘に無数の百姓小屋が散在して、そ

の各々の丘の頂きには一つづつ教會堂がたつてをり、村は到るところ、巨大な禾堆や穀塚で區切られてゐた。(なるほど)とチチコフは思つた。(これは、確かにピカ一の領主が住んでゐる村だ。)百姓小屋は皆がつしりしてゐるし、往還はよく踏みならされてをり、荷馬車が置いてあるのを見ても、いかにも丈夫に出来てゐて、まだ眞新らしく、出つくはす百姓の顔附も何となく利口さうなら、牛や羊も粒選りの種類で、百姓に飼はれてゐる豚までが貴族ぶつた面構へをしてゐる。して見れば、確かにこの村の百姓どもは、唄の文句にもあるとほり、(鋤鍬で銀を掻きあつめてゐる)のに違ひない。ここには別に、いろんな趣向を凝らした英吉利風の庭園だの芝生だのといふものはなかつたけれど、昔ながらに、納屋や作事場がずらりと列をなして地主館の間際までつづいてゐたから、領主は周囲の出来事を何から何まで手に取るやうに見ることが出来た。邸の高い屋の棟には高々と望樓が聳えてゐたが、それは何も見えや飾りではなく、遠くの野良で働く労働者を見張るために設けられたものである。一行を玄關へ出迎へた召使たちにしても、酔拂ひのペトールシカなどは似ても似つかぬキビキビした連中ばかりで、燕尾服などはつけないで、紺のホームスパンの哥薩克上衣を着てゐた。

この家の女主人が自から玄關まで駆け出して來た。彼女は、牛乳に血を混ぜたやうに瑞々しく、安息日のやうに美しく、弟のプラトノフと瓜二つであつたが、但し弟のやうに倦怠した様がなく、饒舌で快活な點だけが違つてゐた。

「あら、いらつしやい！ 本當によく来て下さつたのねえ。コンスタンチンは今ゐないの上。でも、ぢき歸つて来ますわ。」

「何處へ行つたんです？」

「何か仲買人たちと村で用事があるんですつて。」と彼女は、二人を部屋へ案内しながら喋りつづけた。

チチコフは好奇の眼を光らせて、二十萬留の年收をあげるといふこの非凡な人物の住むをじろじろ眺めながら、あたかも貝の抜け殻を見て、中に残つてゐる痕跡から、その中にゐた牡蠣や蝸牛の大きさを推定するやうに、この住ひの様子から主人の氣風なり持前を探索しようと思つたのである。が、如何なる推定をも下すことは出来なかつた。部屋といふ部屋がみな質素で、寧ろがらんとした様子を見せてをり、壁畫もなければ、油繪もなく、ブロンズや花はもとより、陶器を載せた飾り棚一つなければ、書物一冊見あたらなかつた。要するに、この家の主人の主要な生活が、四つの壁にかこまれた室内では全く行はれず、常に彼は田野にあつて、いろんな計畫にしても、燧爐の前でポカポカと火にあたりながら、のびのびと安樂椅子に凭りかかつて、奢侈逸樂のあひだに前以つて立案されるのではなく、仕事に携はつてゐる現場で頭に浮かび、浮かんた現場ですぐ實行に移されるのだといふことが明らかであつた。ただ一つ室内でチチコフの眼に付いたのは、女手のよく行きとどいてゐることで、卓子や椅子に清潔な菩提樹の板をならべて、その上

にいろんな花の花弁がのせて乾かしてある……。

「姉さん、何だつてこんな芥をならべておくんです？」とプラトリーノフが言つた。

「芥つてことがありますか！」と、女主人が言つた。「これは熱病に一番よく效く薬ですよ。去年も、うちではこれを使つて熱病にかかつた百姓をみんな癒してやりましたよ。こちらのは浸酒の材料ですし、こちらのはジャムにするんです。あんたたちはね、ふうんジャムかい、ふうん鹽漬かいつて、いつもせせら笑つてる癖に、食べる段になると、こりや美味しいつて褒めるんですよ。」

プラトリーノフはピアノの傍へ近寄つて樂譜を一つ二つはぐつた。

「なあんだ！ おそろしく古臭いものばかりぢやないか！」と、彼は言つた。「姉さんは、これでもよくも羞かしくありませんねえ？」

「まあ、勘忍して頂戴、でもあたし、もうずるぶん前から音楽などに憂身をやつしてゐる暇がないんですもの。もう八つにもなる娘があつて、いろいろ教へなきやならないでせう。暢氣に音楽などやつてゐる暇をつくるには、あの娘を外國人の家庭教師にまかせなきやなりませんからね。いいえ、勘忍して頂戴、あたし、そんなことをする氣にはなれませんわ。」

「姉さんもずるぶん世帯じみてしまひましたねえ！」さう言つて弟は窓際へ近寄つた。「あつ、歸つて来ましたよ！ 義兄さんが、今そこへやつて来ますよ！」と、プラトリーノフが叫んだ。

チチョコフも急いで窓際へ近寄つた。駱駝のフロックコートを着た、四十がらみの、顔の淺黒い、きびきびした男が玄關へ近づいて來るところだつた。形振はいつかう構はない性質らしい。天鷲絨まがひの縁無帽を被つてゐる。その男を中にはさんで、二人の下層階級の男が帽子を手にしながら、左右に附添つてやつて來る。歩きながら二人は、主人と何かしきりに折衝してゐる様子である。一人の方はただの百姓で、もう一人の方はどうやら外來のインチキ仲買人といった風體で、紺いろの短外套を着てゐる。三人は玄關の前に立ちどまつたので、彼等の話が部屋の中まではつきり聞こえだした。

「お前たちはかうしたらいいよ、まづお前たちの主人から自由を買ふのだ。その金子はわしが立替へておいてもいいよ。後でそれだけの仕事をして、返済してもらへばいいからね。」

「いんにや、コンスタンチン・フォードロギッチさま、今更、身受けなんどしても、つまりましねえだよ。どうか、このまま引取つて下せえまし。且那にさへついてゐりやあ、いろんな智慧分別が付きますだでなあ。もう、且那みてえに賢い人は、世界ぢゆう探したつて見つかりつこありましねえだもの。何せわし共は、今ぢや自分で自分を支へることもてんで出來ねえぢふ、情けねえ身の上でがしてな。當節ぢやあ、酒屋の野郎にしてからが、えらくきつい浸酒を賣り出しをつて、ちよつくら一杯ひつかけようものなら、あとで水の五升も飲まにやなんねえくれえ、腹が焼けただれつちまひますだもの、正氣にけえつた時分には、もう有金をすつかりはたいてをるち

ふ始末がすよ。何せ、よくねえ誘惑がザラに殖えましたでな。これあ、何でがすよ、惡魔めがこの世をひつ掻きまはしてゐるのでがすよ、てつきり！ 何によらず、ただもう、百姓を迷はしたり誑らかしたりするやうなものばかりで、やれ煙草だ、やれ何だと、いろんなものが矢鱈に殖えましてな……。どうも仕様がねえでがすよ、コンスタンチン・フォードロギッチさま！ 人間の淺ましさに、我慢をするぢふことが出來ましねえんで。」

「いや、ところがそこなんだよ。なかなかどうして、わしのところにしてからが、やつぱり窮屈なものだよ。それあ成程、初めから牛も馬も、何もかもまとめて一度に宛がふには宛がふけれど、その代りわしは百姓どもに、他所では見られぬやうな嚴格なきまりを要求するのだ。わしのところでは働くといふことが第一の掟で、それがわしのための仕事だらうと、百姓自身のための仕事だらうとを問はず、わしは何人にもごろごろ怠けてゐることを許さないのだ。わし自身も去勢牛のやうに働く、だから、うちの百姓どももせつせと働いでゐるよ。抑々くだらない考へが頭に浮かぶのも、せつせと働かないからだつてことを、わしは經驗でよく知つてゐる。だからまあ、お前たちも、集會でも開いて、よく考へて、みんなで相談してみることだよ。」

「ええ、わしどもはもう、これについぢやあ、とつくり相談したのでがすよ。コンスタンチン・フォードロギッチさま。年寄どもの意見にしてからがかうでがす、『かれこれ言ふがものはねえだよ！ お前さまのこのお百姓はハアみんな金持ぢや。それもその筈で、お坊さままでが

みんなお慈悲ぶかい人ですもの。それに引きかへ、おらがの村ぢやあ、なけなしの坊さままで取られてしまつて、葬ひ一つ出せねえ始末ぢや」とね。

「それにしても、一應かへつて談合してみた方がいいよ。」

「ぢや、さうしますべえ。」

「ところで、そこんところですが、コンスタンチン・フォードロギッチさま、一つ御不承を願つて……少し値段を引いて頂く譯にはまゐりませんでせうか。」と、反対側に従つてゐた、紺の短外套を着た外來の仲買人が言つた。

「わしは先刻も言つたとほり、さういふすつたもんだの駈引が大嫌ひなんだ。ちやうど借金の返済期日に迫られて相手が困つてゐるところをつけこんで、お前たちが襲撃するやうな地主とは少々わけが違ふよ。お前たちの手はちやんと知つてゐるぞ。誰が、いつ、どこへ、金子を拂ふことになつてゐるかといふ、目録までお前たちは持つてゐるのだ。だから、いつかう不思議でも何でもないさ。そんな連中の弱身につけこめば、半値にだつて値切り倒すことが出来る譯だからなあ。だがわしには、お前の金子なんぞどうだつていいんだ。品物は二年でも三年でもねかせておいたつて構はないよ。別に抵當銀行へ利子を拂はねばならんやうな借金もないからね。」

「それあもう仰つしやるとほりでございますよ、コンスタンチン・フォードロギッチさま、いや、手前にしましても何でございます、その、これから先きも末始終ご品風に預かりたいと思へ

ばこそでございます、決して懲得づくでこんなことを申しあげるのではありませんので……それではこの三千留だけは手附金としてお納めおき願ひませう。」さう言つて仲買人は、懐ろから一束の脂染みた銀行紙幣を取り出した。コスタンジョーグロは無難作にそれを受取ると、勘定もしないでフロックの後ろポケットへねちこんだ。

「ふん！」と、チチコフは心に思つた。(まるで手巾なみの扱ひだよ!) そのコスタンジョーグロがやがて客間の入口へ姿を現はした。

チチコフは、その浅黒い顔と、どこどころ若白髪をまじへた剛さうな黒い頭髪と、生々とした眼附と、どこか癩癩の強さうな、いかにも激情的な南國人らしい風采とに、一層驚かされた。彼は純粹の露西亞人ではなかつた。當人自身も自分の祖先が何處から出たものやら全然知らなかつた。系圖などといふものは一家を經營してゆく上には無用の長物で、何ら取るに足らないものとして、彼はいつかう心に懸けてゐなかつた。どこまでも自分は露西亞人であると思ひこみ、露西亞語以外の言葉は知らなかつた。

プラトリーノフはチチコフを紹介した。二人は接吻を交はした。

「義兄さん、僕は氣鬱を癒すために、一つ方々の縣下を旅行してみようと思ふんですよ、」と、プラトリーノフは自分の計畫を打明けた。「このパーウェル・イワーノギッチと一緒に行かないかと言つて下さるのでね。」

「それあ結構ですねえ。」と、コスタンジョーグロは答へた。「して、どちらの方面へ？」と、慇懃にチチコフの方へ向直りながら、彼は言葉をつづけた。「これからおいでになる御豫定なんですか？」

「實を申しますと、」とチチコフは、例の調子で慇懃に首をちよつと横へ傾げながら、同時に片手で安樂椅子の腕をさすりながら答へたものだ。「目下のところ手前は、私用といふよりは寧ろ他人の用事で旅をしてゐるのでございまして。手前の極く近い友人で、また恩人とも申すべきベトリッシチェフ將軍に頼まれて、親戚まはりをしてゐるのでございまして。勿論、親戚まはりは親戚まはりとしてしまして、一面からはいはば自分のためでもございましてね。痔疾によいことなどは取り立てて申しあげるまでもなく、廣く世間を眺めたり、人の浮き沈みを見て廻りまするのは、いはば生きた書物でもあり、學問でもございましてからね。」

「さうですねえ、方々の土地柄を見て歩くのも結構なことですよ。」

「よく仰つしやつて下さいました。まつたく悪いことではありませんからね。ちよつと見られないやうな事物を眼にすることも出来まじ、おいそれとは會はれないやうな人物にも會へます。さういふ人と談話を交へますのは、取りも直さず、金貨を手に入れるのも同然でございまして、例へば、現に只今も、さういふ好機會に直面してゐる次第でございまして……。どうか一つお願いいたします。手前の尊敬してやまないコンスタンチン・フォードロギッチ、どうか是非お教へ下

さいまし。眞理をお示し下さいまして、手前の渴望を癒して頂きたいのでございます。あなたのいみじき御教訓をば、手前は天與の賜餐のやうに期待してゐるのでございます。」

「ですが、そりや何をですか？……何をいつたいお教へしるかと仰つしやるのですか？」とコスタンジョーグロは、ちよつと鼻白んで訊き返した。「私などの知つてゐるのは、いつかう埒もないことばかりですのに。」

「ええ、識見でございましてよ、あなた、識見なんぞでございますよ——つまり、骨の折れる舵で一村の農政を取りさばいて行く智慧才覚でございましてよ。確實な収入をさめて、空想ではない實際の財産を獲得し、それによつて國民としての義務をつくし、同胞の尊敬を贏ち得る智能なんぞでございますよ。」

「さうですねえ、」とコスタンジョーグロは、やや考へるもののやうに相手を見やりながら言つた。「さういふことでしたら、手前どもに一日御逗留になつては如何です。及ばずながら管理方を残らずお目にかけて逐一お話いたしませう。別に難かしい智慧も才覚もいらぬことを、すぐ御了解になりますよ。」

「さうでございまして、是非お泊りになつて下さいませよ。」と女主人も相槌を打つた、それから弟に向つて、かう言ひ足した。「あんたもゆつくりしていらつしやいよ。別に急ぐこともないんでせう？」

「僕はどちらでも構ひませんがね、パーウェル・イワーノギッチの御都合は如何ですか？」
 「それあもう手前とて、御厄介になることに何の異存もございせんがね……ただ一つその、先刻も申しあげましたベトリッシチェフ將軍の親戚に、コシカレヨフ大佐とかいふ人がありまして……。」

「ですが、その人は狂人ですよ。」

「さうさう、狂人ださうですねえ。別に手前は、そんな人を訪問したくはございせんけれど、手前の極く近しい友人で、いはば恩人のベトリッシチェフ將軍が……。」

「さういふ譯でしたら、どうでせう？」と、ユスタンジョーグロが言つた。「いつそ一走り行つておいでになつたら、あの男の村ならここから十露里とはありませんよ。手前どもには、いつでも輕走馬車の用意が出来てをりますからね、——これからすぐお出かけになつては如何です。お茶の時刻までには充分お歸りになれますよ。」

「成程それはいい思ひつきです！」とチチコフは、帽子を掴んで立ちあがりながら叫んだ。

輕走馬車が提供されて、チチコフは半時間ばかりで大佐の村へ送りこまれた。その村は建築中の建物やら改築中の建物やらで全體がごたごたして、通りといふ通りに石灰や煉瓦や丸太が山と積まれてあつた。何だかまるで官廳のやうな造りの家も建つてゐた。その一軒には『農具倉庫』、次ぎのには『計理本部』、その先ぎのには『農事委員會』、そのまた向ふには『村民普通教育學校』

と、それぞれ金看板が掲げてあつた。要するに、何でもござれといつた鹽梅にいかめしい施設ばかり並んでゐる！

チチコフは、大佐がペンを口にくはへながら、前立のある事務卓に向つてゐるところへ入つて行つた。大佐は極めて愛想よくチチコフを迎へた。一見この男は至極善良で懇切丁寧な人間らしく、自分の所領を現在の繁榮に導くまでには彼が如何に苦心したかを語り、百姓どもに文化的な奢侈や、藝術とか美術が人間に齎らすところの、高尚な趣味の存在を了解せしめることの如何に困難であるかを、さも情けなさうに訴へて、彼が千八百十四年に聯隊と共に駐屯してゐた獨逸では、水車屋の娘でさへ立派にピアノを弾いてゐたのに、自分の村では今日に至るまで百姓女にコルセットを着用させることが出来ないと言つてこぼした。しかし彼等が無智蒙昧なるがために如何に頑迷であらうとも、自分は飽くまで所志を貫徹して、今に村の百姓どもが犁の柄を片手に、フランクリンの避雷針に關する本だの、ヴィルギーリーの『田園詩』だの、土壤の化學的研究だのを讀むやうにして見せるなどと言つた。

（それあ、さぞ旨くゆくだらうて！）と、チチコフは思つた。（おれなんざあ、今だに『ラワリエール伯爵夫人』すら讀みあげてゐない始末ぢやないか。大體そんな暇がないからなあ。）

大佐はなほいろいろと、人民に福祉を齎らす方法について語つた。何より彼は衣服に重大な關心を持つてゐるらしく、せめて露西亞の百姓の半數が歐羅巴風のズボンを着くやうにさへなれば、

學問も向上し、貿易も進展して、露西亞に黄金時代が到來するにきまつてみると、太鼓判を捺したものである。

チチコフはまじまじと相手の顔を見つめながら、じつと耳を貸してゐたが、しまひには吐の中で、(「こんな男に何も遠慮することはあるまい」)と考へたので、早速、これこれの理由で、しかじかの農奴が入用だから、賣買登記と所定の手續きを踏んで譲渡してもらひたいと申込んだ。

「お言葉の様子から察しますに、」と大佐は、いつかう動ずる色もなく答へた。「それはつまり請願の筋合ひなんですね、さうでせう?」

「仰つしやるとほりで。」

「さういふことでしたら、一つ書面に認ためて差出して下さい。さうすれば願書受附係で受理いたします。受附係で記號を入れてから拙者の手許へ送つてよこすのです。そこで拙者から村務委員會へまはし、補訂を加へた上、監督の手へ渡します。すると監督は祕書と量つて……。」

「いや、飛んでもない!」と、チチコフは悲鳴をあげて、「そんなことをしてゐた日には、いつまでかかるか分つたものぢやありませんよ! 第一こんなことは書面になど麗々しく書けないぢやありませんか? 抑、これはその……。農奴とはいひ條、一面からいへば死人にすぎませんかね。」

「少しも差支へありませんよ。ではそのとほり、農奴とはいひ條、一面からは死人にすぎない

とお書きになるのです。」

「でも、いくら何でも——死人だなんて? まさかそんなことは書けるものぢやありませんよ。よしんば死人ではあつても、ちやんと生きてゐるやうに見せかけておかねばなりませんからね。」

「いいぢやありませんか。ではそのとほり、『但し、ちやんと生きてゐるやうに見せかけておかねばならない』とか、さういふ必要があるとか、望ましいとか、願はしいとかお書きになつたらいいでせう。兎に角これは書類を通して手續きをして頂かなければいけませんよ。英吉利は勿論のこと、ナポレオンだつて手本を示してゐますからね。いま案内係をつけて差しあげますからね、いろんな局課へあなたを御案内するでせう。」

彼は呼鈴をならした。と、一人の男が顔を出した。

「書記! 案内係を呼んでくれ!」そこへ姿を現はした案内係といふのは、百姓とも事務員ともつかぬ男であつた。「さあ、この男が必要な局課へ案内いたします。」

こんな大佐にかかつては手も足も出なかつた。で好奇心も手傳つて、チチコフは案内係につれられて、そのどうしても必要な局課といふやつを一通り見物してやらうと肚をきめた。ところが願書受附係といふのは看板だけの代物で、びつたり扉が閉つてゐた。この係の主任であつたフルリョーフといふ先生は、新たに組織された村建築委員會の方へ廻されてゐた。その後釜にはベレゾーフスキイといふ従僕が据ゑられてゐたが、これも建築委員會の指圖で、何處かへ派遣されて

みた。二人は村務局を訪れてみたが、そこも組織が變つてゐた。酔拂ひが一人寝てゐたから、それを叩き起こしたけれど、さつぱり要領を得なかつた。「わつしどもの村ぢやあ何もかもが滅茶苦茶でがしてな」と、最後に案内係の男がチチコフに言つた。「旦那は鼻をつままれて、いいやうに引きずりまはされてゐるんですがすよ。建築委員會が何もかも勝手にさいばいをして、誰彼なしに仕事から引きはなしては、好きなところへ廻してしまふんですがす。この村で旨い汁を吸つてゐるのは建築委員會だけがさあ。」どうやらこの男は、建築委員會に對して不満を抱いてゐるらしい。チチコフはもうそれ以上、見て廻る氣がしなかつた。もとの部屋へ引き返すと、彼は大佐に一部始終を物語つて、何もかもが滅茶苦茶で、さつぱり要領を得ない上に、第一、願書受附の係なんて、てんでゐやしないと告げた。

大佐は佛然として義憤に燃えながら、感謝のしるしにチチコフの手を固く握りしめた。彼は矢庭にペンを握み、紙を引きよせさま、如何ナル根據ニヨリ建築委員會ハ自己ノ管轄外ナル役人ヲ專斷ヲ以ツテ處置シタルヤ？ 如何ニシテ總支配人ハ、事務ノ擔任者ガソノ部署ヲ後任ニ委ネルコトナク調査ニ出向クコトヲ許容セシヤ？ 且ツ又、村務委員會ハ如何ニシテ願書受附係ノ全ク缺員トナレルコトヲスラ平然ト看過セシヤ？ などといふ、八箇條からなる頗る強硬な質問書を認めた。

（ふん、こりや一騒動もちあがるぞ！）さう思つてチチコフは、徐ろに暇を告げようとした。

「いや、このままお歸しする譯にはゆきませんよ。私はすっかり自尊心を傷つけられてしまひましたからね。抑、農政の正則な有機的組織が如何なるものであるかを一つ證明して御覽に入れませう。そしてあなたの御用件も、一人で萬人の値打を具へてゐるといつた、素晴らしい奴に委嘱してやらせませう、その男は大學まで卒業してゐますよ。うちの農奴は大體こんなものですからね！ では、貴重な時間を無駄におさせしないやうに、一つ私の圖書室でお待ち願ひませう。」さう言つて、大佐は横の扉を開けた。「ここには本でも、紙でも、ペンでも、鉛筆でも、何でもありますからね。どうぞ御自由にお使ひ下さい。あなたはこの部屋の御主人も同様です。文化といふものは萬人に公開されてゐなくつちやありませんからね。」

コシカレヨフはそんなことを言ひながら、チチコフを圖書室へと案内した。それは素晴らしく大きな部屋で、上から下までぎつしり書物でつまつてゐた。又そこには動物の剥製まで並べてあつた。藏書は植林から、牧畜、養豚、園藝等、あらゆる部門にわたつてをり、また豫約の購讀者に限つて頒布されながら、いつかう誰にも讀まれない、いろんな方面の専門雑誌もあつた。どうも、そんな書物では退屈さましにもなりさうになかつたので、チチコフは次ぎの書棚へ眼を移した——が、これはまた更に齒の立たない、哲學書ばかりであつた。すぐ眼の前には、『思想界入門の手引。普遍・總和・本質論、並びに社會的生産力相互分岐の有機的原則會得の鍵』といふ表題をつけた、浩瀚な書物が六冊あつた。どの一冊を取つてバラバラと讀つても、頁といふ頁

に、『顯現』だの、『發展』だの、『抽象』だの、『乖離』だの、『結合』だのといつた、譯の分らない文字が矢鱈に眼につくばかりだ！(こいつはおれの手に負へない)と呟やいて、チチコフは第三の書棚へ眼をうつした、——そこには美術方面の書物が並んでゐた。彼はさつそく一冊のいかげはしい神話的な挿繪の入つた大きな本を引つぱり出して、その挿繪を一枚々々丹念に眺めはじめた。凡そかういつた種類の繪畫は中年の獨身者や、また時には、舞踊劇その他の刺戟物によつて催情をはかつてゐるやうな老人連に珍重されるものである。一冊を丹念に見終つたチチコフが、同じ種類の他の一冊を引つぱり出さうとした時、コシカレヨフ大佐が晴々とした顔附で書類を手にして入つて來た。

「さあ、すつかり出來あがりましたよ、實に立派に！先刻あなたにお話した男はまつたく天才です。ですからね、あの男を他の誰よりも取立てて、あの男だけのために特別の局を設けるつもりです。どうでせう、實に素晴らしい頭腦の持主でしてね、ほんの二三分のあひだに何もかもテキパキと解決してしまひましたよ。」

「まあ、どうにでも勝手にするさ！」とチチコフは思つたが、それでも徐ろに耳を傾けた。大佐は讀みはじめた。

「大佐殿ヨリ御委囑ノ件ニツキ篤ト考慮ノ上、左ノ如ク報告仕リ候。

一、六等官兼騎士パーウエル・イワーノギッチ・チチコフ氏ヨリノ請願ハ、請願ノ筋ソノモノ

ニ疑義ヲ含ミヨリ候。如何トナレバ、假ニモ調査簿ニ記載ノ農奴ヲバ輕マシク死亡者ト断定シテルガ故ニ候。斯クノ如キ名稱ハ恐ラク死亡者ノ意ニハ非ズシテ、死期ニ近キモノノ意ナラント推察仕リ候。而シテ、カカル名稱ノ用ヒラルル處ヨリスルモ、同氏ガ單ニ經驗論的教養ノ持主ナルコトヲ示スモノニシテ、カカル教育法ハ恐ラク小教區學校ニ於イテノミ授クルモノニ候。蓋シ靈魂ハ不滅ニ候ヘバ也。」

「畜生！」と、妓でちよつと讀むのを止めて、コシカレヨフは我が意を得たりとばかりに言つた。「ここんここで奴さん、少しばかりあなたをやつつけてゐますね。だが正直なところ、實に達者な筆ぢやありませんか！」

「第二ニ、當所領ニハ、死期ニ近キモノタルト否トヲ問ハズ、擔保物件トシテ抵當ニ入ラザル農奴トテハ一頭モ之無ク候。蓋シ例外ナク一番抵當ニ入リタルノミナラズ、一頭ニツキ百五十留ツツノ追加ヲ受ケテ二番抵當ニ入リタルガ故ニ候。但シ、地主プレヂシチエフノ告訴ニヨリ係争中ノ小村グマイロフカノミハ例外ニ候ヘド、右ノ訴訟ニヨリ差押ヘヲ受ケタルコトハ、『莫斯科報知』第四十二號紙上ニ公告サレタル通りニ候。」

「それならさうと、何故はじめからさう言つて下さらないのです？ なんだつて、そんな愚にもつかないことで私を引留めたんです？」とチチコフはブリブリして詰つた。

「それはかうなんですよ！ つまり萬事書類の形式を通じてあなたに御諒承を願ふ必要があつ

たからです。決してこれは悪戯ぢやありませんよ。ぼんやりと無意識になら馬鹿でも物事を認識しますがね、しかし萬事はちやんと意識的に判断しなきゃなりませんからね。」

チチコフは憤然として帽子をつかむと、禮儀もなくそもあらばこそ、席を蹴つて立ちあがりざま、さつさと扉口へ駆け出した。彼はブンブン腹を立ててゐたのである。馭者はちやんと軽走馬車を用意したまま、玄關先きに待つてゐた。それといふのも、飼料が欲しいと思へばわざわざ願書を提出しなければならず、従つて、燕麥を馬に與つてもよいといふ許可の下るのはどうせ翌る日になるのだとすれば一々馬を解いてゐても仕方がないと思つたからである。それでも大佐は玄關へ駆け出して、無理やり相手の手を握つて、それを自分の胸へ壓しつけるやうにしながら、お蔭で執行機關の實際の運行状態を知る機会を得たといつて感謝し、何事もつい油断になり勝ちで、事務の原動力といふものは弾機と同じく、放つておけば錆びて弱り易いものだから、どうしても揺り動かしたり追ひ立てたりする必要があると言ひ、端なくも今度の出来事から自分は素晴らしいことを思ひついた——といふのは、建築委員會を取締る監査機關ともいふべき、新しい委員會を設置することで、さつなつた曉には、もはや誰もするを働かうにも働くことは出来ないなどと、べらべら喋りたてたものである。

チチコフがブリブリしながら不足さうな顔で歸つて來たのはかなり晩く、もつとつくに灯りが點いてからであつた。

「どうしてこんなに晩くなつたのです？」とコスタンジョーグロは、チチコフが扉口に姿を現はしたのを見て訊ねた。

「そんなに長く、いつたい何を大佐と話していらつしやつたんです？」とプラトローフも言つた。

「いやどうも、あんな馬鹿には生まれてこのかた會つたことがありませんねえ。」と、チチコフが言つた。

「なあに、それはまだしものこと。」と、コスタンジョーグロが言つた。「兎に角コシカレヨフも、まあ面白い人物ですよ。何しろあの先生には、近頃の才子賢人諸君の馬鹿さ加減がまざまざと鳥羽繪式に反映してゐるんですからね。そら、第一自分の國のことはてんで知りもしないで外國の愚にもつかんことばかり寄せあつめて喜んでゐる、あのおつちよこちよいどものことですよ。いつたい近頃の地主どものやつてゐることはどうです——やれ、事務所だの工場だの、やれ學校だの委員會だのと、何でもござれで、矢鱈に拵らへてばかりゐるぢやありませんか！あの才子賢人諸君は、まづかういつた爲體なんですよ！佛蘭西軍から十二年の役に蒙つた打撃からやつと恢復しかけたといふので、また改めて國を亂してやれつていふ肚なんでせう。まつたくどいつもこいつも、佛蘭西人よりひどい攪亂者ばかりですから、今ではあのピョートル・ベトローギッチ・ベトローフなんていふ手合ひがまだしも取柄のある地主の部なんです。」

「ですが、あの人の財産もやはり抵當に入つてゐるといふぢやありませんか。」と、チチコフが言った。

「ええ、それあもう一切合切、何もかも、みんな抵當に入つてしまふですよ。」さう言つてコスタンジョーグはだんだんいきり立つて來た。「帽子工場だの、蠟燭工場だのをおつ立てからに——倫敦からわざわざ蠟燭職工を招いて、自分は一商賣人に成りさがつてしまふのです！地主ともある結構な身分の人間が、製作所の持主だの、工場の主人だのといふケチなものに化けてしまふのです！ 紡績機械なんてものを据ゑつけて……町の自墮落女や小娘のためにモスリンを織つてやるなんて……。」

「でも、義兄さんのところにだつて工場があるぢやありませんか。」と、プラトーフが横槍を入れた。

「だが、それを誰がこしらへたのです？ 自分勝手に出來あがつてしまつたんですよ。羊毛がたまつて、持つて行きどころもない——それで羅紗を織りはじめたんですがね、それがまた厚地の、粗末な羅紗なんです、値が安いので、市場へ出せばバタバタと捌けてしまひますけれど、もともとこれは百姓用なんですからね、うちの百姓用なんです。また漁業家連が、ずつとこの六年間といふもの、うちの川岸へ魚の鱗を山と捨てたものです——こいつはどうしたものかなと考へた擧句、私はそれを煮溶かして鯨膠をつくることにして、それで四萬留から儲けましたよ。まあ

私のところでは萬事がこんな具合なんです。」

（ちえつ、旨くやつてやがる！）とチチコフは、相手の顔を穴のあくほどじろじろ見つめながら心に思つた。（こいつは、まるで金子を掃きよせる筈みたいな男だぞ！）

「それにね、もう飢死をするばかりになつた労働者がわんさとやつて來ましたので、そんなことも始めたのです。何しろ、その年は飢饉でした、それといふのも、つまり、播種を怠つた工場主連の罪なんです。私の村には、かういつた風な工場が次々に殖えるのです。毎年々々新しい工場が出來て行きますが、それは、あれやこれやの残物や廢品がたまるからです。家政にほんのちよつと注意して御覽なさい——どんなくだらない廢物からでも収益があがりますよ。それこそ、もう澤山だ！ といつて御免を蒙りたくなる位ですよ。だつて、そのために、圓柱や破風のついた、どえらい大邸宅を構へる氣にもなりませんからね。」

「まさに驚嘆に値ひしますねえ……。何より驚くべきことは、どんなくだらない物でも収入になると仰つしやる一事です。」と、チチコフが言つた。

「ちつとも驚くことはありませんよ！ 物事をありのままに、單純に考へさへすればいいんです。それなのに、猫も杓子も一角の機械技師づらをしてからに、錢匣ひとつ開けるにも、簡單に手で開けようとはしないで、機械を使ひたがるつて譯でさあ。それがために、わざわざ英吉利くんだりまで出かけて行くんですがね、抑、これが間違ひで！ 愚の骨頂でさあ！」かう言つてコ

スタンジョーグロはベツと唾を吐いた。「しかも洋行から歸つて來ると、前より百倍も馬鹿になつてゐるんですからね！」

「まあ、コンスタンチン！ あなたは又そんなに昂奮なすつて、」と細君が心配さうに口を出した。「それがお軀からだに障るつてことを御存じのくせに。」

「だつて癩癩もおこらうぢやないか！ これが外國人のことでもあれば、別にかれこれいふがものはないけれど、あまりにも身近の出來事だから堪らないのさ。露西亞人氣質がだんだん腐敗してゆくといふことは忌々しいぢやありませんか。近ごろ露西亞人の性格にはドン・キホーテ式なところが現はれて來ましたが、かういふ傾向は前には決してありませんでしたよ！ 教育を受けて小賢しくなると、すぐにドン・キホーテに變つてしまひ、どんな阿房だつて考へつかないやうな、飛んでもない學校をおつ建てたりするのです！ そんな學校を出た人間が何の役に立つものですか——田舎にも向かねば都會にも向かず、ただ酔つ拂ふことと、恐ろしく氣位の高くなることぐらゐが關の山です。慈善事業をはじめれば、やはり慈善家のドン・キホーテになつてしまひ、何百萬といふ金子かねをかけて、不釣合きはまる病院だの、圓柱づきの養老院なんてものをおつ建ててからに、擧句の果てには破産して、家の子郎黨を路頭に迷はせるやうな羽目になるのです。いや、飛んでもない慈善事業ですよ！」

チチコフには教育のことなどはどうでもよかつた。彼はどんな廢物でも収益になるといふ話を

もつと詳しく訊きたかつたのであるが、コンスタンジョーグロはいつかな彼に口を挟ませなかつた。激越な言葉があとからあとから彼の口をついて飛び出して來て、どうしてもそれを止めることが出來なかつたのである。

「人々はどうかして百姓を教育しようなどと考へてゐるのですがね……それなら、まづ第一に百姓を富まして、立派な一家の主人にしてやることです、さうすれば放つておいても自然に賢くなりますよ。ところが、現今の情勢はどうでせう、社會一般が呆ばかけてしまつて、その愚劣さ加減といつたら、とても想像も及ばないくらいですよ！ また、近頃の三文文士の書くことはどうです！ 何かくだらない本が一冊でると、それつとばかりにどいつもこいつもがそれに喰ひついて行くのです……。そして何を言ひだすかと思へば、かうです。『どうも百姓は生活程度が甚だ低い。だからもう少し贅澤なことに親しませて、身分以上の慾望を起こさせる必要がある……。』ところが、そんなことを言つてゐる御本人はといへば、その贅澤のお蔭で、人間になるところか、檻かごになつてしまひ、得體の知れぬいろんな病氣を背負ひこんで、十八やそこいらの子供のくせに、もう一通り何もかも經驗してゐない者はない有様で、齒も抜けてしまへば、頭は藥鏝やうげんみたいていに禿はげげるといつた爲體——それを今度は、他人にまで傳染させようといふ魂膽こんたんなんです。ですが有難いことに我々の間には、さういふ無分別な奢りの風に染まな、健全な階級も、たつた一つではあるが残つてゐます！ このことは、ただもう神に感謝する外はありません。我々の間では

何といつても農夫がいちばん偉いんですからね。それをかれこれとお切匙をする必要はないぢやありませんか？ 願はくば、人々がみな農夫のやうにあらんことをです！」

「さうすると、あなたは農業といふものを利益の多い仕事だとお考へになつてゐるのですか？」とチチコフが訊ねた。

「別に利益が多いといふ譯ぢやありませんが、何より正常な仕事です。額に汗して土を耕やせといふぢやありませんか。農業を天職とする人間が、最も道徳的で、潔白で、高尚で、氣高いといふことは、幾世紀もの経験によつて、すでに證明済みですからね。別に、他の職業がいけないといふ譯ではありません。けれど、どこまでも農業が根本にならなければならぬ——それだけなんです！ 工場なんてものは獨りてに出来てきます、しかも合理的な工場がですよ——それは現在その場で手近かに人間に必要なものを造る工場で、いろんな慾望ばかり起こさせて現代人を懦弱にするやうな工場ではありません。維持のためやら、製品の販路をひろげるために、後にはありとあらゆる卑劣な手段に訴へて、哀れな國民を墮落させたり腐敗させたりするやうな工場であつてはなりません。私はどんなに人にすすめられても、さういふ贅澤な要求をそそのる生産には決して手を出しません、たとへ百萬の利益をみすみす失つても、煙草だの砂糖だのといふものの工場は建てませんよ。世間が墮落するならするもよいが、それは斷じて私のせむぢやありませんからね！ 私はどこまでも神の前に正しいものでありたいのです……。私は二十年間、人民と共

に暮らして来て、さういふことの結果がどうなるかは、ちやんと分つてゐます。」

「手前が何より心を打たれましたのは、拔目なく立ちまはりさへすれば、廢品や殘物も決して無駄にはならず、どんなつまらないものからでも収益をあげることが出来るかと仰つしやつた、あなたのお言葉でございますよ。」

「ふん！ 經濟學だなんて！」とコスタンジョーダロは、相手のいふことなどには耳も貸さず、いやみたつぷりな皮肉の色を顔に浮かべながら、しやべりつづけた。「經濟學がきいて呆れる！ 馬鹿が馬鹿の背にまたがつて、馬鹿の尻をひつばたいてゐる始末で——自分の馬鹿面の鼻の先きも見えやしないのだ！ さういふ阿房のくせに、のこのこと教壇の上へまでのさばり出をるのさ、眼鏡まで掛けて……。馬鹿々々しいつたらない！」そして彼は苛立たしさうに唾を吐いた。

「ええ、さうですわ、何もかも仰つしやる通りですわ。でも、お願ひですから、そんなに御昂奮なさらないでね。」と、細君が口を挟んだ。「その話になると、いつもあなたは赫つとおなりなさるんですもの！」

「手前の尊敬してやまぬコンスタンチン・フォードロギッチ、かうして、段々とお説を拜聴いたしてをりますと、いはば、その、生活の意義といふものがよく分り、ひとりでに事物の核心に觸れるやうな氣がいたしますよ。ですけれど、さういふ全般的な問題は別としまして、一つ、問題を個人的な方面へ移させて頂きますがね。假りに手前が一個の地主となつた曉にですなえ、ま

どこまでも辯解して、『それあ、成程おれはすつ、からかんに身代をすつてしまつたさ。それもみんな、生活程度がぐつと高かつたのと、いろんな工業家を（これが取りも直さず詐欺師なんですかね）引きたててやつたお蔭なんだ。それあ、あのコスタンジョーグロみたいに、豚と同じ生活で我慢すれば、別に問題はないんだがね』と、かうなんですよ。」

「手前も、かういふ豚になら一つなつて見たいものでございますよ。」と、チチコフが言つた。「沙汰の限りです。一體どれだけ生活の程度が高いといふのです？ 出鱈目をいふにも程がある！ なるほど書物などを買ふには買ひますが、そんなものは一つも讀んでやしないのです。結局、骨牌をいぢる位が落ちで……。これもみんな、私があの中を招待して御馳走をしないのと奴らに金子を貸さないからなんです。私が食事に招待しないのは、第一それが面倒くさいからなんです。どうもさういふことには不慣れでしてね。で、宅へ遊びに来て、ただ有合はせの食事でご我慢してさへ貰へれば、いつでも喜んで迎へますよ。私が金子を融通しないなんて、それも出鱈目です。ほんとに退引ならぬ入用に迫られてゐる人があつたら、私のところへ来て、詳しくその金子の使ひ途を話してくれたらいいのです。それで、もし相手の言葉から、成程それは筋のつた使ひ途で、確かにその金子で相手を更生させることが出来ることさへ納得が行けば、私は喜んで用立てもしますよ、なんの、利息一文もはうとは思ひませんよ。」

（こいつは一つ憶えておく必要があるぞ）とチチコフは思つた。

「ええ、滅多に斷わるやうなことはしませんよ。」と、コスタンジョーグロは言葉をつづけた。「しかし、むやみに金子をばら撒くやうな眞似はいたしません。それだけは御免を蒙りますよ！ 忌々しいつたらありませんからね！ どうかすると、情婦のためにくだらない晩餐會を開いたり、いろんな家具を注文して、正氣の沙汰とも思へないほど家を飾りたてたり、阿婆擦れ女をつれて假裝舞踏會へ出かけたたり、あたらしい一生をのんびんだらりと暮らしたことも記念するやうな、いかげしい祝賀會を催したりするのですからね、こんな手合ひに金子を貸すのは、愚の骨頂ですよ！……」

かう言つて、コスタンジョーグロはベツと唾を吐き、危く細君のゐる前をも構はず、一言二言いかげしい毒舌や悪口雜言を口にするところであつた。陰鬱なヒポコンデリの暗翳が、不氣味に彼の顔を曇らせた。その額には縦横に深い皺が刻まれて、昂ぶつた瘤の蟲がじりじりと蠢動してゐることを證據だてた。

「時に、また先きほど伺ひかけた話に戻らせて頂きますが、」とチチコフは、ほんたうに素晴らしい味の木苺酒をまた一杯ぐつと飲みほしながら、口を挟んだ。「かりに手前が、先刻あなたの仰つしやつて下さいました所領を手に入れたと假定いたしましたら、早いとこ、どれほどの年月で、その……一厘の金持になれるでございませうか？」

「あなたがそんな風に、」とコスタンジョーグロは、さも心外らしく、ぶつきら棒に、嚴つい調

子で相手の言葉を遮つた。「早急に金持にならうなどとお思ひになるやうでは、決して金持にはなれませんよ。年月などは問題にせず、ゆつくり物持になるやうな心掛けでおいでになれば、案外はやく望みが達せられますけれど。」

「成程そんなものですかねえ！」とチチコフが口を挟んだ。

「さうですとも、」とコスタンジョーグロは、まるでチチコフに對してむかつ腹でも立ててゐるやうに、突慥に答へた。「何はさて、仕事に愛着を持たなきや駄目です。それがなくては何一つ成就するものではありません。まづ農業といふものに打ちこまなきや駄目ですよ——まつたく！ それに實際のところ、これは決して退屈な仕事ぢやありませんからね。田舎の生活は物憂いなどと勝手に決めこんでしまつてゐますがね……。たとへ一日でも、都會であの連中がやつてゐるやうに、馬鹿々々しい俱樂部だの、料理屋だの、劇場だの、暇をつぶさなきやならなかつたら、それこそ手持不沙汰のあまり私は死んでしまひますねえ。そろひもそろつて、馬鹿と、阿房と、き印ばかりですよ！ 農家の主人は退屈をしようにも、第一そんな暇がありませんからね。日々の生活が一寸のすきもなく、手一杯にふさがつてゐるのです。その仕事が多様で、しかもそれがどんな仕事でせう！——まさに精神を高揚する仕事なんです。それは兎に角、ここでは人間が天地の自然や四季の變遷と歩調を合はせ、造化によつて完成される諸々の現象の協力者となり相談相手となる譯です。試みに一年間の仕事をよく觀察して御覽なさい。まだ春が

來ぬ先きから、ちやんと用意を整へて待ち構へてゐるのです——種子の準備をしたり、納屋の穀類を選びわけたり、量つたり、乾かしたり、また農奴の組分けを新らしく定めたりもしなければなりません。何もかも前もつて検査をし、初めにちやんと計算しておかなければなりません。いよいよ氷がわれ、春の出水もひき、すべてが乾いて、土がふんはりと軟らかになりはじめると——菜園や果樹園へは鋤が入られ、野良では鋤や耙がせつせと働きたして、それから種蒔きやら植ゑつけです。一體これがどういふことだか、お分りになりますか？ つまらないどころか！ 來るべき收穫のための種蒔きなんです！ 全世界に繁榮を齎すべき種蒔きなんです！ 幾百萬の人々に糧をあてがふ種子が蒔かれるんですよ！ そろそろ夏になります……。さあ今度は草刈りで天手古舞です……。急に麥刈りが酣になります。ライ麥を刈取ると、次ぎは小麥の番、それから大麥、燕麥といふ順序です。いや、大變な騒ぎで、一分間だつてじつとしちやゐられません。たとへ眼が二十あつても、その一つ一つに仕事がある位ですよ。やつと刈上げがすむと、納屋へ取りこんだり、禾堆に積みあげたりしておいて、冬田の鋤き返したの、冬を迎へるための倉庫や納屋や家畜小屋の修繕が始まり、それと同時に女どもの仕事も始まります。そこで一應すべての總勘定をして、仕事の結果を見るのです——まつたくこれは……。ところで、いよいよ冬ですよ！ 納屋といふ納屋では麥打ちが始まり、打つて粒にした麥は納屋から倉庫へ移されます。水車場や、工場や、作事場を見まはつたり、百姓たちのところへも、奴らが何をやつてゐるかを檢分に行か

なければなりません。ええ、私はね、大工が自由自在に斧を操つてゐるやうなところへぶつかると、二時間ぐらゐその前に突つ立つて見惚れてゐますよ。つまり作業のはかどるのを見てゐるのが堪らなく愉快なんです。その上に、これが一體どういふ目的でなされてゐるかを知り、また自分のまはりに物がどしどしと増加して、絶えず実績と収入をあげてゆくのを眺めては、いやもう何といつていいのか、自分の氣持を表はすことが出来ませんねえ。さうかといつて、別に金子が殖えるからといふ譯ではありませんよ。金子はまた金子で別問題でしてね。ただ、かうした事業をみんな自分の手で切りまはしてゐるといふことが満足なんです。自分が何もかもの原因であり創造者であつて、まるで魔法使か何かのやうに、自分の手から萬物の上に豊穰と福祉を齎らしてゐるのだと思へばこそです。私にとつて、どこに一體これほど大きい歡びがありますか？」かう言つてユスタンジョーグロが顔をあげた時、額の皺は跡形もなく消えてゐた。彼はまるで嚴やかな即位の日の皇帝のやうに晴々としてをり、その顔からは後光がさしてゐるやうにさへ見えた。「まつたく、世界ぢゆう探しても、こんな歡びは他にありませんよ！ここに於いて人間は初めて神を真似ることが出来るのです。神は最も高尚な歡びとして自身にも創造の仕事を選ばれ、また人間にも、等しく創造者となつて、自分のまはりに繁榮を築くことを要求してをられるのです。それなのに、これを退屈な仕事だなどとは以つての外ぢやありませんか！……」

チチコフは、まるで極樂鳥の歌でも聞くやうに、主人の美妙的な言葉に聴き惚れてゐた。彼は口

にたまる唾液を嘔みこみ嘔みこみした。兩の眼までが潤ほひを帯びて甘美な表情に輝き、彼はなほいつまでも飽かずその話に耳を傾けようとした。

「ねえ、ユスタンチン！もうあちらへ参りませうよ。」さう言つて女主人がやをら椅子を離れた。一同は立ちあがつた。チチコフはすかさず肘を貸して、女主人を食堂から連れだしたが、もはやその物腰には先刻ほどのテキパキしたところがなかつた。彼の頭に本質的な轉換がはじまつてゐたからである。

「何といつたつて、退屈なものはやつぱり退屈ですよ。」と、一同の後にしたがひながらブラトーフが言つた。

（このお客は決して馬鹿ぢやないわい）と主人は心に思つた。（なかなか思慮にも富み、言ふことも眞面目で、輕薄なところが少しもない。）さう思ふとますます心が浮きたつて、彼はまるで自分で自分の話に昂奮してしまひ、自分の賢明な忠告をよく理解してくれる相手を見つけて得意になつてゐるやうであつた。

やがて一同が、露臺と庭園に面した硝子戸を背に、蠟燭に照らされた氣持のいい小部屋に陣取り、まどろむ庭木の梢からキラキラ光る星が彼等を眺めた時、チチコフは永いあひだ曾て覺えなかつた愉しい氣分をしみじみと身に感じた。それは恰かも長い漂泊の後、再び故郷の屋根の下へ迎へられ、もはや何一つ思ひ残すことなく、すべての望みを達して、『もう澤山だ！』とばかりに

旅の杖を投げだしたやうな感じであつた。客あしらのよい主人の、いかにも道理にかなつた話を聞いて、チチコフはそれほど恍惚となつてしまつたのである。人にはおのおのその人によつて或る種の言葉が他の如何なる言葉にもまして、しみじみと身につまされて感じられるものである。それでよく、人煙稀れなる、住む者もなき淋しい僻地で、ゆくりなくも人に逢ひ、その人から心のときめくやうな話を聞いて、つい我れを忘れ、旅路の難儀も、泊りの憂さも、騒々しい現世の不條理も、人を欺く不義不信の毘も、一切を忘れられてしまふことが間々あるもので。こんな風にして愉しく過ごした一夕は、生くる日の限り永久に生々として脳裡に彫みつけられ、同席したのは誰々で、どの席に誰が坐つて、何を手にしてゐたといふやうなことから、壁の様子や、隅々の調度のことなど、どんな些細なことに至るまで、まざまざとその記憶に残るのである。

同じくチチコフの脳裡にも、その夜のことが一つ残らず——簡素に裝飾された感じのいいその小部屋や、聰明な主人の顔にたたへられた濃厚な表情はもとより、壁紙の模様にといたるまで……それどころか、プラトリーノフにあてがはれた琥珀の吸口のついた大長煙管から、彼がいかついヤルプの鼻面へ吹きかけた煙草の煙や、ヤルプの苦しきやうな鼻息や、時々『もうお止しよ、そんなにいぢめないで』といひながら、ホホと笑ふ愛嬌のいい主婦の顔や、陽氣な蠟燭の灯や、どこかの隅で鳴く蟋蟀や、硝子の扉、木々の梢に響いて一同を眺めてゐる春の夜、空は限なく星に點綴され、高らかに青葉の茂みの奥で唄ふ小夜鳴鳥の聲にかまびすしく響する春の夜が、いつまでも

刻みつけられたのである。

「私の尊敬するコンスタンチン・フォードロギッチ、あなたのお話を伺つてゐると實にいい氣持です！」と、チチコフが言つた。「露西亞ぢゆうを探しても、恐らくあなたほどの頭腦の方はございませんなあ！」

コスタンジョーグロはにやりと北叟笑んだ。彼にもその言葉がまんざらの外づれではないやうに思はれたのである。「いや、そんなことはありませんよ。智者といへば、實際この地方に一人ありましてね、その人に比べたら私などはまったく足許へも寄せませんよ。」

「それはまた一體どなたでございますか？」と、吃驚したやうにチチコフは訊ねた。

「この地方の徴税代辦人の、ムラーゾフといふ人物です。」

「ああ、その人のことならもう二度も聞きますよ！」と、チチコフは聲を高めて言つた。

「あれは單なる一所領の持主といふより、立派に帝國の財政を司る器ですよ。私かもし一國の支配者なら、すぐにもあの人を大藏大臣にしますねえ。」

「なんでも、普通の尺度ではちよつと測り難い人物ださうで、財産も千萬留からあるといふぢやありませんか。」

「千萬どころか！ 四千萬以上は蓄めてゐますよ。今に露西亞の半分は、あの人の手に戻してしまひますよ。」

「まさか、何を仰つしやるのです！」チチコフはさう口走ると、眼を剝いて口をあぐり開けた。

「いや、確かにさうですよ。分りきつたことぢやありませんか。それあ三十萬や五十萬の金持なら、さう急に大きくもなりませんかね、何百萬何千萬といふ長者になると、どだい桁からして違ひますからね。何をやつても、ひとりで二倍三倍となつて向ふから轉がりこんでくるのです。第一活動の分野が廣く、することなすことがおそろしく大規模ですからね。競争をしようにも相手がありませんや。てんで太刀打になりませんか。何にどんな値をつけようと、それがそのまま通り相場になつて、もう誰にも動かせつこないんですからね。」

「いやはや、どうも驚きましたねえ！」さう言ひながらチチコフは十字を切つた。彼はまじまじとコスタンジョーグロの顔を見つめたが、一瞬のあひだ胸のつまる思ひであつた。「頭ではちよつと考へられない話ですなえ！ まつたく怖ろしくて氣が遠くなりさうですよ！ 一匹の甲蟲を眺めても、神慮の賢しさにはつくづく驚嘆されますが、それにもまして手前の驚きますのは、そのやうな莫大もない大金が一人の人間の所有に歸し得るといふ事實でございます。つかぬことをお訊ねしますが、何でせうか、それだけの大金持になりますには、いづれ最初は、不正な手も少しは用ひたのでございませうね？」

「ところが、少しも非の打ちどころのない方法と、極めて公明正大な手段によつてですからね

え。」

「どうも信じられません！ あり得ないことです！ 千や萬の金子なら兎も角、何百萬何千萬

といふ金高を……。」

「そりや反對ですよ。千や萬の金子はなかなか正當な方法では儲けられませんが、何百萬といふ大金になると、却つて雑作なく儲けられるのです。百萬長者は何も曲つたことはしなくてもいいのです。正當な道を大手を振つて進みながら、眼の前にあるものを片つ端から取りこんで行けばいいのです。他に手出しをする者がありませんからね。蠶蠶に斧で、張りあふ競争相手がないのです。まるで桁が違ひますからねえ、何をやつても、元手の二倍にも三倍にもなつて向ふから轉がりこんでくるといふ譯です……。千や萬の元手ではどうです？——せいぜい一割か二割の儲けにしかならないでせう。」

「何より不思議なことは、それを殆んど文無しから築きあげたといふぢやありませんか！」

「それでなくつちやあ成功はしませんよ。これがそもそもその金科玉條なんです。」とコスタンジョーグロが言つた。「五萬や十萬の資産家に生まれて、それに相應した教育をうけてそだつた人間は、まづ金儲けには向きませんなあ。さういふ手合ひは初めから放埒三昧に流れて、いろんなくだらないことばかりやらかしますからね！ 物事といふものはなまじ中途半端からではなく、そもそも土臺から始めなければ駄目ですよ——一留からではなく、一哥から始めるのです、

上からではなく、どん底から出發するのですよ。さうしてこそ庶民階級とその生活状態が一から十までのみこめて、他日そこから轉身解脱することも出来るといふものです。身を以つてあらゆる困苦を忍び、一哥を笑ふ者は一哥に泣くといふ諺を理解し、ありとあらゆる浮世の辛酸を舐めつくしてこそ、初めて經驗もつみ、智慧分別もついて、もうどんな事業を企てようが、決してヘマを見たり、失敗つたりすることがなくなるのです。これはまつたく眞理なんです。そもそもその土臺から始めることです、中途からでは駄目ですよ。『十萬留貸して貰へば、すぐ大金持になつて見せる』などと言ふ人間があつても、私は信用しませんねえ。さういふ連中は山を張るだけで、決して確實な投資をしませんからね。まづ一哥から始める人でなきや駄目ですよ。』

「それなら手前も金持になれる譯ですわねえ。」とチチコフは、思はず死んだ農奴のことを心に浮かべながら、言つた。「まつたくの文無しから始めるのですから。」

「ねえ、あなた、パーウエル・イワーノギッチはお疲れでせうから、もう寝んで頂いたら？」と女主人が口を挟んだ。「いつまでもお喋りばかりしていらつしやらないで。」

「それあ、間違ひなく金持になれますよ。」とコスタンジョーグロは、細君の言ふことなどには耳も聞かず、相槌を打つた。「あなたの懐ろへはどしどし黄金の川が流れこみますよ。しまひには、それこそ収入の始末にもお困りになる位ですよ。」

パーウエル・イワーノギッチはまるで妖術にでもかかつたやうに、いよいよ募る夢想のなかで

幻想の黄金の山に坐つてゐた。彼の想念はぐるぐると旋廻した。奔放な空想は未來の収益を夢見て、金色の絨毯の上にさまざまの黄金の模様を描きだした。彼の耳には、『どしどしと黄金の川が流れこむ……』といふ言葉がいつまでもこびりついて離れなかつた。

「さあ、あなた、もう本當にパーウエル・イワーノギッチにも寝んで頂かなくては。」

「まあ、いいぢやないかお前！ 眠たいのなら、さつさと行つて寝みなさい。」さうは言つたものの、主人は茲でふと口を噤んだ。それといふのもプラトノフの鼾聲が轟々と部屋の空気をふるはせてをり、その合手に、ヤルブまでが負けず劣らず、グーグー大鼾をかいてゐたからである。成程これはもう就寢の時間だと気がついたので、彼はプラトノフの肩をゆすぶつて、『さあ、鼾はもう澤山だよ！』と言つてから、ではお寝み下さいとチチコフに挨拶した。一同はめいめいの部屋へ引きあげると、やがてそれぞれの寢床でぐつすり寝こんでしまつた。

が、チチコフだけはなかなか眠られなかつた。いろいろの思ひに眼が冴えてしまつたのである。彼は、決して架空的でない本當の所領の持主になるには一體どうしたらよからうと、とつおいつ思案に耽つてゐたのである。いろいろ主人と話しあつてからは、何もかもが大變はつきりして來た！ 自分も相當の金持になれるといふ可能性がいよいよ濃厚になつたやうに思はれる！ 經營上の難かしい問題も今はもう何でもない分けきつたことのやうに思はれ、自分の性にもびつたり合つてゐるやうな氣がするのである！ ただ例の死人どもを滞りなく抵當に入れて、夢でも幻し

でもない。歴乎とした所領を手に入れるだけのことだ！ 彼はもう實際に自分が、コスタンジョーグロに教へられたとほり——てきばきと、しかも慎重に、古い仕方を徹底的に研究するまでは決して新しい方法に手を出さず、萬事を自分の眼で見張り、一人々々の百姓をよく知つて、何によらず贅澤はふつつり断ち、ひたすら勤勞と經營に没頭して、采配を振りながら活動してゐる有様をまざまざと眼前に思ひ浮かべるのであつた。彼はもう、きちんと秩序もとのつて、經營といふ機構の發條が互ひに相勵ましあひながら活潑に働き出した時に感ずる筈の快感を、今から前以つて味つてみるのであつた。仕事はどしどしと進行する——圓滑に廻轉する水車場で刻々に麥が挽かれて、きれいな粉になつて出て来るやうに、いろんな廢物やがらくたが立派な現金に變つて續々として出て来る。驚嘆すべきこの家の主人も絶えず彼の眼前に立ちだかつてゐた。これこそ彼が全露西亞に於いて個人的に尊敬の念を抱いた最初の人物であつた。これまでとて、彼が人を尊敬したことはあつても、それは相手の立派な身分なり莫大な財産に對してであつて、つひそ相手の智能だけに對して敬意を感じたことは一度もなかつた。コスタンジョーグロこそその最初の人であつた。どんな手を用ひても、この男だけにはたうてい太刀打が出来ないと彼は思つた。で、別な計畫が彼の心を領してゐた——それはフロブーエフの所領を買取ることであつた。一萬留だけは彼の懐ろにあつた。また一萬五千留はコスタンジョーグロに借用を申込んでみる下心であつた。既に相手から、手固く金持にならうといふ人間には決して助力を吝まないといふ言質を

取つてゐたからである。後の不足分は、抵當に入れるなり、單に残金を待たせるなりすれば、何とかなるだらう。なあに、お望みなら裁判沙汰にでも何にでもして頂きませう！ と、尻をまくることだつて出来る譯だ。こんな風に彼は長いこと考へてゐた。それでもやつと、もうまる四時間この一家を謂ゆるその懐ろに抱きすくめてゐた睡魔がチチコフをも抱擁してしまつた。彼はぐつぐつと眠りに落ちた。

第四章

翌日、何もかもが頗る上乘の首尾で纏まつた。コスタンジョーグロはただ書附を一本とつただけで、利息はもとより、保証人ひとり要らないといつて、喜んで一萬留の金子を融通してくれた。この通り彼は、手固く財産を拵らへようとする人には、誰にでも援助の手を差し伸べたのである。そればかりか、共にくだんの所領を檢分するために、チチコフを同伴して、わざわざフロブリーエフのところへ出かけることにした。チチコフはすつかり上機嫌になつてゐた。朝飯を鱈腹つめ込んでから一行三人は、パーウエル・イワーノギッチの輕馬車に乗つて出發した。主人の輕走馬車は空のまま後からついて行つた。ヤルプは道においてゐる鳥を追ひ散らしながら、先頭に立つて走つた。沿道、たつぷり十五露里にわたつて、コスタンジョーグロの所有する森や耕地がずつと兩側につづいてゐた。それが跡切れると同時に、すべての様子ががらりと變つて穀類の出來も貧弱なら、森も無闇に切株だらけになつてゐた。その村はたいへん美しい地形を占めてゐる癖にひどく荒廢してゐることが遠目にもそれと分つた。まだ人の住んでゐない新築の石造家屋が未完成のまま……、まづ第一に眼につき、その後ろに住居らしい邸があつた。一行が訪れると、主人はたつたいま眼を覺したやうに、頭髮も梳らず、寢ぼけ眼で出て來た。年のころ四十そこそこの

男で、ネクタイの結び目は横つちよへひん曲り、フロックにも補布があたつてをれば、長靴にも孔があいてゐた。

彼はどういふものか客の來たことを、無性に喜んだ。それはまるで、永年のあひだ別れてゐた兄弟にでも會つたやうな喜びかたであつた。

「おや、コスタンチン・フォードロギッチ！ プラトン・ミハイロギッチ！ これはこれは、ようこそ！ 一つ、眼をよくこすつてお眼にかかりませう！ まつたくのところ、もう私のやうな者のところへは、誰一人やつて來てくれないと諦らめてゐたのですよ。みんながまるでベストのやうに私を避けるのです。つかまつたが最後、金子でもせびられると思つてゐるんですからね。いや、苦しいことは、まつたく苦しいですよ、コスタンチン・フォードロギッチ！ これもみんな身から出た錆です。今更どうも仕様がありませんや、豚には豚なりの生活が始まつたのですからね。どうか御免なさいよ、皆さん、かういふ大變な服装でお迎へしまして——この通り、長靴は孔だらけでしてね。時に、何を召上つて頂きますかしら？」

「どうかお構ひなく。けふは商用で伺つたのですからね。こちらはパーウエル・イワーノギッチ・チチコフさんと仰つしやつて、あなたの所領を買つてもいいといふ方なんです。」と、コスタンジョーグロが言つた。

「御懇意になることを心から嬉しく存じます。どうか一つお手を握らせて下さいまし。」

チチョコフは両手を前へ差出した。

「ではパーウエル・イワーノギッチ、問題の所領を一つ御覽ねがひませう、ちよつと囁目に値する村でして……。だが、皆さん、お晝食はもうお済みなんでせうか？」

「ええ、済みました、済みました。」と、逃げを張りながらコスタンジョーグロが答へた。「くづぐづしてゐないで、さつそく出かけませう。」

「さういふ譯でしたら、すぐお供いたしませう。」と、フロブーエフは縁無帽を手に取りながら言つた。「ぢやあ一つ、私のところの減茶とだらしなさ加減とを御覽に入れませうかな。」

客もそれぞれ縁無帽をかぶり、一同は打ちそろつて村の往還へ出て行つた。

道の兩側には、小さな窓まで脚絆のやうなもので塞いでしまつた、まるで盲らのやうな陋屋が立ち竝んでゐた。

「ぢやあ、私のところの減茶とだらしなさ加減を一つお眼にかけませう。」と、フロブーエフは語を繼いだ。「第一、食事を済ましてからおいで下すつて何よりでしたよ。實際、宅にはもう鶏一羽ゐないんですからね、コンスタンチン・フォードロギッチ——それほど切羽つまつた境遇なんでしょう。」

彼はさう言つて溜息を一つ吐いたが、コンスタンチン・フォードロギッチからは大して同情されさうもないと感じたらしく、プラトノフの手を抱へて、それをしつかり自分の胸に押しつけ

ながら、一緒に先頭に立つて歩き出した。で、コスタンジョーグロとチチョコフは後になつて、やはり互ひに腕を組みながら、少し間隔をおいて随いて行つた。

「いや、辛いものですよ、プラトン・ミハイロギッチ、まつたく辛い！」と、フロブーエフはプラトノフに向つて語りつづけた。「どんなに辛いか、とてもあなた方には想像もつきませんまい！ 金子がないだの、麵麩がないだの、靴がないだのと、そんなことはもう、あなた方にはまるで唐人の寝言みたいに聞こえるでせう。それも年が若くて獨り身でさへあれば、平氣の平左なんですがね。いい加減に年はとり、おまけに女房と、子供の五人も抱へて、かういふ逆境に身を曝して御覽なさい——いやでも憂鬱になりますよ、まつたくくさくさしてしまひますよ……。」

「それで、村をお賣りになつたら、いくらか樂になれるとでも仰つしやるんですか？」

「なにが樂になれるもんですか！」と、手を横に振つてフロブーエフが答へた。「たいがいは借金の拂ひに消えてしまつて、手許には一千留も残るかどうか、怪しいものですよ。」

「では、この先き一體どうなさるんですか？」

「お先き眞暗といふ譯でさあ！」

「どうしてあなたは、さういふ境涯から切り抜ける算段をなさらないんです？」

「といつて、どんな算段をしたものですかね？」

「ぢやあ何か一つ、勤めにでもお就きになつたらいいでせう。」

「だつて私は、高が縣書記あがりですもの。一體どんな勤め口に有りつけるでせう？ どうせつまらない口にしか有りつけやしませんよ。幾らなんでも、まさか年五百留やそこいらで勤める譯には行きませんか。私には女房もあれば、五人も子供があるんですもの。」

「地所の管理でも引受けたらどうです？」

「誰が私に地所の管理など委せてくれるのですか？ 私は第一、自分の財産をすつてしまつたのですからね。」

「だつて、飢ゑと死に脅かされてるとしたら、何とかしなきゃならないでせう。誰かの傳手で、何か町で勤め口が得られないものか、一つ兄に訊いてみませう。」

「いや、プラトン・ミハイロギッチ、駄目ですよ。」とフロブーエフは溜息をついて、相手の手をぎゅつと握りしめながら言つた。「私はもう何の役にも立たない人間です。年よりも先きに老耄れてしまひましてね、若いころ道樂をした嗣で、腰はづきづき痛み、肩にはリウマチスがあるんです。私のやうな者が何の役に立つものですか！ 徒らに國庫の負擔を増すだけぢやありませんか？ それでなくてさへ慾得づくで、みんな少しでも割のいい勤め口を狙つてゐるんですからね。幾らなんでも、このうへ私が俸給を貰ふために、貧乏人の税金を増すやうなことは出来ませんよ！」

（これが放蕩の果てといふものか！）と、プラトローフは心に思つた。（これぢやあ、おれの

昏睡状態より劣りだ。）

かうして二人が話しあつてゐる間に、その後ろからチチコフと竝んで歩を進めながら、コスタソジョーグロがすつかり憤慨してしまつてゐた。

「そら、あれを御覽なさい。」とコスタソジョーグロは、一方を指さしながら言つた。「あの男は百姓をこんな惨めな有様にしてしまつたのです！ 荷馬車一臺なければ、馬一匹もないぢやありませんか。瘟疫でやられたといふなら、自分の財産など構つてゐるべきぢやありません。さつそく持物全部を賣拂つてでも、百姓に家畜を供給しなきゃ駄目ですよ。百姓をたとへ一日でも働けなくしておく法はありませんからね。しかし、もうかうなつては、二年や三年では元通りにすることは出来ませんよ。百姓にはすぐ怠け癖がつき、道樂の味を覚えて、立派な酒呑みになります。しまひますからね。たつた一年百姓に仕事をさせずにおいたら、永久に豪無しになつてしまひます——すぐに權をさげて放浪する癖が浸みこむのです……。おや、どうです、この土地は！ ね、この土地を御覽なさい！」と、百姓家のすぐ後ろに現はれた草地を指さしながら、彼は語りつづけた。「これはずつと、春水のつく沃土ですよ！ 私ならここで亜麻を培つて、それだけでも五千留は上げて見せますねえ。それから蕪を播いて四千留は取りますねえ。ちよつと向ふを御覽なさい、あの勾配にライ麥が生えてゐるでせう。あれはみんなひとりばえなんですよ。ちやんと私は知つてますが、あの男は麥なんか播きませんでしたからね。それからあの谷合ひに……私

が植林したら、それこそ鴉でも天邊までは飛んで行かれないやうな森にして見せますよ。こんな寶のやうな地所をむざむざ打つちやつておくなんて、まつたく何といふ料簡でせう！　ちやんとした開耕の道具がなければ、せめて鋤を振つて島にでもしたらいいぢやありませんか——野菜を作つたつて相當の収益があげられませぬ。自分から先きに立つて、細君にも、子供にも、下女下男にも鋤をにぎらせるのです。死んでも……、仕事の上で死ぬのなら本望でせう！　少なくとも、己れの本分を盡して死ぬのですからねえ、まるで豚のやうに、只がつがつと徒衣徒食して死ぬのとは譯が違ひますよ！」かう言つてコスタンジョーグロはベツと唾を吐いたが、いよいよ募る癩癩にその顔は陰鬱な雲に翳された。

彼等が互ひに間近く接近して、アカシヤの生茂つた崖の上に立つた時、遙か彼方に河のうねりと黒い岸壁とがバツと照り映えて、パノラマのやうな遠景の中に、森に隠れたベトリッシチエフ將軍の邸の一部が近々と望まれ、その後ろには森と、巻毛のやうに樹木の生茂つた山が、仄青く遠霞にかすんでゐた——それを見て咄嗟にチチコフは、その邊がテンチェートニョフの村に違ひないと思つた。で、彼は、『ここいらに森をつくりましたら、さぞ村の風景が素晴らしくなることだせうね……』と言つた。

「ぢやあ、あなたは風景の愛好者なんですか！」とコスタンジョーグロは、不意に厳しい眼差でじろりと相手を眺めながら遮つた。「お氣をつけなさいよ、風景などに凝つてゐたら、とどの

つまりは、日々の麵麩にもことを缺いて、それこそ風景どころではなくなりますからね。収益が第一で、景色などは二の次ぎですよ。美觀といふものは自然に具はつてくるものです。早い話が都市を御覽なさい——今日のところ最も立派で美しい都市といへば、みんな獨りでに出來たものですよ、人間がその必要と自分々々の流儀に従つて勝手に建てた都市なんです。一定の型になどあてはめて建てたものは、兵營かバラックに過ぎませぬからね……。美觀なんてものは問題ぢやありませんよ！　實用といふことが何より肝腎です……。」

「でも、じつと長いあひだ待つてゐるのは、いささか悲哀ですわね。私は出來るだけ早く何もかも思ひどほりにしたいと思ひますので……。」

「何です、二十五か六の青年みたいなことを？……彼得堡の役人ぢやあるまいし……忍耐ですよ！　まづ六年間せつせと働くことです——一分も休まないで、種子を蒔いたり、苗を植ゑつけたり、土を耕やすのです。それあ、並大抵の苦勞ではありませんよ。その代り、一旦うまく土地を手なづけてしまへば、今度は土地の方であなたを助けてくれるやうになりますよ、それは決してそんなじよそこいらの……とは違つて、さうですわねえ、あなたの手許に七十人の人手があるとなれば、その七十人の外に、眼に見えぬ七百人の人手が働きますよ。何でも十倍に殖えるんです！　私は今、指一本うごかさなけれど、何もかも、ちやんと獨りでに出來あがつて行きますよ。ええ、さうです、自然は忍耐を愛しますからね。これは辛抱つよい者を嘉し給ふ神自からの

定め給うた法則なんですよ。」

「あなたのお話を伺つてみますと、何だか力が溢れ出るやうな心地がいたします。ぐんぐんと精気が湧きあがりますよ。」

「はい、あの土地の耕やし方は何です！」とコスタンジョーグロは、さもさも慨歎に堪へぬといつた調子で、一方の傾斜地を指さしながら、言つた。「私はこんなところに、もうこれ以上おつきあひしてゐるのは御免です。こんな不檢束とやりつばなしな有様を見せつけられては、實際死ぬよりも辛いですよ。もう私がゐなくても話はつくでせう。手つとり早くあの馬鹿者の手からこの寶物を取りあげて下さい。あの男は徒らに神の賜物を汚辱してゐるばかりなんですからね。」かう言ふと、すつかり機嫌を損ねて憂鬱になつたコスタンジョーグロは、チチコフに別れを告げ、それから主人に追ひついて、同じく別れを告げにかかつた。

「これは又どうしたといふんです、コスタンチン・フォードロギッチ？」と、主人は面喰らつて、「たつた今いらつしたばかりで——もうお歸りになるなんて！」

「仕方がありません。どうしても家にゐなきやならん用事があるものですからね。」と、コスタンジョーグロは言つた。そして挨拶もそこそこに、自分の輕走馬車プロヴォルトに乗りこむなり、さつさと歸つてしまつた。

どうやらフロブーエフにも、コスタンジョーグロがそんなにして立去つた理由は讀めたらしい。

「コスタンチン・フォードロギッチは、我慢が出来なかつたのですねえ。」と、彼は言つた。「あの人のやうな經營者が、こんななげやりな爲體ていだいを見ちや、あんまり好い氣持はしないでせうからね。今年なんか、まつたくのところ、私は麥も蒔かなかつたんですよ、パーウェル・イワーノギッチ。眞正銘の話なんです！ 耕作をしようにも道具のないことは言はずもがな、第一に種麥からしてなかつたやうな始末でしてね。プラトシ・ミハイロギッチ、あんたの義兄ていけいさんは素晴らしい經營者だつていふ話ですがね、それあコスタンチン・フォードロギッチに就いてはかれこれ言ふがもありませんさ！ あれはその道にかけてのナポレオンですからね。まつたく、時々考へることですが、どうして、たつた一人の頭に、ああ澤山の智慧が與へられたのでせうねえ？ この愚かな私の頭にも、せめてあの百分の一でも智慧が宿つてゐたらと思ひますよ。どうか皆さん、この橋は氣をつけて渡つて下さいよ、水溜りの中へおつこちないやうに。もうこの春から板を取りかへるやうに呟附けてあるんですがね……。私が何より不憫に思ふのは、可哀さうな百姓どものことです。百姓にはまづ模範を示さなければなりません、この私が果してどんな模範になりませう？ さあ、どうなさいますかね？ パーウェル・イワーノギッチ、どうか一つ奴らの面倒を見てやつて下さい。この通り自分自身がだらしな癖に、どうして奴らに秩序を教へることが出来ませう？ 私はずつと前から、いつそ奴らを自由な身の上にしてやらうかと考へてゐたのですが、さて、さうしてやつたところで、何の役にも立ちませんからねえ。それ

よりも先づ第一に、彼等を生きて行けるだけの身の上にしてやるのが大事だと思ひます。それにはどうしても、厳正公平な人物が氣長に彼等と共に住んで、身を以つて撓みなき活動の範を示さなければ……。私自身がさうなんですがね、露助といふ奴はどうしても尻をつつく者がないと駄目で、それがないと、つい醉生夢死に終つてしまふのです。」

「變ですなえ、」とプラトノフが言つた。「どうして露西亞人つて奴はかう醉生夢死には、誂へ向きで、下賤な連中に至つては、ちよつと眼をはなすとすぐ飲んだくれたり、破落戸になつたりするんでせうねえ？」

「それは教育の不足から來てゐるんでせうよ。」と、チチコフが嘴を入れた。

「いや、何が何だか分るもんですか。だつて、我々は教育も受ければ、大學の講義も聴きましたけれど、果して何の役に立ちますね？　いつたい私は何を習得したといふのでせう？　生活の規矩準繩を習得しなかつたといふだけならまだしも、いろんな目新しい華美や悦樂のために金子をどしどし浪費することを覚えこみ、無闇に金子のかかることばかり馴染になつて來たのですからね。畢竟これも學問に眞面目に身を入れなかつたせゐでせうか？　——いや、ほかの仲間だつてみんな同んなじことなんですからね。それあ、中に二人や三人は、學問から眞の裨益を享けた者もありませうがね、それは恐らく學問なんかしなくても、もともと頭のいい人間だつたからなんで、その他の連中ときては、只管、健康を害ふことと、人から金子を捲きあげることばか

り狙つてゐるんですよ。實際の話なんですがね！　つくづく考へて見るに、どうかすると露西亞人といふ奴は救ひやうのない人間みたいに思はれてくるのです。あれもしたいこれもしたいと思ふだけで、何一つ出來つこないのです。始終、あすからは新らしい生活を始めよう、あすからは食養生もしようと思へるのですが、結局なになつしやしないのです。もうその晩には矢鱈に食ひ過ぎた擧句、目ばかりバチクリさせるだけで、舌の根ひとつ動かすことも出來ず、まるで梟のやうに、ただじつと坐つたまま、人の顔ばかりキョロキョロ眺めてゐるのです——まつたくですよ！　誰もかもが皆さうなんです。」

「さうですなえ、」と、チチコフがにやにや笑ひながら口を挟んだ。「それもよくある圖ですなえ。」

「そもそも生まれつき我々は、全然思慮分別にむかない人間なんです。私は露西亞人の中にただの一人でも、これまでに思慮分別を具へた人間があつたとは信じられませぬ。たとへ、誰か或る人が申し分のない生活を営みながら、こつこつと金子を貯めてゐるのを目のあたり見たとしても、私にはその男が思慮分別をそなへてゐるとは信じられませぬ。いかげん年をとると魔がさして末には何もかも一遍になくしてしまふのですからね。しかも、教育があらうがなからうが、誰もかも皆さうなんですよ、まつたく。いや、私には、何かもつと別なものが缺けてゐるんですがね、さてそれが何であるか、私自身にも分らないんですよ。」

歸り途の光景もやはり同じであつた。ごたごたしただらしないさが到るところに不態な外觀をさらけ出してゐた。ただ一つ變つてゐたのは、往還の眞中に新らしく水溜りが出来てゐたことだけであつた。百姓のもの旦那のもの別なく、何もかもが投げやりで、醜態の限りをつくしてゐた。脂じみたズックの着物をきた百姓女が、何かに腹を立てて、頑是ない小娘を死ぬほど投擲しながら、誰か第三者のことを糞味噌に罵つてゐた。その少し先きに二人の百姓が我れ關せず焉といつた顔附で、猛り狂ふ酔つ拂ひ女を冷淡に眺めてゐた。その一人は腰の袋をボリボリ掻いてをり、もう一人の方は欠伸をしてゐた。欠伸をしてゐるのは百姓ばかりでなく、建物も欠伸をしてをれば、屋根も大口をあいてゐた。さうしたものを眺めながらブラトリーノフも欠伸をした。何もかもがつぎはぎだらけだ。或る百姓小屋の上には、屋根の代りに門がそつくりそのまま載つてあり、崩れて傾いた窓には、お邸の納屋から引きずつて來た丸太ん棒で突支がしてある。明らかに此處の經營法は、袖口や裾を切取つて肘に補布をあてるといふ、トゥリーシカの百姓外套の繕ひ方がそのまま採用されてゐた譯である。

「どうも御經營状態があまり香ばしくないやうですねえ。」と、視察を了へて一先づ邸へ戻つた時、チチコフが言つた。家の中へ入ると、赤貧洗ふが如き中にいろんなげばけしい小物が空しく榮華を物語つてゐる有様に客は二度びつくりした。インクスタンドの上置にはシェークスピアの胸像がついてゐるし、專子には象牙細工の洒落た背掻きが載せてある。女主人はなかなか粹

な流行の衣裳をつけてゐて、市の噂や、そこで興行された芝居の話などをした。子供たちもみな快活で巫山戯やぞろひだ。男の子にも女の子にも、非常に可愛らしく垢抜けのした、素晴らしい服裝がさせてあつた。しかし彼等が、色模様のベチコートなり質素なルバーシカでも着て、自由に庭を駆けまはつて少しも百姓の腕白と變りがなかつたなら、その方がどんなによかつたかもしれない。そのうちに女主人のところへ女の客が一人やつて來たが、いやにベラベラとくだらないことばかりよく喋る女だつた。婦人連は自分たちだけの部屋へ遠慮し、子供たちもその後を追つて駆けて行つた。男たちだけが後に残つた。

「で、あなたのお望みの値段は幾らなんでせうか？」と、チチコフが言つた。「正直なところ、ぎりぎり結着の値段を伺ひたいのです。どうも御領地が、思つたよりは遙かに香ばしくない様子ですからね。」

「いやもう、香ばしくないどころの話ではありませんよ、パーウェル・イワーノギッチ。」とフロブーエフが答へた。「まだそれだけぢやありませんよ。ざつとばらんに申しあげますと、戸口調査簿に載つてゐる百人の農奴のうち生きてゐるのは五十人きりなんです。こちらにひどく虎列刺が流行つたお蔭でしてね。そのほか旅券も持たずに逐電した奴もかなりありますから、それも死んだものと見做して頂かなきやなりませんよ。そんなものを裁判にかけて取戻さうとでもしたら、それこそ、こんな所領は元も子も裁判費用にけしとんでしまひますからね。そんな譯です

から、みんなで三萬五千留より餘計にいたただかうとは思ひませんよ。」
チチコフはいふまでもなく駈引をやりだした。

「飛んでもない、三萬五千留ですつて？ まさか、こんな所領に三萬五千留なんて出せるもんですか！ まあ、二萬五千留といふことにしておいて頂くんですねえ。」

それを聞くとプラトノフは氣恥かしくなつた。「まあ、その値でお買ひなさいよ、パーウェル・イワーノギッチ」と彼は口添をした。「この所領はそれだけの値段ならいつでも賣れますよ。もし三萬五千留お出しになれないやうなら、私が兄と共同で買つてしまひますよ。」

「ぢやあ構ひませんよ、その値で手打ちにいたしませう。」と、チチコフはびつくりして言つた。「それはさうとしまして、ただ半金だけ一年御猶豫ねがふことにしませうね。」

「いや、それは困りますよ、パーウェル・イワーノギッチ！ 斷じてそんな譯には参りませんよ。では半金だけこの場で頂いて、残りは二週間後といふことにいたしませう。その位の金額は抵當銀行でも貸してくれるのですがね、ただ困つたことに、その……。」

「さあ、どうしたものでせうねえ、ほんとに？ 弱りましたなあ」と、チチコフは言つた。「いま私の懐ろには、天にも晴れにも一萬留しきやないんですよ。」チチコフはさう言つた、さうは言つたが、それは嘘であつた。彼の懐ろにはコスタンジョーグロから借りた分まで入れると全部で二萬留はあつたのだ。が、そんなに澤山の金子を一時に出してしまふのが何だか惜しかつたの

である。

「いや、それは困りますよ、パーウェル・イワーノギッチ！ 是非とも一萬五千留は入用なんですから。」

「ぢやあ、私が五千留だけ御用だていたしませう。」と、プラトノフが横から口を入れた。

「いや、それはどうも！」とチチコフは言つたが、吐の中では、(この先生までがおれに金子を貸してくれるとは、ほんとに願つたり叶つたりだ)と思つた。そこで輕馬車から例の手箱を取寄せ、早速その中から一萬留の紙幣束を出してフロブリエフの手に渡した。あとの五千留は翌の日とどけると約束した。つまり、さう約束はしたものの、せいせい三千留も届けて、あとはまた二三日たつてからにするか、出来ればもう幾日か日限を伸ばしてやらうといふ肚であつた。どういふものかパーウェル・イワーノギッチは金子を手離すことが特に嫌ひだつた。どうしても手離さなければならぬ場合でも、金子を渡すのは今日よりも明日にした方がいいやうに思はれるのであつた。つまり、我々凡夫と同じやうに振舞つてゐた譯である。我々にしてからが借金取りを手玉にするのはいい氣持で、ずるぶんお百度も踏ませてやるものだ！ なあに、少しくらゐ待たれないことがあるものか！ 奴らの時間が貴重だらうが、そのために奴らが損失を蒙らうが、そんなことはこちとらの知つたことではない！ ねえ君、あす来てくれ給へ、けふはちよつと暇がないからねと、然るべくあしらつておけばいい譯である。

「それで、今後あなたは何處にお住ひになるのですか？」と、プラトリーノフがフロブリーエフに訊ねた。「まだ他に持村でもおありなんですか？」

「ええ、市へ引越すより仕方がないんですよ。市にちよつとした家を持つてをりますので。まあ、どちらにしても同じことですが、これは自分のためといふよりは子供のために是非さうしなくつちやならないのです。子供に、神學や音楽や舞踏の教師をつけなきやなりませんからね。田舎ではどんなに金子をつんだつて碌な教師ひとり雇へませんからね。」

「ろくろく食ふ物もないくせに、子供には舞踏を教へなきやならないのか！」と、チチコフは思つた。

（呆れたものだ！とプラトリーノフも思つた。）

「なんにしても、話がまとまつたのですから、一つ祝杯をあげることにいたしませう。」と、フロブリーエフが言つた。「こら、キリユーシカ！ シャンパンを一本持つて来い。」

（食ふ物はなくても、シャンパンはあるんだな）とチチコフは思つた。

プラトリーノフにはどう考へていいのか見當もつかなかつた。

フロブリーエフは否應なしにシャンパンを買つてゐたのだ。彼が市へ使ひを寄つても、どうしやうがあらう？——店では現金でなくてはクロス一本、掛けでは賣つてくれないのだ。しかし酒はどうしても飲みたい。ところが、つい近ごろ彼得堡からやつて来た佛蘭西人の酒舗では誰にでも

掛けでどしどし賣つてゐる。仕方がないから、その店からシャンパンを取つてゐた。

そのシャンパンが持ちだされたのである。一同は三杯づつ乾杯すると、大分いい御機嫌になつた。フロブリーエフもすつかり寛ろいで、愛想もよくなれば、機智にも目覺めて、洒落や逸話を盛んに連發した。その口裏から察するに、この男はなかなか世間や人間のことをよく知つてゐる！ いろんな事物を見る眼も實に正確なら、ほんの僅かな言葉によつて近隣の地主の人物を實に的確巧妙に描き出して見せ、他人の缺點や誤謬を實にはつきりと見抜き、零落した領主連の経歴にも驚くほど詳しく——彼等が何故、どうして、どんな具合に破産したかといふ経緯をよく知つてゐて、こまごまとさういふ連中の性癖まで、實に奇抜に、面白をかしく物語つたので、聞いてゐた二人はその話にすつかり心を奪はれてしまつて、つい相手を極めて聰明な人物のやうに思ひこむところであつた。

「不思議ですなえ」とチチコフが言つた。「あなたほどの才幹がありながら、何らかの手段なり方策なりをお立てになることが出来ないとは！」

「方策なら、ないどころぢやありませんよ。」さう言つてフロブリーエフは、早速いろんな計畫を山のやうに並べた。その計畫がどれもこれも實に馬鹿げた奇妙奇天烈なものばかりで、世故に長けた人間の考へとはまるで似ても似つかなかつたので、聞手はただ肩をすぼめて、「いやはやー！ いくら世間を知つてゐたところで、その知識を活用する才がなければ、結局なんにもなら

「ないのだ！」と、呟やくより他なかつた。その計畫といふのはいづれも、不意にどこからか十萬なり二十萬なりの金子がころがりこんで来ることを先づ根本条件としてゐたのである。それだけの金子さへあれば、何もかもがちゃん軌道に乗り、家業も順調に運び、いろんな破綻もくひとめることが出来て、収入も四倍に殖えるし、負債も残らず償却できると思つてゐるのだつた。そして彼はこんな風にいつて言葉を結んだ。「だが、この私にどうしろと仰つしやるのです？　どこにも、この私に二十萬は愚か、十萬だつて貸してくれる慈善家はありませんか。きつと神様にそのお恩召がないのでせうよ。」

（知れたことさ）とチチコフは心に思つた。（神様がこんな阿房に二十萬も金子をくれて堪るものか！）

「ところが、私にも三百萬からの金持の伯母があるんですよ。」と、フロプーエフは言葉をつづけた。「いやに後生願ひの婆さんで、お寺や修道院へはよく寄附をしますが、身寄りの者を助ける段になるとおそろしく吝いのです。一見に値する舊弊な伯母でしてね。金絲雀だけでも四百羽から飼つてゐますし、狛もをれば、密食女もをり、今時ちよつとには見られないやうな召使もをりましてね、いちばん若い下男でも六十に近いんですが、それを伯母は、『こりや、若造！』などと呼んでますよ。お客がどうかして氣に入らない振舞でもすると、食事の席でも伯母はそのお客にだけ料理を配るなど呔咐けるんです——すると、ほんとにさうされるんですから堪りません

よ。伯母はさういふ女なんです！」

プラトノフが苦笑ひをした。

「その伯母さんは何と仰つしやつて、何處にお住ひなんですか？」さうチチコフが訊いた。

「やはり私どもと同じ市に住んでゐまして、アレクサンドラ・イワーノヴナ・ハナサーロワといふんです。」

「どうしてその伯母さんに頼んでみないのです？」と、プラトノフが他人ごとならず訊ねた。「伯母さんがお宅の家庭状態を知られたら、まさか援助を拒まれる譯はないでせう。」

「いや、ところが駄目なんです。伯母は至つて頑なな氣性でしてね。まつたくの没不曉婆なんですよ、プラトノフ・ミハイロギッチ！　それに、私などは除け者にして伯母につきまといつてゐる取巻きがわんさとゐるので。一人など、知事の職を狙つてゐる奴がありましてね、赤の他人のくせに親戚面をして伯母にとりついてゐるんですよ……。時に、今から御出席をお願いしておきますが、と、彼はプラトノフに向つて言ひ足した。「來週、市のあらゆる階級の人々を招待して午餐會を催しますからね。」

プラトノフは驚いて眼を見張つた。彼は、まだこの露西亞といふ國には、實に不思議な人間が方々の市や兩首都に住んでゐて、その連中の生活ときてはまつたく解き難い謎であるといふことを知らなかつたのである。この手合ひはすつかり財産を蕩盡してしまひ、見渡すかぎり借金だ

らけで、もう何處からも金子の出どころはなささうなのに、午餐會だけはちゃんちゃんと開くのだ。で、午餐會に招かれた客は誰も彼も、いよいよこれが最後の催しで、あすは訖度この家の主人も監獄ゆきだらうなどと、ぼそぼそ蔭口をきく。ところが、それから十年もの月日が経つのに、その家の主人は依然として娑婆に頑張つてゐて、前よりも一層借金で首が廻らない癖に、相も變らず午餐會だけはちゃんちゃんと催してをり、招かれた客は客で、いよいよこれが最後の催しで、あすになれば訖度この家の主人は監獄ゆきだと思ひこんでゐるのである。

市にあるフロブイエフの家といふのが、これまた一つの奇觀である。けふは袈裟を掛けた坊さんが来て祈禱式を擧げてゐるかと思ふと、あすは佛蘭西の俳優がやつて来て芝居の稽古をしてゐるといふ始末だ。時には何處を捜しても麴麴の缺ら一つない日があるかと思へば、次ぎの日にはいろんな俳優や畫家連を招んで、至れり盡せりの歡待をした上、一同に莫大な贈物までするのである。時には、これが他の人間だつたら、遠の昔に首を縊るか、ピストル自殺でもしかねないやうな、切羽つまつた窮地に追込まれることも間々あつたけれど、いつも、彼のだらしない生活と不思議な形で結びついてゐる宗教心が彼を救つたものである。さういふ苦しい時にはいつも、あらゆる艱難を超越することによつて精神を養つた殉教者や苦行僧の傳記を讀むのであつた。さうすると、いつか彼の魂はなごやかになり、心は感動に顫へて、涙が兩の眼に溢れて來るのだつた。彼は神に祈りを捧げた——と、不思議なことに！——大抵いつも、どこからか思ひもかけぬ救ひ

の手が現はれるのである——舊友の中の誰かが彼のことを想ひ出して金子を送つてくれるとか、見も知らぬ旅の婦人がゆくりなく彼の身の上を聞いて、女らしいひたむきな慈悲心から少なからぬ義金を恵んでくれるとか、また何處かで、彼がつひぞ耳にしたこともないやうな訴訟事件が彼に有利に解決して、思ひがけない金子が手に入るとかするのであつた。さういふ時、彼は敬虔な心で神意の限りなき慈悲を認め、感謝のために祈禱式を擧げて、それからまたしても不檢束な生活を開始したものである。

「あの男は可哀さうですなあ、まつたく可哀さうな人間ですなあ。」と、二人がフロブイエフに別れを告げて、その村を後にした時、プラトリーノフがチチコフに向つて言つた。

「あれは放蕩兒ですよ！」とチチコフは吐きだすやうに言つた。「あんな人間は少しも同情する必要がありませんよ。」

で、二人は間もなくフロブイエフの身の上など考へることは止めてしまつた。プラトリーノフの方は、世間一般に對してもさうであるが、開き直つて、生眞面目に人の身の上など考へる人間ではなかつたからである。眼の前に人が苦しんでゐるのを見れば、なるほど同情もし、心痛もするが、その感銘はさして深く彼の魂に根ざしたものはなかつた。だから數分の後には、フロブイエフのことなどはもう考へてゐなかつた。彼は自分自身のことさへ考へなかつたのだから、フロブイエフのことを考へないのも無理はなかつた。チチコフがフロブイエフのことを考へなかつた

のは、彼の考へといふ考へが、今度こそ冗談でなく本當に手に入つた買物のことですつかり確断されてゐたからである。何といつても、これまではまるで雲を掴むやうな空想に過ぎなかつたのが、いきなり本物の、決して空中樓閣でない現實の所領の持主になつたのだから、彼も勢ひ考へ深くなり、その思惑や心構へも一層慎重になつて、自然とそれが顔附にまで勿體ぶつた表情となつて現はれた。「忍耐と努力！ 別に苦しいことでもないさ。おれはさういふものとは、いはば襦袢のお世話になつてゐた時代からの古馴染なんだから。そんなものはちつともおれには珍らしいくないさ。だがこの年になつても、まだ若盛りの頃と同じ忍耐力があるかしら？」それは兎も角どんなに吟味をして見ても、どんなにあちこち引つくり返して見ても、確かに今度の買物ばかりは何處へ出しても儲けものだと思つた。先づよささうな地面だけを分譲して、残りを抵當に入れるといふ手もある。またこの所領を自から經營することにし、コスタンジョーグロから隣人とし且つ恩人として、いろいろ助言を受けながら、彼を手本にして地主となることも出来る。それから又かういふ方法もある、（これはいふまでもなく、自分で所領の經營などしたくない場合の話だが）自分の手許には逐電したり死んだりした農奴だけを殘して、所領を誰か個人の手へ轉賣するのである。するとまた別な儲け口が頭をもたげた。つまり、この土地から永久にどろんをきめこんで、コスタンジョーグロから借りた金子を踏倒してしまはうといふのだ。實に奇態な考へで！ チチコフには初めからそんな下心があつた譯ではないが、さういふ考へが不意にひよつこりと浮

かんで、彼をじらしたり、からかつたり、胸せをしたりしはじめたのである。なんといふ不見轉な、不屑極まる考へだらう！ かういふ不敵な考へが急に人を襲ふのは、いつたい誰のせむだらう？……兎に角チチコフは満悦を覺えた——今や決して空中樓閣ならぬ現實の地主になることが出来、ちやんと地所もあれば、田地田畠も、農奴もあるのだ——その農奴も決して夢のやうな空想の中の存在ではなく、現にピンピンとして生きてゐる奴ばかりだから堪らない。彼は圖に乗つてそろそろ雀躍をしたり、揉手をしたり、しきりに一人で胸せを試してみたり、喇叭のやうに拳を口にあてて何か行進曲のやうなものを吹き始めたり、それどころか、しまひには聲にまで出して、おいブルドックとか去勢鶏とかいつた風な二三の威勢のいい愛稱で自分と呼んでみたりさへした。それでも最後には、やうやく自分一人でないことを想ひだして、急いで口をつぐみ、どうにかその不謹慎な狂喜の發作を鎮めたものである。で、プラトノフがチチコフのさうした獨語を何か話しかけられたのだと思つて、「ええ？」と訊いた時、こちらは『いや別に』と答へた。

この時、やうやく四邊を見まはしてチチコフは、初めて自分たちの馬車が、もつと前から素晴らしい林の中を走つてゐることに氣がついた。行手の右にも左にも美しい白樺の立木がずつと牆壁のやうにつづいてゐた。山毛櫨や白楊の白い幹が、眞白な木柵のやうにキラキラ輝きながら、まだつい近ごろ繁り初めたばかりの初々しい緑葉の間から、爛やかにすんなりと浮きだしてゐた。繁みの中では小夜鳴鳥が相競つて高々と囀つてゐた。草の中から鬱金香の花が黄いろい顔

をもたげてゐた。チチコフには、まだつい先程までがらんとした野原を走つてゐたのに、いつの間にかこんな美しい景色の中へ入りこんだのか、ちよつと合點が行かなかつた。木の間がくれに白い石造のお寺がチラリと覗き、反対側の繁みの蔭から鐵柵が見えだした。往還の端れに縁無帽をかぶつた一人の紳士が現はれて、節杖せうじやくだつた木のステッキを手にしてこちらへやつて来る。その前に立つて、脚のひよろ長い英國種の牡犬が走つて来る。

「おや、兄ですよ。」と、プラトリーノフが言つた。「馭者、馬をとめろ！」さう言つて彼は馬車を降りた。チチコフもつづいて降りた。犬どもは早くも互ひに舐めあつてゐた。脚の細長い敏捷なアゾールは、よく動く舌でヤルプの鼻面を舐めておいて、次ぎにはプラトリーノフの手を舐め、今度はチチコフの軀かたはらへ飛びついて彼の耳を舐めた。

二人の兄弟は抱きあつた。

「どうしたんだよ、プラトリーノフ？ このわしをさんざんな目に逢はせてさ！」と、歩みをとめたワシーリイといふ名前の兄が詰つた。

「え、どうしたつて？」と、プラトリーノフは、いつかう平氣さうに訊き返した。

「だつて、さうぢやないか！ 三日の間といふもの、お前からはウンともスンとも、何の音沙汰もなかつたんだからなあ！ ベトウフの家の馬丁がお前の馬を連れて来てさ。『どつかの旦那とお出かけになりました』と言ふのだ。せめて一言、何處へ、何の用で、どの位のあひだ行つ

て来るといふぐらゐのことは断わつておいて出たらどうだい？ ほんとにさ、よくもお前そんな眞似が出来るねえ？ この間ぢゆう、ああではないか、かうではないかと、どんなにいろいろ心配してゐたと思ふ！」

「さう、だつて仕様がないや、僕はうつかり忘れちまつたんだもの。」と、プラトリーノフは答へた。「あれからコンスタンチン・フォードロギッチのところへ廻つたんです。兄さんに宜しくつて言ひましたよ、姉さんからもね。ぢやあ御紹介いたしませう、パーウェル・イワーノギッチ、これが兄のワシーリイです。兄さん！ こちらはパーウェル・イワーノギッチ・チチコフさんです。」

お互ひに紹介された二人は手を握りあひ、更に帽子を脱つて接物を交はした。

（一體このチチコフといふ男は何者だらう？）と、兄のワシーリイは訝かつた。（プラトリーの奴は誰彼なしに直ぐ懇意になるんだからなあ。）さう思つて彼は、禮儀にそむかない程度にチチコフを眺めて、なるほど見たところ大變氣前のよささうな人物だと認めた。

チチコフは又チチコフで、やはり禮を失しない程度に兄のワシーリイを眺めて、兄の方がプラトリーノフより少し背が低くて、髪の色も濃く、男振りはぐつと落ちるけれど、その顔立に一層多く精力と活氣が溢れ、一段と濃厚篤實さに充ちてゐるのを見てとつた。明らかにこの男はあまり空想を持たない人間のやうであつた。が、その點にはパーウェル・イワーノギッチもさして注意を拂

はなかつた。

「僕はねえ、兄さん、このパーウェル・イワーノギッチと一緒に露西亞帝國を旅行して廻ることに決めたのです。ひよつとしたら、それで僕のふさぎの蟲も退散するかもしれないからね。」
 「またおそろしく早急な思ひつきぢやないか？」と、兄のワシーリイはいささか面喰らつた形で答へた。彼はもう少しで、『それに第一、初めて逢つたばかりで、相手がどこの馬の骨とも、どんなやくざとも知れない癖に！』とつけ加へるところだつた。彼は胡散臭さうな横目でじろりとチチコフを眺めたが、見れば見るほど相手の嗜み深いのに驚いた。

一同は右に折れて門の中へ入つて行つた。庭は古風なつくりで、家も、これまた餘り近頃は見かけない、高い大屋根と掛庇のついた舊式な構へであつた。庭の真中に二本の巨きな菩提樹があつて、殆んど庭の半分がその蔭に蔽はれてゐた。菩提樹の根下には木製のベンチが幾つもおいてあつた。今を盛りと咲きほこる紫丁香花や櫻桃が、四方の垣根をその花や葉ですつかり蔽ひかくして、まるで南京玉の頸飾のやうに庭のぐるりをとりまいてゐた。母屋もすつかり蔽ひかくれて、ただ入口や窓が木の間に美しく下から望まれるばかりであつた。箭のやうに眞直ぐな木々の幹を透して、厨房や納屋や穴蔵が仄白く見えてゐた。何もかもが繁みの中にあつた。小夜鳴鳥が聲高らかに繁みをゆすぶつて鳴き立ててゐた。何となく平和な愉しい情緒がひとりで魂の中へ傳はつて來た。それほどあらゆるものに、人間がみな仲睦じく暮らし、萬事が素朴單純

であつた暢氣な時代の面影が残つてゐた。兄のワシーリイはチチコフを招じて、そこに掛けさせた。三人は菩提樹の下のベンチに腰をおろした。

淡紅色木綿の美しい襦衣を着た十七八の若者が、色さまざまの、あらゆる種類の果實酒を入れた何本もの玻璃壺を一同の前においた。どろりとしてバタのやうに濃いのもあれば、炭酸レモンのやうにシュエーシュー泡立つのもあつた。若者はそこに酒壺をおくと、木に凭せかけてあつた鋤を手に持つて、果樹園の方へ行つてしまつた。プラトーフ兄弟のところには、義兄弟のコスタンジョーグロの家と同様、特に從僕といふものがゐらないで、從僕の役目をいつも園丁なり作男なりが順番に代つて務めてゐたのである。兄のワシーリイは常々、從僕などといふ特別な階級のあつるべきいはれがないと主張した。給仕をするぐらゐの仕事は誰にでも出来ることで、そのためにわざわざ特別な人間を雇つておく必要はない、どうも露西亞人といふやつは、襦衣や百姓外套を着せておく限り、敏捷によく働いて決してずぼらでないが、いつたん洋服を着せたが最後、忽ちだらしない物臭な怠け者になつてしまひ、襦衣も取りかへなければ、錢湯へなど全然ゆかなくなり、フロックを着たままごろ寝をして、その洋風のフロックの下には、蚤や虱をうじやうじやわかせるに到るといふのだ。どうやらその點で、彼のいふことは正しかつた。この兄弟の村では百姓が皆なかなか洒落た身装をしてゐて、女たちの頭巾にも一樣に金糸の刺繡がしてあり、肌着の袖には土耳其製のシヨールそつくりの縫取りがつけてあつた。『これは手前どもの家で昔から

自慢にしてゐる果實酒ですよ」と、兄のワシーリイが言つた。

チチコフは第一の酒壺から一杯ついで——それは彼がいつか波蘭で飲んだことのある菩提蜂蜜ハチミツにそつくりで、まるでシャンパンのやうに泡だち、口に含むと、瓦斯がシュツと氣持よく鼻を衝いた。「いや、まつたく甘露です！」と、彼は言つた。それから次ぎの壺からも一杯ついで飲んだ——それは一層いい味であつた。

「これあ實に飲料の王ですなえ！」と、チチコフは言つた。「謂はば手前は、あなた方の御義兄弟ウヂケイコンスタンチン・フォードロギッチのお宅では飛切り上等の浸酒をいただき、こちら様ではまた飛切り上等の果實酒を頂戴する譯でございますねえ。」

「ああ、あの浸酒も本家はこちらなんですわね。妹が秘傳を持つて嫁に行つた譯ですよ。時にあなたはどの方角へ、つまりどの地方へ御旅行なさらうといふおつもりなんですか？」と、兄のワシーリイが訊ねた。

「手前が旅をいたしますのは」とチチコフは、ベンチの上で軽く身を揺ぶりながら、片手で膝を撫で撫で、軀からだを屈めるやうにして答へた。「私用と申すよりは、寧ろ他人のためなんです。目下親戚まはりをしてゐるのでございます。勿論、親戚まはりも親戚まはりですが、一つには謂はば自分自身のためでもございまして。それと申しますのも、旅が痔疾によろしいことは暫らく



だいつ杯—らか壺酒の—篇はフコチチ

指きましても、廣く世間を知り、人の世の浮き沈みを見てまはりますのは、取りも直さず生きた書物で、謂はば第二の學問でございますからね。」

兄のワシーリイはちよつと物思ひに沈んだ。「この男は少し言葉を氣取つてゐるが、言ふことには眞理がある」と彼は思つた。で、暫らく口を噤んでゐてから弟に向つて、「なるほど、旅行でもしたらお前は元氣になるかも知れんよ、プラトン。お前の病ひといふのは要するに精神的な昏睡に他ならないんだからなあ。單純にお前は眠りに落ちてゐるだけなんだ——それも腹一杯に食ひすぎたとか、疲勞のあまり寢こんだ譯ではなく、潑刺たる印象や感銘といふものの缺けてゐるがために他ならないんだ。このわしは全然それと正反對なんだがね。わしはどうかして、かうまで敏感でなければよい、何によらず物事がかうまで矢鱈に氣に懸からなければよいと、只管念じてゐる位なんだからね。」

「兄さんは好き好んで、何でも無闇に氣に懸ける性分なんだからなあ。」とプラトンが言つた。「しよつちゆう、何かしら苦勞の種を探し出しては、勝手に心配ばかりしてゐるんだもの。」

「何も好きで苦勞をしてゐる譯ぢやないさ、それでなくても、行く先々で否應なしに面倒なことにぶつかりどほしなんだからなあ。」とワシーリイが言ひ返した。「お前の留守ちゆうに、あのレニーツインが仕掛けた悪巧みを知つてるかい？ あの男は、うちの村で毎年（赤い丘）の祭りをやる、あの荒地を横領してしまつたんだよ。第一、わしはあの荒地ばかりは、いくら金子を

積んだつて、決して手離さないよ……。うちの村の百姓たちが毎春あすこで（赤い丘）の祭りをやつてゐるのだから、あの土地には村の思ひ出が結びついてゐるのだ。わしにとつて、昔からの慣例^{じかん}くらゐ神聖なものはないから、それを守るためにはどんな犠牲だつて拂ふ覺悟だよ。」

「あの男はそれを知らないから、それでそんな無茶なことをしたんですよ。」と、プラトンが言つた。「まだ彼得堡からやつて来たばかりの、新參者ですからね。よく理由^{わけ}を話して説明してやらなきや駄目ですよ。」

「いや、あの男は知つてるんだ、何もかもよく知つてるんだ。わしは使ひをやつて事^{こと}譯^{わけ}を話させたのだが、あの男は無禮極まる返事をよこしをつたよ。」

「兄さんが自身で出かけて行つて、よく理由を説明しなくちや駄目ですよ。一つあの男とよく話しあつて御覽なさいよ。」

「いや、それは駄目だよ。あの男はいやに尊大ぶつてるんだ。わしはあんな奴のところへは行かないぞ。行きたかつたら、一つお前自身で出かけるさ。」

「それあつてもいいけれど、僕は出しやばるだけで……結局あの男にいい加減にあしらはれて胡亂化されてしまふだらうからね。」

「何でしたら、手前がまゐりませう。」と、チチョフが口を出した。「一つその經緯^{いきさつ}をお話し下さいませんか。」

ワシーリイは相手をチラと眺めて、「この先生はよつぽど出歩くことが好きなんだな!」と思つた。

「ただ先方の人物について、概念だけでも伺はせて下さい。」と、チチコフはつづけた。「それから事件の概要をば。」

「いや、こんな不愉快な用件であなたに御足勞を煩はしましては何とも相済みませんよ。その男は、まあ私の考へでは、やくざ者ですねえ。やはりこの縣下のつまらない小地主階級の一人なんです。彼得堡で相當な役どころを勤めあげ、何でもさる人物の妾腹の娘かなんと、あちらで結婚しましてね、いやに勿體ぶつてるんですよ。乙に取り澄ましてをりましてね。しかしこの邊にだつて、まんざら馬鹿者ばかりが住んでゐる譯ぢやありませんからね。別に流行が勅令でもなければ、彼得堡が靈場といふ譯でもありませんからね。」

「いや、御尤もです。」とチチコフが相槌を打つた。「で、その事件と仰つしやるのは?」

「それあ、成程あの男には土地が入用でせうさ。それならそれで、ちやんと筋の通つた話を持ちこんで来さへすれば、代りに他の地所なら、文句なしに、無償でも呉れてやりますよ……。ところが、喧嘩つばやいあの男は今もつ開雲に……。」

「では一つ、先方によく掛けあつて見たらいいと思ひますねえ。恐らくこの事件は……。いや、手前に事件を委せた人で臍を噛んだ人はありませんからね……。例へばあのベトリッシチエフ將

軍にしましても矢張り……。」

「ですけれど、あなたにあんな男と掛けあつて頂いたりしては、何とも相済まないと思ひましてね。」

「……是非これは、祕密にしておかなきやなりませんよ。」とチチコフが言つた。「あとで事を破るのは、犯罪行爲そのものより、口性ない世間の噂ですからね。」

「いや、それはもう仰つしやるとほりですよ。」とレニーツィンは、頭をすつかり横へ傾げながら答へた。

「こんなにお互ひの意見が一致しまして、まったく愉快です!」とチチコフはつづけた。「私は目下、合法的であると同時に非合法的でもある一つの事件に携はつてをりますがね、一見それは違法のやうでありながら、その實、立派に合法的なんです。農奴を抵當に入れる必要があつても、私は歴乎とした生きた農奴一頭につき二留づつもの手数料を拂ふやうな憂目は、誰にも見

★この前の草稿が二頁ほど抜けてゐて、その内容は詳かでないが、要するに、プラトノフから土地問題の調停を引受け、チチコフがレニーツィンのところへ乗りこんで行き、それが例のプロプエフの金持の伯母に取入つて知事の職を担つてゐる男であることを知り、相手を唆かして、老妾の遺産相続に關する遺書を偽造させる段取りに漕ぎつけたのである。(譯者)

せたくありません。千に一つもそんなことがあつては堪りませんけれど、もし私が破産でもした
 鴨には、それこそ所有者にとつて迷惑千萬ですからね。そこで私は、逐電したり死亡した農奴で
 まだ戸籍簿から抹殺されてゐないやつを利用してやらうと思ひついたので。つまり基督教徒と
 しての善行を行ふと共に、死んだ農奴に對して人頭税を支拂ふ負擔を氣の毒な地主から除いてや
 るといふ、一石二鳥の思ひつきなんです。ですから、本當に生きてゐる農奴の賣買をするやう
 に、ただ形式だけの賣買契約を一つ取結ばうぢやありませんか。」

(だが、こいつはずるぶる變挺な話だぞ。) さう思つてレニーツィンは、椅子に掛けたままで
 少し後ずさりをした。「しかし、それは何ですわね……いはば一種の……」と彼が言ひはじめた。

「別によくはない噂など立つ心配はありませんよ、どこまでも祕密にしておくのですからね。」
 とチコフは答へた。「それに、かうしてお互ひに信頼の出来る人間同士の取引ですもの。」

「それにしても、やはり何だか……。」

「悪い評判など決して立ちませんよ。」と極めて率直に、あけすけにチコフは答へた。「取
 引は今もお話したやうなことですし、かうしてお互ひに信頼も出来れば、年に不足もなく、どう
 やら身分にも申し分のない人間同士のあひだで、しかも祕密に行はれる仕事なんですもの。」か
 う言ひながら、彼は相手の顔を上げ上げと臆面もなく眺めやつた。

如何にレニーツィンが才氣渾發な男で、一般の事務に通曉してゐたとはいへ、この時ばかりは

ハタと當惑してしまつた。それに變挺なことから、自分で自分の張つた網に引つかかつたも同じ
 だから尙更のことであつた。彼は決して不正なことの出来る人間ではなかつたし、たとへこつそ
 りとしろ、不正なことなどする氣にはならなかつたらう。(こりやあ由々しい問題だぞ!)と
 彼は心に思つた。(刎頸の交りを結ぶなら、優れた人間とでなくちやならない! これが肝腎か
 なめな問題だ!)

しかし運命と情勢とが、まるで故意とのやうにチコフに幸ひしたのである。恰かもこの難問
 題の解決に一臂の力を貸さうとでもするやうに、その時レニーツィンの細君なるこの家の若い女
 主人が部屋へ入つて來た。それは顔色の蒼白めた、瘦せて背の低い女であつたが、彼得堡風の装
 ひをこらしてをり、おそろしく *comme il faut* (女の) の人間が好さらしかつた。その後ろから、
 まだこの結婚して間のない夫婦の優しい愛の結晶である初子の赤ん坊が、乳母の手に抱かれて連
 いて來た。チコフはピョンと跳ねあがりざま、首を横に傾げてする例の如才ない應待でもつて
 先づこの彼得堡生まれの細君を恍惚とさせてしまひ、次いで赤ん坊まで俘虜にしてしまつた。初
 め赤ん坊はワツと泣きだしさうになつたが、「おう、おう、好い子、好い子!」と言つてあやした
 り、指をパチパチと鳴らしたり、時計についてゐる美しい肉紅玉髓の印形を振つて見せたりした
 結果チコフはすっかり赤ん坊の御機嫌を取結んで、まんまと自分の手へ抱き取つてしまつた。
 それから彼は赤ん坊を天井にとどくほど高く差しあげながら、キャツキャと嬉しさうな笑ひ聲を

立てさせて、両親をこの上もなく喜ばせたものである。ところが、あんまり不意にはしやいだためか、それとも何か他に原因があつたのか、赤ん坊が急に粗相をしてしまったのである。

「まあ！ どうしませう！」と、レニーツインの細君は悲鳴をあげた。「この子は、お召物をすつかり汚してしまひましたわ！」

さう言はれてチチョコフがふと振返つて見ると、まつ新しの燕尾服の袖がすつかり汚されてゐた。

（ええ、この餓鬼め、擦撃ひきつけて斃くたつてしまやがればいい！）と、吐の中でブリブリしながら彼は呟つぶやいた。

主人も、女主人も、乳母も——大急ぎでオーデコロンを取りに駈けて行つた。そして四方八方から彼の上衣を拭ひにかかつた。

「いえ、構ひませんよ、こんなことぐらゐ、ちつとも構ひませんよ！」さう言つてチチョコフは出来るだけ快活な表情を顔に浮かべようと努めながら、「こんな純真無垢な赤ちやんに、どうして物を汚すなんてことが出来るのですか！」と繰り返したが、それと同時に吐の中では、（ちえつ、穢きたないことをしやがつて、こんな餓鬼は狼にでも喰はれて、小骨一本のこらなきやいいんだ、忌々しい！）と思つた。

この一見取るに足らぬ出来事が、主人の心を手懐けて、すつかりチチョコフの思ふ壺にはめてしまつた。うちの坊やにあんなに他意なき愛撫を示して、おまけに自分の燕尾服を臺無しにされな

がら厭な顔一つ見せないお客の申し出を、どうして無下に斷わることが出来よう！ しかしこんなことが悪例になつては困るからと、極力隠密に手續を完了することに話がきまつた。それといふのも、取引そのものより世間の取沙汰の方が煩さいからであつた。

「では、あなたの御好意に報いるため、手前も一つお役に立たせていただきますせう。あなたとプラトリーフ兄弟との紛争に、手前が一つ仲裁に立ちたいと思ひましてね。あなたは地所を要求していらつしやるのでせう？……」

第……章*

この世に生きとし生ける者は、ひたすら我がことのみ顧慮してゐる。諺にも背に腹はかへられぬといふではないか。さて、葛籠や長持の探險は上乘の首尾に終り、その遠征の結果、いろんなものが又チチコフの手箱へ流れこんだものだ。一言にしていへば、拔目なく立廻つたのである。別に盗みを働いた譯ではなく、彼が巧みに機會を利用したのである。我々は皆、多少とも何かを利用してゐる——或る者は官有林を利用し、或る者は會計の剩餘金を著服する。また或る者は旅廻りの女役者に入れあげるため自分の物まで盗み、或る者はガムブスの家具だとか馬車を買ふために百姓から搾取する。さればとて、値段の減法高い料理店だの、假裝舞踏會だの、行樂だの、ジブシイ女とのダンスだのといった、いろんな誘惑がかう世間にザラにあつては、それも何とも仕方がない。どちらを向いても、みんなが同じことをやつてをり、それが流行だとしたらちよつと己れを制することは難かしくからう——その自制が出来たら大したものだ！チチコフはもうそろそろこの地を去るべきであつたが、あいにく道路がよくなかつた。その間に市ではもう一つ別の、専ら貴族本位の定期市が立ちかかつてゐた。先頃のは主として馬市で、家畜だの、生ものだの、いろんな農産物だのが賣り捌かれて、買手も仲買商人や山師どもであつた。が、今度

の市には、ニジェゴロドの定期市で仕入れた且那衆向きの高等雜貨をしこたま商人が持ちこんで來た。露西亞人に財布の底をはたかせる手合ひがワッサと乗りこんで來たのである——ポマードを賣る佛蘭西人だの帽子を賣る佛蘭西女だのといった、汗と膏の結晶を狙ふ手合ひで、こいつらは、コスタンジョーグロの言ひ草ではないが、何から何まで食ひ盡すだけでは足りないで、おまけに地面の下へ卵を産みつけてゆく埃及蝗も同じであつた。

ただ凶作や、……の不如意のため、大多數の地主は手も足も出なかつた。その代り、凶作などに痛痒を感じない役人連は盛んに羽振りのよいところを見せた。そのまた細君連が負けず劣らず羽目をほつすのだから堪らない。最近、人間の心にいろんな新しい欲望を掻きたてるため種々雑多な書物が世上に流布され、人々は矢鱈にそんなものを讀んで、ひたすら斬新な享樂を経験することばかり無性に渴望してゐた。折りから或る佛蘭西人が、新しい社交場を開設した——この縣下ではつひぞこれまで見られなかつたやうな料亭で、恐ろしく安さうな値段で晚餐をくはせる平役人までが、いづれは請願者から取れる袖の下を目當に、繁々とそこへ繰りこんで行つたもので……。互ひに馬や馱者を誇示するやうな氣風も生じた。遊樂のためにはもう身分の上下も何もあつたものではない！……天氣の悪いのも道の泥濘もものは、洒落た輕馬車が前に後ろに飛び交はした。一體どこからこんな馬車を手に入れたのか、それは知る由もないが、彼得堡へ持つ

て行つても決して恥かしくないやうな代物である……。商人や番頭が如才なく帽子を持ちあげながら、貴婦人連に法外な値段を吹つかけてたりしてゐる。にゆうつとした毛皮の帽子など被つた鬚むぢやの商人はあまり姿を見させてゐない。どれもこれも歐羅巴人らしい風采をして、額はきれいに剃りあげ、みんな……味噌っ歯をしてゐる。

「さあさあ、いらつしやい！ 店へお入りになるだけでも結構でございます！ さあ、どうぞ且那樣！」など何處かで小僧連が喚き聲をあげる。

ところが、……歐羅巴の事情に通じた連中は、さういふ小僧たちに侮蔑の眼差を投げて、ただ時々、いかにも勿體ぶつた氣持を含めながら、『ベテン師め……』とか、『こちらには、いろんな獨逸製の生地や黒羅紗がございます』と言つた。

「蔓苔桃いろで、ピカピカと艶のある生地はないかね？」と、チチコフが訊ねた。

「極上の品がございます。」と商人は、片手でちよつと縁無帽を持ちあげ、片手で店の中を指さしながら言つた。チチコフは店の中へ入つた。商人は手早く仕切りの板を上げて、向ふ側へ姿を現はすなり、土間から天上までも届くほど堆かしく積みあげた商品の山を背に、顧客と顔を向けあつた。そして巧者に兩の手を前について、全身を軽く揺ぶりながら訊ねた。「どんな生地をお眼にかけませうか？」

「オリーヴ色か、くすんだ水色の、さうだねえ、いはば蔓苔桃に近いやうな色で、ピカピカ艶

のあるやつが欲しいんだがね。」とチチコフが言つた。

「手前どもは、請合つて飛切り上等のものばかり取揃へてをりまして、これ以上の品は文明開化の首府でもなければ決してお手に入りつてございませぬよ。これ、これ！ 上から三十四號の生地を取つておくれ。いや、それぢやあないよ、お前！ どうしてさういつもぼやぼやしてゐるんだい、まるで掠鳥みたいに！ それをこつちへ抛つてよこしな！ はい、この生地でございます！」さう言つて商人が、その布地を一方の端からさつとひろげて、チチコフの鼻の先きへ突きつけるやうにしたので、こちらはその絹のやうに光澤のある生地を手で撫でてみたばかりか、その匂ひまで嗅ぐことが出来た。

「これもいいが、わしのいふのはこんなぢやないよ。」とチチコフは言つた。「わしは税關に勤めてゐたこともあるんだから、飛切り上等の品でなくちや欲しくないよ。それにもつと赤味がかつた色で、こんな濃い水色ではなく、蔓苔桃色のが欲しいんだがね。」

「分りました。且那のお望みになつていらつしやるのは、てつきり近ごろ流行りだした色でございます。それでしたら手前どもに飛切り上等の生地がございますよ。前以つてお断り申しあげますが、お値段は相當張りますけれど、それだけに品質はもう素晴らしいものでございまして。」

歐羅巴人は商品の山へ這ひあがるやうにした。一卷きの服地がバタリと落ちた。彼は一瞬、自

分が近代人であることも忘れて、一時代前の技巧でその服地をひろげると、わざわざ店の外まで出て、日光にかざして見せながら、眼を細くして、『まったく素晴らしい色合ひですよ！ ナヴリノ風の、炎に煙の交つたやうな色の生地ですよ』と言つた。

服地はチチコフの氣に入つた。商人はこれで、『割引き値だ』と言ひ張つたけれど、尙その上に値引きをさせた。そこで器用に両手で布地が引裂かれた。そしてくるくるつと露西亞式に眼にもとまらぬ早さで紙に包まれてしまつた。紙包みは弱さうな紐でからげられたが、紐の結目だけはピンとして勢ひがよかつた。缺で紐の先きがちよん切られると、包みはもう輕馬車の中へ持ちこまれてゐた。商人は縁無帽をちよつと持ちあげた。帽子を持ちあげた譯は……で、チチコフは衣囊から金子を取り出した。

「黒い羅紗を見せて貰ひたいのだが。」といふ聲がした。

(ちえつ、フロブイエフの野郎だ!)と、チチコフは口の中で呟やいて、相手と顔を合はさないやうに背中を向けた——例の遺産相続のことでこの男と今かれこれ話しあふのは、どうも具合が悪いと思つたからである。しかし、相手は早くも彼に眼をとめた。

「おや、どうなすつたんですか、パーヴェル・イワーノギッチ、故意に私をお避けになるのぢやありませんか？ 私はずるぶんなあなたを探しまはつてゐたのです。ぜひ折入つてあなたと御相談しなければならぬ用件がありましたね。」

「いや、これはこれはお見外れいたしましたして、」と、チチコフは相手の手を握りしめながら言つた。「ええ、手前も一度あなたとお話したいと、始終さう思つてゐるのですが、頓とどうも暇がありませんのでね。」かう口では言ひながら肚の中では、(畜生、くたばつてしまやあがれ!)と思つた。が、不意に、ムラーゾフが店へ入つて来るのを見つけた。「おや、これはお珍らしい！ アフナーシイ・ワシリリエギッチ！ その後お變りもございませんか？」

「あんたも御機嫌は如何で？」と、ムラーゾフも帽子をとりながら言つた。商人とフロブイエフも帽子をとつた。

「少々腰が痛みまして、それにどうも夜よく眠られないのでございますよ。これはどうも運動不足のせゐのやうで……。」

しかしムラーゾフは、さうしたチチコフの病氣の原因などに深く立入らないで、フロブイエフに向つて話しかけた。「セミヨン・セミョーノギッチ、私はあんたがこの店へお入りになるのを見て、後を追つて來たのです。ちよつとあんたにお話したいことがあるのですが、私のところへお立寄り願へませんか？」

「ええ、そりやもう伺ひますともー」と、フロブイエフはあわてて答へると、ムラーゾフと共に外へ出て行つた。

「えいつたい何の話があるんだらう？」と、チチコフは訝かつた。

「アファナーシー・ワシーリエギッチは實に立派な賢い方でしてね、」と商人が言った。「御自分の仕事はなかなかよく心得ておいでになりますよ、どうも頭が古いですよ。商人とはいふもの、豪商で、ただの商人とは譯が違ひますからね。豫算とか反動といふものがあの人と結びついてゐて、一つ間違へば經濟恐慌になりますからね。」チチコフはもう澤山だとばかりに手を振つた。

「パーウエル・イワーノギッチ、私は方々あなたを探しましたがりましたよ。」といふレニーツィンの聲が後ろで聞こえた。商人は恭しく帽子を脱いだ。

「おや、これはこれはフォードル・フォードルイチ！」

「後生ですから、私の家までいらして下さい。ぜひ御相談しなけりやならないことがあるのです。」とレニーツィンが言ふ。チチコフはチラと相手を眺めたが——すっかり顔色が變つてゐた。商人と勘定をすまして彼は店を出た。★

「お待ちしてましたよ、セミヨン・セミョーノギッチ、」とムラーゾフは、フロブーエフが入つて来たのを見て言つた。「さあ、私の部屋へおいで下さい。」彼はさう言ひながらフロブーエフを自分の部屋へ案内したが、それは讀者にも先刻お馴染の實に質素な部屋で、年に俸給を七百留しか貰はない役人でも、もう少し小ましな部屋に住んでゐるだらう。

「どうですか、あんなのお手許もこの頃はよほどお樂になつたことでせうねえ？ 伯母さんも亡くなつたのですから、兎に角あなたの手へも幾らかころがりこんだことでせうからね。」

「さあ、何と申しあげたものでせうねえ、アファナーシー・ワシーリエギッチ！ 手許が樂になつたのかどうか私にはさつぱり分らないですよ。なるほど農奴を全部で五十頭と、三萬留の金子は貰ひましたがね、それで負債の一部を償却しなきゃならなかつたものですから——また元の本阿彌なんですよ。それは兎も角として、肝腎かなめなことは、あの遺言に卑劣きはまる改竄が加へられてゐた點なんです。あれには大變な悪事が企らまれてゐたんですよ、アファナーシー・ワシーリエギッチ！ 私が今お話をすることをお聞きになつたら、まさかそんなことがと、程度お驚きになりますよ。あのチチコフといふ男が……。」

「ちよつとお待ち下さい、セミヨン・セミョーノギッチ、そのチチコフの話よりも、先づあなたのことから承らうぢやありませんか。大體あなたのお積りでは、現在の苦境からすつかり抜けられるためには、どれ位の金子があつたら充分だと仰つしやるんですかね？」

「それがとても困難な状態なんではしてね。」と、フロブーエフが答へた。「この苦境を逃れ、負

★ 彼でチチコフは、遺言の偽造が發覺しさうだといつて狼狽するレニーツィンをなだめるが、さすがに自分も不安になつて、或る辯護士に相談することになる。その辯護士が後にいろいろと奸策を弄して、チチコフのために奔走するのである。〔譯者〕

債もすつかり償却してしまつて、極く約まましく暮らして行けるやうにするには、少なくとも十萬留は必要です——それ以上はかからないとしてですよ。結局、私には不可能な問題なんです。」

「それで、もしそれだけの金子かねがあつたら、あなたは今後どういふ風に暮らして行くお積りですか？」

「ええ、さうなれば私は、ささやかな借家でも借りて、子供たちの教育に一身を捧げるつもりです。自分のことはもう考へても仕方がありません——私の生涯は終つたも同様で、もうどこへ勤めるといふことも出来なければ、何の役にも立たない人間なんですからね。」

「すると、やつぱり又のらくらした生活をお送りになる譯ですが、どうもさういふ安逸な生活には、せつせと仕事をやつてゐる時には思ひもかけぬ、いろんな誘惑が頭を持上げるものでしてね。」

「私には何も出来ません。何の役にも立たないんです。頭はぼうつとしてしまひ、腰がツギツギ痛みます。」

「しかし、仕事もせずはどうして暮らせますかね？ 職もなく勤めもなしにどうしてこの世に生きてゐられますかね？ とんでもないことです！ 神様のお造りになつたものを一つ、一つよく御覽なさるがいい。皆それぞれ何かの役に立つてをり、めいめい己れの職分といふものを持つてゐますよ。一つの石ころでも何かの役に立つために存在してゐるのです。まして萬物の靈長たる

人間が何の役にも立たずに終るなどといふ——そんなことがあつてよいのですかね？」

「でも、私だつて全然なにもしないといふ譯ではありませんよ。子供の教育に私は身を入れるつもりなんですから。」

「いや、セミヨン・セミヨノギッチ、それは駄目ですよ！ それは何より難かしい仕事です。自分の一身を修めることも出来なかつた人に、どうして子供の教育が出来ますかね？ 子供の教育といふものは、その人自身の生活を模範にしてこそ出来るのですよ。ところで、あんたの生活は果してその模範になりますか？ のらくらと時間をつぶしたり、骨牌を弄ぶやうなことでも教へこまうといふのですかね？ いや、セミヨン・セミヨノギッチ、子供衆の世話は私にお委せなさい。今のままでは子供衆は臺なしになつてしまひますよ。一つ眞面目にお考へなさい。懦弱があんたの身を滅ぼしたのです——あんたはそれから逃れなきやいけません。何か一定の仕事も持たないで、安閑とこの世に生きて行ける筈はありませんよ！ 何なりかなり務めを果たさなくちやなりません。日傭人足にしてからが——ちやんと役には立つてゐるのですからね。どんなに安麵麴を嚙つてゐるにしても、それは額に汗を流して手に入れたものです。しかも彼等は自分の仕事に興味を持つてゐるんですよ。」

「それあもう、アフナーシイ・ワシーリエギッチ、私だつてやつてみました、どうかして己れに打克たうとずるぶん努力もしましたよ！ しかし駄目です！ もう年も取れば、何の役にも

立たなくなつてしまつたのです。では、一體どうすればいいのでせう？ 就職でもしろといふのですか？ まさか四十五にもなる私が、新米の下つ端役人と同じ卓子に就く譯にもゆかないでせう？ それに私はどうも賄賂が取れないのです——結局、自分にも具合が悪ければ、他人にも累を及ぼすことになるんですよ。ああいふ連中のあひだには、もう必らず悶といふものが出来あがつてゐますからね。いやもう、アフナーシー・ワシーリエギッチ、私は考へもすれば、やつてもみ、いろんな職業を一々吟味してみましたけれど、何一つ私に向くものはないのです。せいぜい養老院の厄介にでもなる他は……。」

「その養老院も一生せつせと働いて来た者を收容するところですからね、若いあひだ浮か浮かと遊び暮らしたやうな人には、蟻が蟋蟀に答へたと同様に、『あちらへ行つて、踊つてゐるさ！』と言ひますよ。それに第一、養老院にゐる人だつて、やつぱり精を出して働いてゐるので、決してグイストなどやつて遊んでゐる譯ぢやありませんからね、セミヨン・セミヨールノギッチ。」とムラーゾフは、相手の顔をまじまじと眺めながら、「あんたは御自身を欺いていらつしやると同時に私まで騙していらつしやるのです。」と言つた。

ムラーゾフにじつと顔を見つめられながら、可哀想なフロブリエフは何一言返答が出来なかつた。ムラーゾフには相手が氣の毒になつた。

「まあお聴きなさい、セミヨン・セミヨールノギッチ……。それでも、あんたは祈禱もなされば、

寺へもお詣りになり、また朝晩の禮拜も決してお缺かしにならないことは私も知つてゐます。朝早く起きることはあんまり好きでもなささうだが、それでも早く起きてお出かけになる——まだ誰も人の起きない朝の四時ごろからお寺へお詣りになるでせう。」

「それはまた別問題ですよ、アフナーシー・ワシーリエギッチ。私は別に人間のためにさうするのではなく、我々にこの世に生きよとお命じになつた尊いお方のためにしてゐるだけなんですからね。だつて仕方がないぢやありませんか！ 私は神様が、私のやうな者に對してもお情け深いことを固く信じてゐるのです。私がどんなに卑劣で醜惡な人間であつても神様は私を赦して下さいますし、他人が私を足蹴にしたり、無二の親友までが私を裏切つて、それもおまけに親切づくでしたことなどと廣言するやうな場合にも、神様は私を庇つて下さいますもの。」

フロブリエフの顔には悲痛の色が現はれた。ムラーゾフ老人も涙ぐんだが、しかし何も……。「では、そんなにお慈悲深い神様のお役に立つことを考へたらどうですか。神様にとつては勤勞が祈禱と同じやうにお氣に召すのですよ。どんなことでもいいから仕事をなさい、それも人間のためではなく、神様に奉仕するのだと思つて働くのです。たとへ、白で水を搗くやうな無駄な仕事でも、ひたすら神に仕へるのだと思つてするのです。そんなつまらない仕事でも、身を持ちくづした人にとつては、ためになります——骨牌で損をしたり、食意地の張つた連中と酒盛を開いたりして、俗世の塵になつんでゐる暇がないだけでも身のためになりますよ。やれやれ、セミ

「ヨシ・セミヨールノギッチー！ あんたはイワン・ポタープイチを御存じですかね？」

「ええ、知つてゐます。そして非常に偉い人だと思つてをりますよ。」

「あの人も元は相當の豪商で、財産も五十萬から持つてをりましたがね、何によらずこれはと思ふことには直ぐ手を伸ばしたものですよ。息子には佛蘭西風の教育を仕込み、娘は將軍に妻はせるといつた鹽梅でして。もう店であらうが、相場街であらうが、友達に出逢ひさへすれば、まあお茶でもといつた調子で料理屋へ連れこみ、明けても暮れても、他人に御馳走ばかりしてゐて、たうとう身代をすつてしまつたのです。搦て加へて不仕合せにも息子が亡くなり……今では御存じのとほり、私のところの支配人をしてゐます。新規まきなほしてかかつたんですよ。生活もすつかり改善されましたね。また五十萬留の取引だつて出来る身の上になりましたよ。ところが、『どうせ支配人になつたのだから、このまま支配人で終りたい』といふのです。『今では、からだの具合もよくなつてびんびんしてゐるけれど、あの頃はお腹ばかり突つ張つて、そろそろ脹満になりかかつてゐた位で……。いや、もうあんな生活は懲々です！』とね。それで、今では一切お茶も口にしませんよ。菜汁と粥が常食で、それ以外には何一つ變つたものを食べません。第一あの人の祈りがまた大變で、ちよつと他人には眞似が出来ません、貧乏人を援けるにも、これまた我々にはとても眞似の出来ないやり方してね、あれだけのことを他の人間がやるとしたら、有金は残らずすつてしまひますねえ。」

哀れなフロブーエフはじつと考へに沈んだ。

老人は彼の兩手を執つた。「セミヨン・セミヨールノギッチー！ 私があなたをどんなにお氣の毒に思つてゐるか分つて頂けますかね？ 私は始終あなたのことを心配してゐたのですよ。まあ一つ私のいふことを聽いて下さい。あなたも御存じのやうに、修道院に誰にも顔を見せない隠者がをられるでせう。あれはまつたくの善知識で、私はまだあれほど徳の高い人を他には知りませんよ。(あの人はつひぞ物をいはれませんがね)しかし人を訓す段になるといふと……。で、私はあの人に向つて、實は私の友達にこれこれかういふ人があります、尤も名前は申しあげられませんが……かうかういふ譯でひどく惱んでをりますと、事情を述べてみたのですよ。すると、じつと耳を傾けてをられました、不意に私の言葉を遮つて、『自分のことより神様の仕事に手をお貸しすることぢや。いま御堂の造營にかかつてをるけれど、祠堂金が足りませぬ。寺のために淨財を集めなくちやなりませんのぢや！』さう言つたまま、ぱつたりと扉を閉めてしまはれたのです。はて、これはどういふ意味だらうと、私は思案に暮れましたよ。どうやら訓誨を垂れるのがいやなんだらう。さう思ひながら、私は僧院長のところへ立ち寄つたのです。するとどうでせう、私が扉口へ入るか入らないに、僧院長はのつけから私に向つて、聖堂建立のための寄附金を集める仕事を委せることの出来る人間はないだらうかと訊かれるんですよ。貴族か商人出の人物で、普通の人間よりは教育があつて、この仕事を自分自身の濟度の方便だと思ふやうな人であつて欲し